

603-233

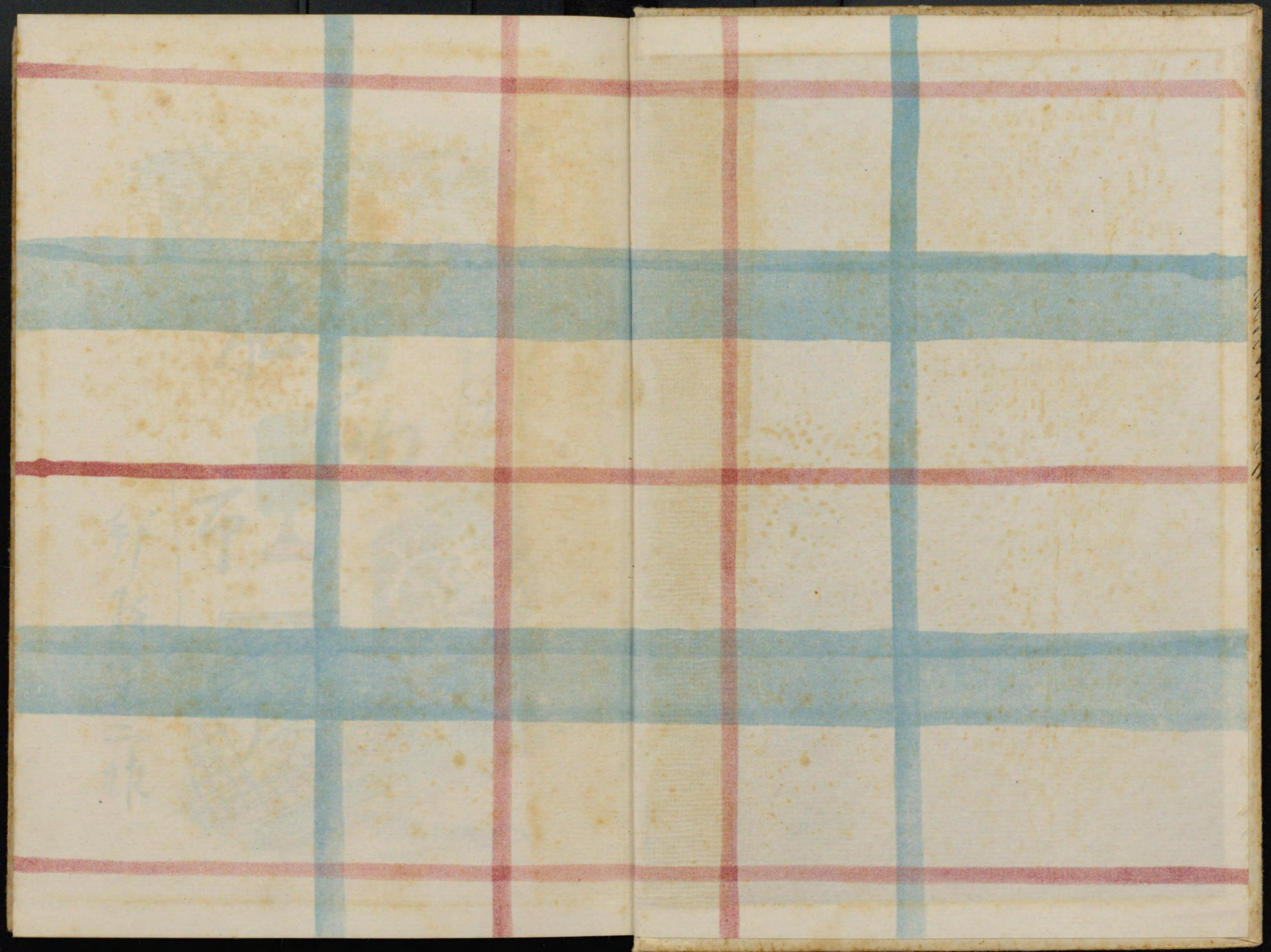


1200801701219



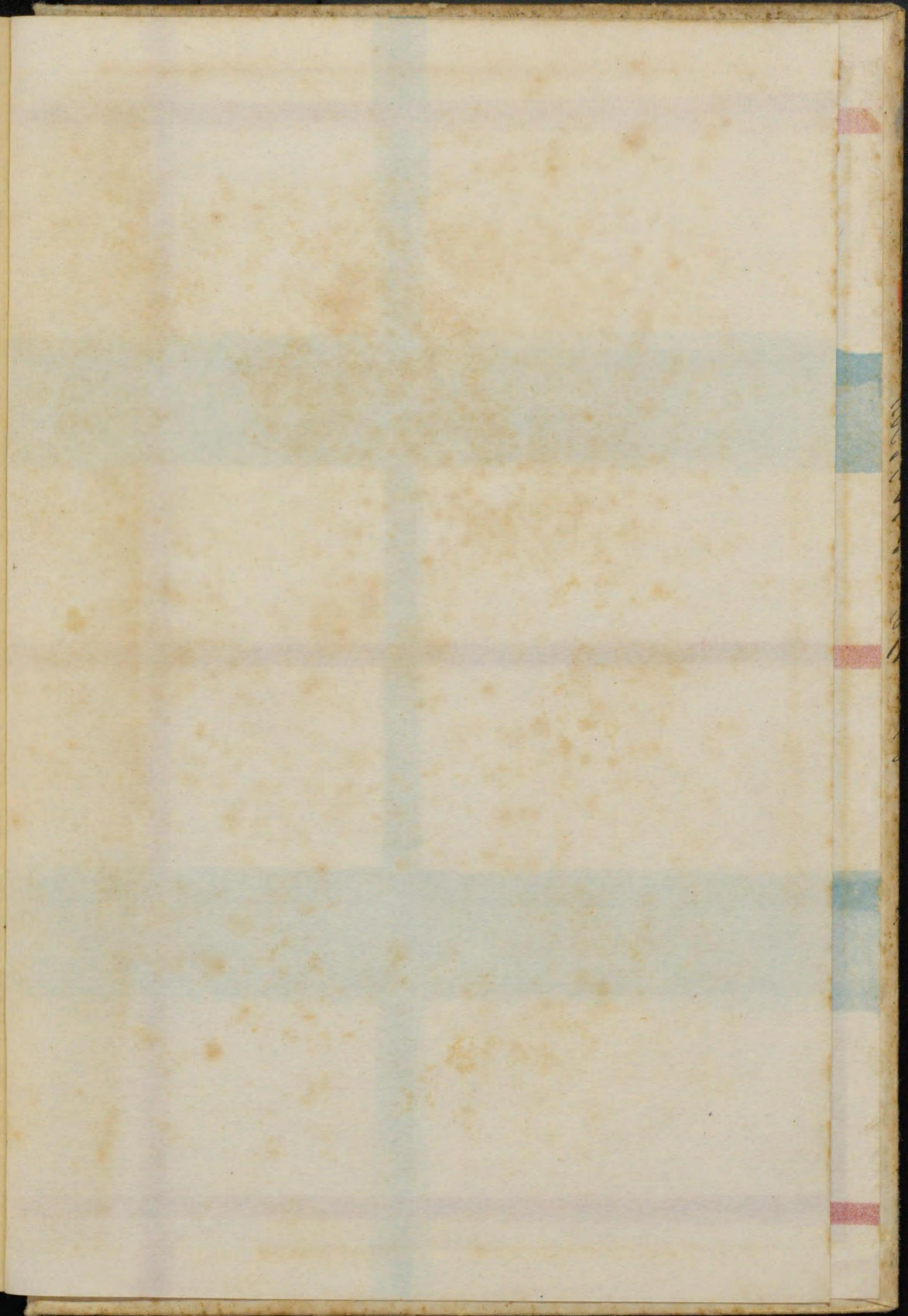
邦技完二卷

M. Kwon





邦發完二作



接吻市場

邦枝完二作
河野通勢裝幀

603
233

目次

月夜の虹	一
草の芽	四
土曜日	八
トリック	二五
父と父	一七四
旅	二九



I種
W



1200801701219

二重映寫	二六五
婦門外道	三三
光よいづこ	三六一
留針の先	四〇五
秋草	四五一
虐げられし人々	四九八
煙る太陽	五七

月夜の虹

一

東南の風晴、但し所によつては驟雨あるやも知れず。——東京地方四月十三日の天気豫報は、今年初物の『驟雨』といふ字を使つて、この半月ばかり、例年の花曇りに似合はず、珍らしく早の續いたアスファルトの埃を、一氣に拭ひ去つてしまひさうな清々しさを傳へてゐた。

「何んて待たせるんだらう。會社なんか、どうにだつて、すつぽかせさうなもんだのに。」

「もう來るわよ。さつき電話を掛けた時、あと三十分つて云つたんだから……」

「だつて、三十分は、とつくに經つちやツたぢやないの。——あいつきつと、ゆふべの油を絞られるのが、怖いんだよ。」

接吻市場 銀座七丁目の、いまだにこゝだけは、明治初年の赤煉瓦が、でこぼこなりに、そのまゝ残つてゐる歩道から、ドアをあけて三尺ばかり、カフェー・エスキモーの、一番近いテーブルに向合つて、一杯のコーヒーを、嘗めるやうに啜りながら、時折おもてを氣にしてゐる一人は、どう見ても二十は出てゐな

いらしい。

年上の方は帽子なしの断髪に、草色のワンピース・ドレス。偽物にしては上出来の、眞珠の頸飾りが、すんなりした襟元によく似合つて、膝の上で組合せた脚の線が、薄い純白のストッキングを透して如何にも滑かに流れてゐる。

年下の耳隠しは、和服だった。銀茶と紫の太い棒縞のお召に、少し時期は遅れてゐるが、こぼれ梅の模様のある、華美な友禪の羽織を着て、心持長い顎をしゃくりながら、頻りに相手をなだめてゐる。

その早口の話し振りが、如何にも小柄巧さうに思はれた。

實際彼女達に對して、何等の知識も持たない人から見たら、二人は正に、相当良家の令嬢と見えるに相違あるまい。一本の煙草を喫うでもなし、一杯のカクテルを飲むでもなし、人を待つ間のつれづれに、時折ハンド・バッグをあけて、二三度鼻のあたまを叩くくらゐなことは、今時の女と名の付く誰もが

しない筈のない藝當なのだから……

幸ひ、近所のテーブルには、人がゐなかつた。肥つたマネーヂャと、顔の丸いキヤッシャーとが、人のよささうな視線を向ける以外には、奥のテーブルに、四人ばかりかたまつてゐる慶應の學生も、斜の奥にゐる子供連れの夫婦も、左程こちらを、氣にして見るやうなことはしなかつた。

「おゑんちゃん。もう一度、電話を掛けて見てよ。」

「こゝから掛けていゝ？」

「大丈夫よ。違ふ人が出たら、直ぐ切つちややいゝんだから……」

「なら、掛けて見るわ。」

おゑんちゃんと呼ばれた耳隠しは、直ぐにキヤッシャーの傍に置かれた、卓上電話の前に立つた。

「濟みませんが、ちよいと電話を拜借ね。」

「さアどうぞ。」

「丸ノ内、四千百六十九——えゝさうです。——あらさう？なら、丸の内、四千百七十。——あ、もしく、あんた竹井商會ですか。濟みませんが、今村を呼んで下さいませんか。えゝ。こちら、今村の妹ですが……」

さういふとおゑんは、ちらと断髪の方を見て、ニヤリと笑つた。

「——あゝさうですか。五分前くらゐに。どうもお世話様でした。」

克明に料金函に五錢の白銅を一つ入れて、席へ戻ると、小聲で云つた。

「もう五分ばかり前に、出たツていふわ。」

「ほんたうかしら？」

「あの弱蟲に、嘘がつけるもんですか。——でもねえ、あすこの交換手、すつかりあたしを本當の妹だ

と思つてんのよ。」

「あんまり伶俐ぢやないね。」

さう云ひながら、斷髪はボーイを招んだ。

「紅茶を二つ頂戴。」

二

おゑんと、も一人、斷髪にワンピースの、銀座ガールの名は、腫であつた。

外科手術で有名な、醫學博士田村精一郎氏の次女として、婦人雑誌の口繪や、新聞の家庭欄を賑はしてゐた十八九の時分に較べると、家庭を離れて、ビー・エッチ・グレイ商會のタイピストを看板にしてゐるけふこの頃の方が、二つ三つの年を重ねたせいもあらうが、魅惑的な美しさに於て、長足の進歩が、彼女の上にあつた譯だ。——第一、異性に對するその眼の使ひ方だけでも、數段の閃きを増してゐるし、ちよいとそこへ立つにしても、足の甲を扁平に見せるやうな、そんな不注意なことはしてゐない。云つて見れば、あの頃は如何に自分を可愛ゆく見せるかにあつたやうだが、今では如何に自分を妖艶に見せるか、といふところまで來てゐた。
女の手首とか、脚とか、指とか、爪の色とか、襟脚とか、つまり顔以外の體の各部分が、寧ろうるん

だ眼よりも、滑かな唇よりも、男を惹きつけるに必要であることも、彼女は、はつきり意識してゐた。だから、例へばかうしてカフィーなどで、自分の仲間（といふよりも手下）と話してゐる時でさへ、腫は常に第三者に對する、繊細な注意を忘れてはゐなかつた。
「ねえ」と云ひながら腫はボーイが持つて來た紅茶の、銀のスプーンを軽く指先でおさへて、投げ込んだ砂糖を、二三回器用に掻き廻すと、おゑんを見上げた。
「でれ村のやつ、云つてやつた通り持つて來るかしら？」

「いくらのの？」

「兩手。」

「百圓？」

「さう。」

「駄目よ、半分もおぼつかないわ。」

「そんなヨタなの。下つてるねえ。瓦斯會社の重役の息子ともあらう身分でさ。」

「だつて、部屋住だもの。」

「部屋住だつて何んだつて、おんなじこツたよ。その氣さへあれア、百や二百の融通は、雑作なく出来る筈ぢやないの。」

「あれで、腫さんにや、とてもまゐつてるんだからねえ。まだ會つたばかりで、あんまりいじめちゃ可哀想よ。」

「イヤに、でれの肩を持つんだね。なんなら鬨斗を付けてもいいわよ。」

「冗談ぢやない。あたしなんか、どうモーションを掛けたつて、てんで相手にしてくれないから駄目よ。丸ビルのあの一件の時だつて、あんたがゐたからこそ、直ぐに成功したんだわ。」

「おだてツこなしさ。丸ビルは、自分の縄張のくせに。——まアそんなことは、どうでもいゝけど、でれがちあんと持つて来てくれないと、あたし、虎ちゃんにやらうと思つてる、パター・ベビの機械が買へなくなつちやうなんだよ。」

「あれだ。手放しはひどいわ。」

「だつて、さうに違ひないんだもの。——さうだ。もしかでれが、云つた通りにして來なかつたら、あいつの持つてる機械を、占領してやらう。まだ、買つて間もないやうだしするから……」

「寫眞機を占領するんなら、あたしが、うまく渡りを付けるわよ。」

「どうしてさ。さうすりや、けふどれだけ持つて來たにしても、取るだけ得なんだから……」

「二重取り？」

「あた坊さ。」

「とも知らないで、でれ村、もう來る時分だわ。」

「その代り、あいつの持つて來る、ウエストミンスターの一本ぐらゐ、金口のはげるまで吸ひつけてやるもの。」

「それだけ？」

「きまつてるぢやないの。あたしそんな安い唇ぢやないんだからねえ。」

「吸ひつけ煙草一本で百圓は、あんまり安くもないわ。」

二人は、急に聲を揃へて笑つた。

三

中央氣象臺の豫報通り、その日の東京地方は、腫の腕時計が午後三時半を指した時分から、俄に雲り始めて、思ひも掛けない激しい南風は、忽ち小砂利のやうな、雨を全市に互つて投げかけたのであつた。いふまでもなく、銀座通りも、この驟雨の中に大きな動きを見せてゐた。新聞の豫報には、驟雨あるやも知れずとあつたやうなもの、半月餘り一滴の雨にも見舞はれたことのない人達は、いづれも藤原博士を馬鹿にして、雨具の用意など、誰一人してゐる者がなかつただけに、いざ夕立となると、眼のゆく限り、新橋から京橋までの間を亂れ飛ぶ男女の群は、素晴らしい速度だつた。

流しの圓タケが、こゝぞとばかり客の吸収に努力すれば、各店舗は殊更間口を廣くして、雨宿りの便を計りながら、しかも唯では出憎い客の心持を、巧に捕へて、たとへシャボンの一つでも賣らうと努める。殊に表通りに軒を列べた喫茶店は、紅茶一杯で晴れ着を庇はうとする女客で、忽ち満員の盛況を呈するに至つた。

カフエー・エスキーモも、この例に洩れなかつた。今まで三組ばかりの客しかゐなかつたテーブルは、忽ち一個の空席もないまでに充實して、その過半数を占める女客の饒舌が、耳を聳するばかりに室内を壓した。羽織の汚點を氣にする者、着物のハネを調べる者、スカートのちぢれを見詰める者など、化粧の次に衣裳を大切にす現代女性の心持が、氣の毒なくらゐる、そこに展開され始めた。

瞳とおゑんとは、遂に辛抱し切れなくなつて、啣へた細巻の五色煙草ミス・ブランシェの煙の間から、この光景を見守つてゐた。自分達も同じ女性でありながら、殊に瞳には、着物など矢鱈に大事がる人達を見ると、軽い反感さへ起るのだつた。——これがイヤになつたら、あれを買ふ。しかもそれには、自分の努力など少しだつて要るのではない。男から——頼みもしない男からの贈り物で、すべての用が足りるのだ。キッスなんてそんな必要以上のお禮など、してやることは毛頭なかつた。眼で、ほんのちよいと、氣を引くやうな流し目で見てやれば、どんなしかつめらしい男も、至極簡單なものだつた。——「三越で、帯の陳列會があるさうだから、見に行きませんか」とか、「松屋で繪羽模様の會があるけど、御希望

の物があつたら、構はず×番の賣場へ、私の名を云つて、取つて下さい」とか。勿論男の目的に、二つはないのであらうが、さうしたことに金を惜しまない點に於て、あらゆる男が、瞳には、悉く善良過ぎるくらい善良だつた。——だから、親をせびつて、多くもない月給のうちから、やれ錦紗だ、それお召だと買つて貰ふお嬢さんの、腕のなさには、彼女は時々、叱つてやりたいやうな氣持さへ、起らずにはゐられない氣がした。

「失敬々々、とても待たせて。」

さう云ひながら、スプリング・コートをびしょくにして、飛び込んで來たのは、先刻から、二人が待ちわびてゐたで、れ村事今村恒彦だつた。

「いゝえ、あたし達なんか、別に用がないんですから、構やしませんけど、……まあ、とても濡れましてのねえ。」

瞳はちよいと腰を上げてかういふと、ハンド・バッグから、眞新しいハンカチを取り出して、そのまゝ今村の肩へ持つて行つた。

「こんなに、絞るやうに濡れてますわ。」

「いゝえ、もう構はないんです。——あ、ハンカチを濡らしちやつて、いけないなア。そんなことをしちやア。——外套なんか、構やしませんのに。」

「でも、濡れたまゝにしとくと、毒ですわ。」
 「ぢやア脱ぎませう。」
 「どうなさいますよ。」

今村は、なかばテレたやうな様子で、おゑんに外套を脱がせて貰ふと、腫の隣りへ腰をおろした。

四

「でも、女の人を待たせるなんて、こんな失禮なことはありませんね。僕は實際、いらくするほど、気が急いでたんですが、何しろ半月前に入社したばかりですからねえ。あんまりサボると、あとのたゝりが怖いんで……。」

「まア、なんて弱氣なの」と、おゑんはわざと蓮葉に云つて「あんた、コーヒー？ 紅茶？」

「僕、紅茶。——あなた方は？」

「如才なく、もう御馳ンなつてるわ。」

「何をいふのよ、おゑんちゃん」腫はちよいとたしなめるやうにおゑんの方を見て「そんな不良少女のやうなこといふと、今村さん、もうつき合つて下さらないわよ。」
 「大丈夫ですよ」と今村は、あわてゝ遮つた。

「遠慮なんか抜きの方が、却て親しみがあつて、僕は賛成だな。——腫さんもつとどゞくばらんに、云つてくれた方がいゝんだけど……。」

「まア、あたしちつとも、遠慮なんかしませんわ。だつて、あんな厚かましいお願いをしたくらゐなんですもの。——ほんたうに、申譯ありませんでしたわねえ。」

テーブルの上に置かれた、今村のシガレット・ケースから、ウエストミンスターを軽く取り出した腫の指先は、直ぐにハンド・バッグのボタンを開けて、ライターをはじいてゐた。

「こんなことして差上げちゃ、いけないかしら？」

「有難う。」

それでも今村は、何か氣が差すやうに、ちよいと周囲を見廻してから、腫の付けた煙草を、自分の口へ持つて行つた。

おゑんは、すかさず口を挟んだ。

「腫さんは、こゝへ來てからずつと、あんなことをお願いして、今村さんにお氣の毒だつて、云ひ通しなのよ。」

「そんな、そんなこたアありやしませんよ。それより、お氣の毒なのは、僕の方なんですけどねえ。——」
 「どう？」と云つた表情が、素速くおゑんの顔から、腫の眼先へ流れた。

「どうしてですか？」

「あなたの御希望通りに、して上げられないんで……」

「あらさう？」おゑんは、殊更「さう」のアクセントに失望の調子を含ませて、今村を見上げた。「駄目？」

「駄目ぢやないんだが、どうしてもあれだけは纏まらないもんだから……」

さう云ひながら、今村は右のポケットの、洋封筒を取出すと、そのまゝおゑんの方へ差出した。

「實際僕、これツばかり出しちや悪いのは知ってるんだけど、どうにもならないんでね。お約束の半分だけ持つて来たんですから……君から、瞳さんに上げて貰はうと思つて……」

おゑんと瞳との視線は、稲妻のやうに動いた。と、瞳は微笑しながら頷いた。

「半分でも、その半分でも、あたしの方からあんな無理をお願いしたんですもの、結構ですわ。」

「勘忍してくれませんか。」

「まア勘忍だなんて、勿體ないこと仰しやらないで。——ほんたう云へば、一度や二度お目に掛つたあなたに、こんなお願い、出来た譯ぢやないんですけれど……」

「僕實際、あなたが僕を信じて下さつたればこそ、頼りに思つて、人に云へないこと迄、云つてくれたんだから、本當なら、どんな思ひをしても、用立てゝ上げなけりやいけませんが、何しろ母が違ふもんですからねえ。金のことゝいふと、なかく自由にならないもんで……」

「そんなにまで、御心配かけちや、あたし申譯ありませんわ。お願いしただけであれば、それに越したことはないにはないんですけれど、それアどなたにだつて、御都合がお有りなんだから……」

「瞳さん。兎に角、こゝを出ませうよ。」

おゑんが、突然かう云つた。

五

それから一時間の後、瞳とおゑんと今村との三人は、人形町裏のバー・ピラミッドの二階で、テーブルを圍んでゐた。今村は、大して飲める口ではないのであらう。既に首筋のあたりまでまツかにしながら、しかも二人に強ひられるがまゝに、辛い思ひを拒みもならず、ちびりくと、キング・ジョージのグラスを嘗めてゐた。

瞳とおゑんとは、初めのうちこそ、チンザーノか何かでお茶を濁してゐたが、やがて辛抱が出来なくなると、同じやうにウキスキーを注文して、既にその三杯目に掛つてゐたのだつた。

かうなると、もうお互にお嬢さんではなかつた。なかばは今村を渾名通りの「でれ村」として、扱ひ始めた氣持にも因るであらうが、それよりも、次第に廻つて来るアルコールの勢ひが、二人をいつまでも、上品に装はせてはおかなかつたのだ。

「いままさん、ちツとははしやいでよ。景氣が悪いぢやないの。」

「ほんたわ。こゝは銀座と違つて、いくら騒いたツていゝんだからさ。——ねえ若ちゃん」と、おゑんは側にゐた女給の方を顧みて「いゝわねえ、騒いでも。」

「どうぞ。——今夜はほんとに、静かなんですから、世直しに、みなさんで、たんと景氣を付けて戴きたいんですの。」

「ぢやア唄はうか、ひとつ。……」

今村は、伊勢海老のやうに赤くなつた顔を、天井へ向けて唄ひ出した。

若き血に燃ゆるもの

光輝満てる我等

希望の明星仰ぎてこゝに……

「あら、塾の應援歌？こんな時、野球の歌なんて色消しぢやないの。」

「しかし僕、外の歌を知らないんだから、仕方がないぢやないか。」

「いくら知らないツたつて、せめて東京行進曲ぐらゐ、唄つてよ。」

「おゑんさんは、西條八十びるきかい。」

「ひるきツて譯ぢやないけど、なんとなくセンチでいゝと思ふわ。——ほら、あの、泣いてふみ書く人

もあるツて、あすこなんか、斷然同感だもの。」

「およしよ、くだらない。あんな安ッぽい唄に感心してちや、估券に拘はるぜ。たとへ女性でも、理想はすべからく、もつと高く持つて貰ひたいな。」

「お氣の毒さま、女は理想だけぢや、御飯が食べられないの。」

「お馬鹿さん」と、瞳がおゑんの言葉を遮つた。「下卑たことは云はないですよ。あんた直ぐに、地を出しちやうから駄目よ。」

「いゝわよ瞳さん。つき合は、生地のままに限るんだから。……」

「さうだ。つき合は生地のままがいゝ」と、今村は我が意を得たと云はぬばかりに、調子よく卓を叩いて、僕も、もう一杯飲む。」

「大丈夫？」

「馬鹿にしちやアいけない。男が女に負けてたまるものか。」

「嬉しい。その意氣を忘れないでね。あとで、とてもいゝところへ連れてツて上げるから。……」

「どこだい？」

「それア、天機洩らすべからず。——但し、入場料一人前五圓合せて十五圓は、あんたが持つんだわよ。」

「なんて気が小さいの。十五圓、とても安いもんだわ。ねえ」と、瞳の方に眼をやつて「今夜これからいまさんを、あすこへ連れてかない?」

「さうね。でも、突然行つていゝかしら?」

「あたし、ちよいと電話で聞いて見るわ。」

おゑんは、立上ると、直ぐに下へ降りて行つた。

「どこへ行かうと云ふのさ、瞳さん。」

「いゝところ。あなたのととても喜ぶところなの。」

瞳はさう云つて微笑しながら、入場料の前金、合せて十五圓を、今村の手から受取つた。

六

「でれ村、とても嬉しがツちやうわよ、きつと。」

「さうかも知れない。——でもあいつ、いま紙入から出す時見たんだけど、まだ相当持つてるんだよ。」

「あたしもさう踏んだの。だからあすこへ連れてツて、歸りにみんな、頂戴しちやはうと思ふのよ。」

「あんたは、悪だね。」

「だつて、みんな瞳さんの爲めぢやないの。」

「あたしの爲めはないわ。——そんなこと云つて、でれ村をだしにして、自分が見たいもんだから。……」

「まアひどい。」

「ひどかないさ。あんた、あの張にまるツてるんぢやないか?」

「さう云やア、さうかも知れないわね。」

「あれだ。いくらがお出しよ。」

「どういたしまして。——おツとでれさん歸つて來たと。」

手を洗ひに行つた今村が、蹠蹠として上つて來るのを見ると、二人は急に口をつぐんでしまった。

「さ、瞳さん。僕を今の十五圓の所へ、連れてツて貰ひたいね。」

「急いぢや駄目よ。ちやんと時間があるんですから。……」

「そんなことを云つて、逃げるんぢやない?」

「憚りながら、あたしそんな、卑怯なことはしませんの。」

「ほんたうよ。——いまあたしが、電話を掛けといたんだから、大丈夫よ。でもそんなにいふンなら、兎も角こゝ出ませう。」

おゑんは、わざと自分のハンド・バッグから、十圓札を一枚取出すと係りの女給に渡した。

「おつりはいゝのよ。」

「そんなに？」と、今村はびつくりしたやうにおゑんの方を見て、「いやにはづむぢやないか。ブルジョアのお嬢さんは違つたもんだ。」

「あたし達人氣商賣なの。——ねえお若さん。」

「済みません、ほんたうに。」

お若と呼ばれた女給は、さう云つてまた一つ軽く頭を下げた。

「それからちよいと、ついでに自動車一臺云つて頂戴な。」

「かしこまりました。」

「あのパッカードを使つてる家がいゝわ。ほら、何んとか云つたわね？」

「富士ですか。」

「さうく富士自動車。」

すると女給は、直ぐに詰襟のボーイを呼んで、自動車の電話を依頼した。

「どちらへお出かけですか？」

「それだけは、いくらお若さんにでも云へないわ。」

「まアお楽しみですわねえ。」

「お楽しみどころぢやないの。とてもお苦しみなよ。」

「あんなことを仰しやつて。」

「ほんたうよ。——ねえ瞳さん。あすこちつとも、お楽しみなんて所ぢやないわねえ。」

「さア、どうかしら？ あたしにやさうだけど、おゑんちゃんには違やしない？」

「まだあんなこと云つてるわ。そんならあたし、行かなくツてもいゝわ。」

「瘦我慢はおよしよ。胸が頼えるほど行きたいくせにさ。」

「そんないゝ所？」と、今村は思ひ出したやうに、瞳の前へ顔を突出した。

「あなたには、いゝとこですわ。でも、あたし達には、あんまりいゝとこぢやないんですの。大體が男の行くところなんですもの。」

「しめた！さう聞いたら、一刻も速く案内してくれたまへよ。」

「直ぐですわよ。自動車さへ来れば、わけないんだから……。」

「いやに氣を持たせるんだね。」

「あなたの想像以上の所なんですから、まア楽しみにしてらつしやい。」

そこへ、ボーイが自動車の来たことを知らせた。瞳とおゑんとの顔を、颯と稻妻が掠めた。

今村は先へ立上つて、スプリング・コートを小脇に抱へた。

どこをどう自動車がつつ走つたのか、上氣してゐる今村には、まったく記憶がなかつた。が、たしかに自動車は十五分近くも市中を走つてゐたものゝ如く、或は明るい街の中が、或は暗い河岸縁が、走馬燈のやうに車窓に映つては消え、消えては映つた。

最初おゑんが、運轉手の耳許に口を寄せて、何事かを囁いた時、今村は酔つてゐながらも、おのづと湧いて来る好奇心から、せめてその方向だけでも知りたと思つて、ステップに片足を掛けたまゝ暫らく耳を澄ましてゐるが、早口の、しかも極めて小さいおゑんの囁きは、遂に聞くことが出来なかつたのだつた。

「目的地はまだなのかい、おゑんちゃん？」

「もうぢきよ。」

「一體どこなのさ？」

「東京のうちよ。」

「何んだか、とても遠くへ来たやうな気がするなア。——もう三十分も走り續けてるぢやないか。」
「大袈裟なこと云はないの。三十分あれア、横濱まで行つちやうわ。」

「だから僕は、横濱へでも行くんぢやないかと想つたんだ。」

と、その時瞳が、運轉手に呼び掛けた。

「その橋の手前で、ストップして頂戴。」

「へい。」

自動車が停ると、一番先に瞳が降りて、おゑんから今村が續いた。

「あ、あんな船がある。——やつぱり横濱ぢやないか。」

今村の眼には、直ぐ眼と鼻の先に浮いてゐる、舊式の帆船が映つた。

「もつと、よく眼をあいて見て頂戴よ。こんな横濱があつて？」

「場所なんか、どこでもいゝぢやないの。あんたは黙つて、あたし達に付いてらつしやれば、いゝんだから。……」

瞳がさう云つて先に立つた。

「變だなア實際。」

今村は呟きながら、二人の後に付いて行つた。——橋を渡る時、彼はそこに、一人の乞食が眠つてゐるのを見た。

それでも二丁ばかり歩いたであらう。先に立つた瞳は、ふと立停ると、鐵屑を賣つてゐる店の、狭い

角を右へ曲りながら、今村に云った。

「あなた東京で生れたといふ癖に、ちつとも東京の地理を、御存じないのねえ。」

「どうして？」

「だつて、こゝを横濱だなんて、滑稽ぢやありませんか。——東京も東京、築地の一角ですわ。」

「築地？」

「どうよ。明石町河岸ぢやありませんか。」

今村は、何んだか狐につまゝれたやうな、不思議な氣持で、あたりを見廻した。雨上りの、晝のやうに明るい月光の下に、いくつかの帆柱の間から、月島の工場の煙突が、林立して見えた。

「お判りなつたら、いらつしやい。」

二十間ばかり行つた所に、黒塀があつた。瞳はそこまで來た時、急に思ひ出したやうに、ハンド・バッグから煙草を出して銜へた。

「こゝからは、ズツと狭くなりますから、外套を破かない様に、氣をつけないと。……」

實際、道は狭かつた。

二人並んでは勿論のこと、一人でも、大手を振つては歩けさうもなかつた。幸ひ月夜だからいゝやうなものゝ、もしこれが闇夜だとしたら、到底薄氣味悪くて、進む氣にはなれなかつたであらう。

右側は、コンクリートの塀だつた。左側は、いづれも軒の低い長屋だつた。しかもその長屋には、人が住んでゐるのかわらないのか、一軒として灯の漏れる家になかつた。

瞳もおゑんも、こゝまで來ると一言も發しないので、今村も、何か云つては悪いやうな氣になりながら、黙つて歩いた。しかもこんな所に、それ程自分の心を探へる、何があるだらうとの、一種の不審さが、漸く酔の冷めて來た頭に浮ぶのを押へて、彼は殊更靴音を忍ばせた。

八

おそらくそれが、モダンの尖端を歩いてゐる、生粹の東京人だつたにしろ、銀座からは目と鼻の先に在る、明石町のこんな所に、かくも不思議な路地があらうとは、誰も想像し得るところではあるまい。まして學校こそ出たやうなものゝ、會社に這入つて僅かに半月、イツぱし脊廣服の着心地は心得たにしても、斯くの如き不思議な存在は、今村に取つて、唯々驚異でなければならなかつた。

「どう？ 珍らしいでせう。」

その長屋と、コンクリートの塀に囲まれた狭い路地を、二三十間歩いたと覺しい頃、突然瞳が、振り返つてかう云つた。

「一體、この道はどこまで續くんだらう。」

今村は、何か西洋物の探偵映畫の中へでも、引つ込まれたやうな氣がして、一步々々の靴音さへ、遠慮がちに踏みしめて行つた。

「どこまでと云つて、いまあなたに説明してあげても、はつきり頭に浮んで来るやうな所ぢやないの。あたし達の間では、こゝを夢幻道と呼んでるくらゐですもの。」

「ムゲン道？ ムゲンは、限りなき道ですか。」

「ゆめまばろしの道よ。——この道は、まだくなく、盡きやしないわ。もう今來た位歩かなければ……。」

「そんなに？」

「驚いたでせう。」

「實に不思議だな。いくら歩いてても、ちつとも背景が變らないんだから……。」

「そこが夢幻道の所以よ。まア見て、御覽なさい。そのうち益々驚くやうな事に出合ふから……。」

三人の靴音は、この月下の細い路地の中を、こつくと進んで行つた。

「こゝよ。」
先頭に立つた瞳は、振り返つて今村に命ずるやうにかういふと、電燈の付いてゐる（實際これが、この路地内に於ける、唯一の電燈だが）塀の下へ佇んでしまつた。

「こゝ？」と、今村は鸚鵡返しに呟きながら、自分も、更に背後にゐるおゑんを顧みた。

「どうなの。」

「入口は……」

「黙つて、頂戴。」

瞳はちよいとあたりを見廻してから、細い電柱の下にうづくまつて、かるくどこかを押したやうだつた。と、やがてそれに對する合圖であらう。殆ど聞き取れるか取れないくらゐのベルの音が、地の底から聞えて來た。

「二分開、こゝで待つよ。」

今村はそれには答へなかつた。答へなかつたのではない、答へられなかつたのだつた。——大川の空を、靜かに汽笛の流れるのが聞えた。

やがて、どこからともなく、云ひ合せたやうな三人の沈黙を破つて、重い靴音が聞えて來た。と、思ふ間もなく内部から、極めて流暢な伊太利亞語の發音で「chi ce……」（「あなた？」）と訪ねる聲がした。

「Io Hitomi (あたし、瞳よ)。」

瞳の唇からも同じ伊太利亞語の、かうした返事が發せられた。

「Oh signorina……」

するとこれはまた、何んといふ意外な出来事であらう。たしかに厚いコンクリートの塀に相違ない場所が、丁度芝居のせりだしのやうに二つに割れると、中に六尺もあらうかと思はれる、丈の高い印度人が、赤いトルコ帽を斜に冠つて立つてゐた。

「しばらくでしたね、お嬢さん。」
更に意外にも、その印度人の挨拶は、少しの混り気もない日本語ではないか。
「今夜は、めづらしいお客さんを連れて来たのよ。」
「それはよろこぞ。」

三人が這入ると、コンクリートの塀は、再び元のやうに閉ざれてしまった。少し下り気味になつてゐる内部の小道は、晝のやうに明るかつた。

九

瞳が、いくらかのチップを印度人の手に握らせると、そのまゝ三人は、黙々として、螺旋形になつてゐる道を進んで行つた。しかも今村は、いまはまつたく酔から醒めて、奇怪極まる現實の出来事に、色々想像を回したが、この先如何なる場面が展開されるかは、到底推察することが出来なかつた。
「今晚、もう幾度済んだの？」

「六時に一回。」

「それツきり？」

「さう。」

「ではまだ梅香は、そんなに疲れてないわねえ。」

「とても、非常な元氣。」

瞳は印度人との話を中止して、今村の方を振り返つた。

「なんのことだか、判つて？」

「判らない。」

「想像も付かないこと？」

「まるで。」

「ほゝゝ、随分血の回りの悪い方ね。——だけど、その時まで判らない方が、却て興味があつていゝわ。」

「しかし、危険は絶対にはないですか。」

「危険なんて、高が見世物ぢやないの。」

「見世物？」

「さうよ、しかも痛快なもの。夢のやうなもの。——たゞ、あんた興奮しちや駄目よ。」

時間にして、それでも三分間ぐらゐ歩いたであらう。ふと先に立つた印度人が立停つて、瞳に云つた。「五分間で始めます。梅が仕度の出来る迄お待ち下さい。」

そして天鵞絨の、黒いカーテンの中を指した。

「さア這入りませう。」

瞳に續いて、そのカーテンを潜つた瞬間、今村は思はず「あツ」と叫ばずにはゐられなかつた。

なんとといふ凄艶さ。なんとといふあでやかさ。——海底をそのまま模したガラス張の室内を、盛んに泳ぎ廻る三人の裸女を見た刹那、今村は危く倒れやうとする身體を、近くのソファに支へたのだつた。全身に糸をも纏はない三人が、各自媚態を盡して、或は藻にからみ、或は互が相抱いて戯れる有様は、そのいづれもが、均衡のとれた混血児だけに、いふにいはれぬ美しさがあつた。

が、瞳はこれを見ながら、今村に云つた。

「これはまだ、ほんの前藝よ。お料理で云へば、前菜のやうなものなの。いまこの幕がおりると直ぐに、目的の梅香が出て来るから、それを見て御覽なさい。それこそ素晴らしいから……。」

「梅香てなんなの？」と、今村は、はや夢のやうな氣持で訊ねた。

「支那人の娘よ。こゝへ来る人の誰もいふことだけど、世の中に、これくらゐ綺麗な娘はゐませんわよ。どうせマネーヂャが説明するでせうけど、年は十八、背丈が五尺三寸、體量十四貫三百。そして蘇州の

生れだといふのよ。よく日本でも昔から、玉の肌雪をあざむくばかりツていふでせう？ でも實際に見

て、その形容詞以上だと感心させられるのは、梅香よ。——ねえ、おゑんちゃん。」

「本當よ。美人といふよりも、なんだか生きた人魚を見るやうな氣がするんですものねえ。まったく、女でもたまらなくなるわ。」

今村は、眼先がちら／＼するやうな氣がして、正面を凝視してはゐられなかつた。

と、この時海底の幕は閉られて、その黒天鵞絨の幕の前に、靜かに現はれたのは、梅香と偉大な體軀の、張といふ青年とだつた。梅香は斷髪に眞紅のパジャマ。青年は、そのはち切れるやうな胸から背へかけて、虎の皮を纏つてゐた。

今村はもとより、流石に瞳もおゑんも、こゝまで来ると、一言も發しなかつた。舞臺の二人は、觀客席の方を見ると、丁寧／＼と頭を下げた。

十

梅香と張とが、丁寧／＼と頭を下げた時、續いて現はれたロシア人のマネーヂャは、おぼつかない日本語で、二人の略歴と、これから演ぜらるべき、一つの物語に就て説明した。

——張の扮してゐる青年は、永い年月、印度の砂漠に住んでゐる虎の精であつた。彼は常に、月明の

夜になると、獨り泉のほとりに出ては、そこを旅する隊商の中から、世にも美しいをみなを探し求めてゐたのだつた。が、けふまで彼は一度として、己が夢に描いてゐるやうな麗人に、出逢つたことがなかつた。しかも彼は、一兩日前に至つて、遂にその目的を達することが出来た。彼は駱駝に乗つて旅する隊商の後を追つて行つたが、二日二晩その後を追つた擧句、遂に三日目の晩に天幕に忍び寄つて、寝てゐる彼女を奪つて來たのだつた。そして彼が彼女に接吻しようとするところから、この舞臺は始まる。——といふ意味であつた。

全世界のあらゆる人種のうちで、支那程美人を生む國民はあるまい。しかもそれは晉に健康美ばかりではない。太陽のないところに生れた敗類的の美が、渾然として全身に満ち溢れた。と、いひ得る美しさを持つてゐるのだ。人の力の盡せる限り、ありとある技巧を集めた、人巧的自然美といふものがあるとするれば、それは正に、支那婦人の持つ美でなければならぬ。

梅香はその支那婦人の中での、選ばれた一人であつた。(だから作者は、こゝでくどくどと、彼女の美に就て述べる必要はないと思ふ。その如何に美しいかは、讀者の想像にまかせれば足りやう。——)

青年は、いきなり彼女の手首を掴んで引寄せた。

彼女は、それを拒んで身を引いた。が、青年の力は、容易に彼女を放しはしなかつた。

青年の手は、彼女の腕にかゝつた。と、同時に、彼女のパジャマは破れて、磁器のやうな半身が月光の

下に現はれた。

彼女の指は海棠の花弁のやうにおのゝき、羞恥は全身に溢れて、聲を立てながら、再び逃げようとした。

忽ち青年の手は、彼女の脚に觸れた。

おゝ！そこに現はれた脚線の、何んと美しいことよ。そして青年と彼女の争闘のうちに、青白く照し出された梅香の全裸の姿——

虎の精である青年張は、暫く彼女を凝視してゐた。が、やがて徐ろに近寄つて行つた。

統のやうな梅香のたゞずまひ。——しかも月下に亂れた髪は、淺く頬にかゝつて、凄艶いふばかりな

い。

青年の腕は、彼女の胸元へ行つた。と、思ふ間もなく、彼女の身體は宙に浮いた。牡丹のやうに燃え盛つた彼の唇。——あゝ遂に、その唇は、梅香の乳房に。——

彼女は悶えた。そして泣き叫んだ。が、青年の唇は、そのまゝ離れようとはしなかつた。

「今村さん、如何？」

瞳は、茫然と(といふよりも、恍惚と)してゐる今村を顧みた。

「あゝ！」

今村は何も云へなかつた。

梅香の苦痛と恐怖の叫びは、次第に静まつて行つた。青年の顔には、微笑みが浮んだ。しかもなんと、いふ不思議なことであらう。彼女の腕——蛇の如く美しい彼女の腕は、恰も溝が頭を垂れてゆくやうに、おのづと青年の頸へ捲き付いて行くのだつた。

全身——まつたく残る隈なき彼女の裸身に向つて、青年の舌は静かに滑りはじめた。何んといふ妖奇なシーンであらう。彼女は呻きの裡に青年の手に縋つて悶えた。

喜悅！ 歡樂！

と、青年は突然、彼女を大地へ投げつけたのであつた。

見ずや、その姿態。——青年の革の鞭は閃いた。と、同時に、彼女の裸身は、大地の上に悶えた。

十一

極まりなきエロチックな場面は、なほも二人の面前に續けられた。

青年の鞭の下に在つた梅香は、長い呻き聲をあげながら、白蛇のやうに全身を波打たせて、大地の上をのたうち廻つてゐたがやがて、苦痛が静まると、再び鞭を求める如く、閉ぢた眼を恍惚と見ひらいて、張の顔を仰いだ。その眼には限りなき喜悅の微笑さへも窺はれた。

するとまた青年は、鋭く鞭を振りおろした。薄紅を刷いたやうな梅香の裸身は、更に鞭の下に波を打つてひいと叫ぶ、苦痛と愉悅との籠つた彼女の呻き聲は、地の底から湧き起つて来るやうに、邊りに響いて行つた。

今村と、そして瞳とおゑんとの視線。——しかも張が鞭を振りおろす度に、一層うねりを急にしてゆく、生きた大理石。——

「あゝ！」

さう苦しさに呻いた今村は、蒼白になつた唇を烈しく痙攣させながら、隣りに列んでゐたおゑんの手首を、力強く握りしめた。その手は亢奮のために、風に慄へる梢のやうに戦いてゐた。

と、おゑんは素速く、握られた手を振り拂つた。

「駄目よ、これくらゐのこと。——しつかりして頂戴よ。」

しかし今村は、もはやそのまゝ冷靜を装つてはゐられなかつた。

「こんな慘酷なことが、またとあらうか。こんなグロテスクな現實が……」
「静かにしてよ。慘酷でも何でもないぢやないの。——あたしもあゝやつて、あの張さんに打たれたいくらゐだわ。」

おゑんの視線は、寸時も張の體から離れなかつた。

仕方なしに、いや、見ずにはゐられない氣持に煽られて、今村は再び視線を舞臺の方に轉じた。が、彼の體は、壓さへようとすればする程、亢奮に顛へて行つた。

梅香の裸身に、暫らく鞭を續けてゐた青年は、彼女が苦痛に疲れ果てて、もはや體を波打たせることもなく、漆のやうな黒髪を、きつと噛みながら、深い呼吸を繰返してゐるのを見ると、俄に鞭を投げ棄てて、大地に倒れてゐる梅香の上に手を掛けた。

梅香の腕が、青年の頸にからみ附いた。そして二人はそのまゝ立上ると、張はまたもや彼女のふくよかな乳房のあたりを、狂つた様に接吻し始めたのであつた。

この時、天鵞絨の蔭から、颯と放射された金色の光。——その光と共に、絨のやうな梅香の胸に、濃い血潮の線が、一筋、細く、黒く、はつきりと浮き出した。

青年の歡喜の呻き！梅香の、高く、低く、荒い悶え。——

突然、今村がおゑんの首に、双手を掛けた。

「お馬鹿さん！」
彼女は、素速く首に絡み附いた手を弾ね返すと、瞳の耳にも聞えるくらゐの、冷笑を返した。

「これだからあたし、男はいやさ、お止しなさいよ、みつともない。あたしの唇が欲しいんなら、百圓

札の一枚ぐらゐは、紙入へ入れときやいゝぢやないの。」

今村は何か云はうとしたが、言葉が出なかつた。

その時舞臺では、梅香が感極まつたやうに、張の頸を抱へて、己が頬を、張の頬に強く押し當ててゐた。

無限の抱擁！金色の光りは消えて、正面の幕に皎々たる月が輝き出した。と思ふ間もなく、月下を斜に、七色の麗虹が現はれた。

月夜の虹。——それは砂漠を旅する者へのみ與へられる、偉大なる自然の慰藉であつた。

十二

まつ黒の中に、赤色の伊太利亜文字で「H. H. H. H.」——終演の意——といふ印が出ると、やがて、中央に太陽の輝いた天鵞絨のカーテンが降りて、實演は完全に終りを告げた。

三人は流石に峻しい山へ登り詰めたやうな、緊張の緩みを感じて、太い吐息を洩らした。殊に今村は身魂共に疲れ果てたのであらう。暫し正面のカーテンに輝く太陽を見詰めたまゝ、身動きもしなかつた。

「ども、失禮しました。」
先刻の印度人は、さう云ひながら、相變らず無表情な顔に、強ひて微笑を見せて頭をさげた。

「結構でしたわ。今夜は初めてのお客様を、案内した甲斐がありましたわ。——梅も張も、とても緊張してやつてくれたので……」

瞳は軽く受けながら、シガレット・ケースから二三本煙草を摘み出して、黒い手に渡した。

「いや有難う。——何しろこの不景気で、お客様少いですよ。せいふく間違ひのない人、お連れ下さい。——それにまた近いうちに、巴里から一人、十八になる素敵な美人が来ますから……」

「巴里から？」

「ええ。この十七日の船で神戸へ着くことになってゐます。寫真来てゐますから、お見せしませうか。」

「それア見たいな」と、突然今村が乗り出した。

「まア、まだあんなこと云つて。」

おゑんは呆れたやうに、今村の顔を見返した。

「持つて来ませう。」

印度人は急いで出て行つた。

最初に書くのを忘れたが、こゝには三人を一組として、隣りとの交渉をまったく断つた部屋が、丁度十室あるのだつた。一室毎に厚い壁で仕切られたその部屋は、談話はもとより、たとへカルタを切る音を立てたにしても、断じて洩れる憂ひはなかつた。その部屋が舞臺と平行して、差し渡し十間ばかりの

所に、墓のやうに列んでゐる。しかも入口は十が十、各々色別されたドアとカーテンで、色分けがしてあるために、その色を覚えて内部からハンドルを廻してさへおけば、他人に闖入されるやうな心配は無用だつた。だから観客は、最初から最後まで、自分の同伴者以外には、少しも知られずに済むやうになつてゐた。

ドアの内側には、いづれもその番號と共に終演後の退場時間が記されてあつた。つまり、瞳の部屋に「終演後十分」とあるのと同様、他の部屋にも「終演後五分」とか三分とか、色々に相違した時間が記入されてあるのだつた。——こゝへ来る常連は、丁度十五の四倍が六十であるのを熟知してゐるやうに、殆んど暗記に近い記憶を、部屋の色別によつて覚えてゐた。例へば青の部屋は終演後二分とか、白の部屋は三分とかいふやうに。——

案内の印度人が、これを心得てゐることは當然過ぎるくらゐ當然だつた。彼は今夜瞳達のはいつた部屋が十分後の退場であるところから、優に寫眞を持つて来る時間のあるのを知つて、樂屋へ急いたのに外ならなかつた。

「お待ちせしました。——巴里美人これです。」

いふまでもなく、それは神が造つたまゝの肉體に、何等の扮飾もしてない寫眞だつた。三人の眼は稲妻のやうにその寫眞の上に集まつた。

「これ、本當の人間？」

今村は、異様な聲を出して、思はずかう訊ねた。

「はッはッは。—— どうですデェントルマン、素敵でせう？」

「ふうむ。——」

今村の眼は、次第に寫眞に近着いて行つた。

「あ、もう時間よ。」

いきなりおゑんは、腕時計を見ながらかう云つた。

「時間？」

「駄目よ、規則なんだから。……さ、出ませう。」

おゑんと瞳とは、今村を押して廊下へ出た。

十三

「でれ村、あしたから一文無しよ、きつと。」

「さう思ふと可哀想だね。」

「かまやしないわよ。自業自得だし、それに、生れて初めてのものを、見せてやつたんだもの。およそ、

いふとこないわ。」

妙に未練らしく附き纏つて来る今村を、折柄通り掛つた圓タクに押込んで、歸らせてしまつた後の、

夜更の築地河岸を、瞳と、おゑんとは漸く肩拔けのしたやうな氣持になつて、徐かに歩いてゐた。

風邪引と稱して、けふで丁度三日間、グレイ商會を休んでゐる瞳は、大抵のタイピストなら、とう

の昔首になつてゐる筈なのだが、ダーモンといふ支配人を、得意の明眸で操つてゐるために、日曜を除

いて、月に平均三日の休みは、大目に見られてゐる譯だつた。今も瞳が頸に懸けてゐる眞珠は、偽物に

は相違ないが、同じ偽物にしても、直接日本人の手に這入るやうな偽物ではなかつた。曾てダーモンの

妻君が夜會用に、アメリカで買ったといふ代物だけに、素人の眼には、一見その眞偽は分ち難い程、巧

妙に出来てゐた。—— 去年のクリスマスのプレゼントとして、瞳はこれを、ダーモンから受取つてゐた

のだつた。

だから、まさか唇を許したわけではないにしても、相當、或は相當以上に、彼女はダーモンの信用

を得てゐるに相違ない。風邪だといふ電話を掛ければ、その電話には、必ずダーモン自身が出るに極つ

てゐた。

築地河岸の、本願寺裏から、かちどきの渡しへ通ずる角のところまで來ると、瞳は急に思ひ出したや

「あたし、明日もう一日、會社を休むわ。」

「でも、けふで三日ぢやないの。あんまりサボると、またダーモンさんから使ひが来るわよ。」

「ダモ公は平氣よ。なんとでも云つて、胡麻化しちやふから。……たゞあたし、急に虎ちゃんに會ひたくなつたんだもの。」

「あら、だめよ、そんなこと云つちやア。きのふ逢つたばかりぢやないの。あの人、あんまり逢ひたがつたりすると、ほんたうにうぶなんだから、怖がツちやふわよ。」

「お世話さま。怖がらせるやうなそんなどぢはしないから、安心して頂戴。虎ちゃんは、もうあたしの氣持、すっかり解つちやつたんだからね。」

「ぢやア、またあたしが、お使者に立つの？」

「さうさ。あすこの女中、あんたが一番得手ぢやないか。ベイちゃんをやつても、水兵をやつても、みんな不成功だつたのを、あんたが行つて、成功させてくれたんだもの。」

「手紙書く？」

「手紙書くわ。」

「とてもやけちやふなア。」

「ふん、やけるわけはないわ。こんな純な氣持。——」

「だからなほやけるぢやないの。あたしなんか、瞳さんより年下でも、そんな純な氣持になんぞ、一度だつてなつたことありやアしないもの。男を見たつて、女を見たつて、さつき梅と張ぢやないけど、みんなあれ一點張りにしか見えないんだから。——議員にしたつて學校の先生にしたつて、およそ眞面目に見える人ほど、女に掛けちや凄いんだからねえ。あたしもたつた一度でいゝから、お互ひの胸が一杯になつて、話も出来ないやうな、そんな氣持になつて見たいわ。」

十五の年に、ある華族の屋敷に見習に上ると間もなく、法科を出たばかりの、その次男のために貞操を奪はれて以來、一度として男のまごころを味はつたことのないおゑんに取つては、世の中の男女は唯性のために糺ひ、性のために活動してゐるだけであつて、少くとも自分達の胸に、沁々した戀を味はふことが出来るなどとは、遠い國の夢だより外には思へなかつたのだ。だから瞳が、あのうぶな中學生の虎行に、今まで見たこともないやうな、眞劍な氣持で浸つて行けることは、羨ましい限りだつた。

草の芽

私立文明中學の四年生坂本虎行は、けふも田端に在る學校からの歸途を、一目散に小石川の植物園に駈け込むと、いもりの棲む池のほとりに寝ころんだまゝ、何をするとおなしに、既に一時間餘を費してゐた。

何もすることなしに——實際彼は、何の目的でこの四五日、續けさまにこゝへ来るのか、自分にもはつきり判らないのであるが、午後二時の退校時間が迫ると、恰も砂鐵が磁石に吸ひ寄せられてゆくやうに、彼は鐘の鳴るのを待ちかねて、寧ろ華やかな植物園らしくない、陰惨な氣持さへするこの池のほとりに、ひた走りに走つて来るのだつた。

けふも、空は快く晴れてはゐるが、前日の雨と、あたりを覆ふた檜の木立のために、池の周圍はなんとなく暗い影を落して、折から西に廻つた日の光さへ、草の芽を幸するまでの、明るさに恵まれてはゐなかつた。

先刻から虎行の視線は、池の中の一匹のいもりにぎつと吸ひ着いてゐた。——漆のやうに濃い背と、オレンヂ色に汚れた腹とを交互に水のおもてに閃かして、底に落葉の朽ちた銀泥の中に、ついと出てはついと消える、一種の薄氣味悪さが、彼にはたまらなく愉快だつたのであらう。その頬には時をり微笑さへ浮ぶのであつた。

が、虎行の視線は、あながちいもりにばかり執着してゐるのではなかつた。——一つの物を見詰めてゐるといふよりも、唯、眼を水のおもてに落してゐる、と云つた方が適當な場合もあつた。そんな時、彼は必ず深い溜息を洩らして、靴の先で萌上つて來た草の芽を踏み蹂るのだつた。

「——ねえお母さん。やツぱり僕の考へが、間違つてゐますか。僕は何よりも先に、お母さんからその解決を教へて頂きたいんです。ほんたうに、僕が間違つてゐるでせうかね。瞳さんは、みんながいふ程、悪い人でせうか。僕には、どうしてもさうは思へないんです。僕は今日まで丁度三度、いまのお母さんに隠れて、瞳さんに會ひました。——お母さんも御存じでせうが、瞳さんは、僕が小學校の三年時分迄、家の隣りにゐた、田村さんのお嬢さんなんですからね。ですから僕には、あの人が悪いなどは、いくら考へても、信じることは出來ないんです。——ねえお母さん。瞳さんに會つてはいけないでせうか。お母さんがいけないと仰しやるんでしたら、僕はこれから先、どんなに寂しい時があつても、決して會はない覺悟をいたします。ですけど、もしさうなれば、僕はこの世の中から、自分の抱いてゐた一番大

きな希望を、奪はれたのも同じ結果になつてしまふんです。それでも、瞳さんに會つてはいけないうか。——どうかお母さん。お母さんのお考への通りを仰しやつて下さい。——」

池に向つて、訴へるやうにかう云つてゐた虎行の聲は、次第に顫へをおびて來た。丁度生れて幾日も経たない小鳥が、次への小枝へ飛び移らうとしても、羽の自由が利かないために、徒らに羽叩きばかりを繰返すのと同じであつた。

「——イエスとか、ノーとか。どつちか聞かせて下さい。僕は生れて初めて、こんな苦しみにぶつかつたんです。——お父さんには、無論相談することぢやありません。いまのお母さんには、なほのことです。さうなれば、僕はヤツぱりかうして、お母さんにお聞きするより外に、道がないんです。——僕はこの池の中にお母さんの魂が在るとは信じませんが、なんとなく、こゝへ來てお訊ねすることが、一番お母さんの近くへ來たやうな氣がするんです。これはきつと、お母さんが亡くなられる前に、僕を連れてここへ來て下すつた、あの時のことが、忘れられないためかも知れません。——」

はらくくと、春の落葉が一ひら虎行の頬を掠めた。と彼は、再び池の面を見詰めたまゝ、固く口をつぐんでしまつた。

虎行が、植物園のいもりの池の水ぎはで、獨り亡き母の心に訴へてゐた、その時分、瞳は去年の秋から借りてゐる、大久保百人町の躑躅ヶ丘アパートの一室で、頻りに水色のレター・ペーパーの上にペンを走らせてた。それはもう間もなく、使命を帯びたおゑんが、取りに來ることになつてゐる、虎行に宛てた手紙であつた。

瞳は、前夜築地河岸でおゑんに云つた通り、けふもう一日、會社を休むときめてからは、氣のゆるみもあつたせい、今朝眼が覺めたのは、既に十一時に近い頃だつた。大抵の場合に、會社への出勤届は電話ならば九時までにする規定になつてゐたのだが、それにしても十一時近くに眼が覺めたのでは、なんとしようもなかつた。で彼女は、どうせ支配人のダーモンが、都合よく計らつてくれるだらうといふ横着から、交換臺へも通さずに置いた爲めに、實は一時間ばかり前、逆に先方から電話を掛けられて、風邪引らしい聲色を遣ふのに、並ならぬ苦心を拂つたのであつた。

が、瞳に取つては、さうした聲色を遣ふ胡麻化しよりも、一字一句を眞剣になつて書かねばならないこの手紙の方が、どれ程苦勞だか知れなかつた。——今までも實際彼女は、あらゆることをする場合、わけても男に對する場合、胸には、隅々にまで行き互る程の「ふざけた氣持はあるにしても、眞剣などといふことは、微塵も持ち合せてはゐなかつたのだ。それが、つひ半月ばかり前、偶然虎行に會つてからは、彼に關する限り自分でも不思議なくらゐる、眞剣さが胸に徹して、ともすればかうして手紙を書く

にさへ、手先の顫へる程の心持が、止め度なく流れるやうになつてしまつた。今も今とて、腫はそれを感じてゐた。「——で、ねえ」と書いた字を消して、彼女は「——ですからねえ」としたところだつた。

——ですからねえ。あなたがあたしに會つて下さることは、どんなにかいじらしい氣がしますのよ。今のお母さんや、妹さんに知れないやうにして、晩は決して許されない外出を、あたしのためにして下さるんですものねえ。それをおもふと、とても堪らなくなるんだけど、勘忍して頂戴ね。あたしはほんたうにいまはもう、虎行さんなしではゐられないんですから。

この間もお話したやうに、あたしは決してあなたのやうな、うぶな人間でもありませんし、清い人間でもありませんが、それでも、清い物を清く見る心だけは、まだ失つてはゐない筈であります。ほんたうを云へば、あたしにはこの世の中の男といふ男が、どれもこれも偉い人だとは思へないんです。あなたも知つてるでせう。松澤病院にある葦原將軍といふ人を？ 丁度あたしが男を見る心持は、あの人と同じだらうと思ひますわ。極端に云へば普通一般の人の中には、尊敬出来るやうな方はゐないんです。これは何もあたしが、己惚れてゐるわけでもなければ、思ひ上つてるわけでもありません。嘘も隠しもなく、女に對する男は馬鹿な、甘いものに違ひないんですから。——

でも、あなたばかりは、あたしに取つては思ひも掛けない別の存在でした。もつとはつきり云へば、汚れた魂ばかりを見詰めて來たあたしには、あなたはあまりに淨い、欺くことの出来ない人だつたのです。

夢中になつて、人を思つたことのないあたしも、いまは夢中になつて、あなたのことを思ひ續けるやうになつてしまひました。これがいゝことだか、悪いことだか、そこまでは知りません。が、いまとなつては、いゝことであつても、悪いことであつても、あたしにはもう、どうすることも出来なくなつてしまつたんです。弱いあたし、可哀想なあたし。——今までにない、さうしたあたしの影法師を、この頃あたしは、はつきり自分の體の中に見るやうになつちやいました。なんといふ不思議なことなんでせう。——

三

——虎行さん。かう云つたからつて、どうかあたしを、笑はないで下さいね。あたしはいま、誰に笑はれるよりも、あなたに笑はれることが、一番辛いですから。あなたに弱い腫であるだけになほさら。……

世間の人は、あたしのことを、一樣に口を揃へて、不良少女だと云つてゐます。それに對してあたしはこれまでに、唯の一度も、さうぢやない、違つと云つて、辯解したことはありませんでした。それ

どころか、人から不良少女だと云はれれば、さうに違ひないとさへ思へて、あたしは自分で自分をいつも冷やかに見詰めて来たくらゐです。

ですけど、世の中の人、あたしのやうな不良少女を見る眼は、いつも一色に限られてゐるのが不思議ぢやありませんか。——教育家とか識者とか呼ばれる人が、誰も同じやうに考へることは、不良少女は

悪いことばかりする者、男を欺す者、人情のない者、辱を知らない者、風俗を亂す者、嘘をつく者、浮気な者と、そんなイヤな方のことばかりで固まつてゐます。なんといふ片手落な考へでせうね。

そりやア不良といふ字を貰ふくらゐですから、素直ないゝ娘であらう筈はありません。が、どれ程素直でないにしても、曲つたことや、悪いことばかりが、決してあたし達の全部ではないんです。お母様のお腹から生れた時のあたしは、やツぱり世間の善良なお嬢さん達と同じやうに、少しの濁りもない、生地のままの女だつたに違ひないと思ひます。あたしとて、毒婦のお腹から生れたのではありませぬもの。

次第に變つて来た境遇。それが今日のあたしを作り上げてしまつたんです。——同じ土に蒔かれた種でも、水に押されて、小石の下敷になる不幸なものもあるやうに、あたしは偶然にも、日蔭に育くまれる運命の下に置かれた花だつたのです。さうして萎んだまゝ春の風に遭つたんです。自分で自分の運命を呪ひながら、自分で自分をいたはる心。その心持が不良少女にあることを、世間

人のは、誰も知つてはくれませんが。日蔭に生れた草の芽を、自分の涙で育てて行くやうな、沁々とした心持を、誰も解つてはくれなひんです。

あたしだつて、出来ることなら醫學博士田村精一郎の令嬢のまゝ、良い夫の許に嫁したいと思つてゐました。平凡だと云へば平凡に違ひありませんが、その平凡なことさへ、思ふ儘には出来なかつたんです。——モダンガールとか、銀座ガールとか云はれるよりも、平凡なお嬢さんで暮して行く方が、どんなに仕合でせう。どんなに日本人らしい懐かしさが溢れてゐるでせう。でも、境遇は、そんな何んでもない型の中へさへ、あたしを入れることを拒んだんです。半分はヤケと反抗とから、とうとう今日あたしになつてしまつたんです。

虎行さん。あたしはいつもいふやうに、この上は百千人の敵をこしらへても、唯一人のあなたさへ、あたしの心が解つて下されば、それで、もう云ふところはあります。ね、ほんとうに、あなたはこの瞳のまごころを、信じて下さいますわね。あなたのためになら、あたしはどんなに弱い女にも、どんなに従順な女にも、どんなに強い女にもなれるんです。ほんとうに、ほんとうに。

この手紙、書かないつもりだつたのですが、また今日おゑんちゃんに、あなたのとこへ行つて貰ふことになつたので、思はず長く書いてしまひました。

では、今夜七時に、きつといつもの所へ来て下さいね。あたしが、どんなに待つて居るかを考へて。

ぢやア左様なら。——また後ほど

四月十四日午後三時

坂本 虎行様

田村 瞳

書き終つた瞳は、素速く疊んで洋封筒に入れると、いつもするやうに、封じ目へ赤い封蠟を垂らした。

四

「あら、瞳さん、何してたのよ。」

ドアをノックすることも忘れて、ひよつこりそこへ顔を出したおゑんは、瞳があわてて掌で隠した封筒を見ると、却て驚いたやうに眼を見張つた。

「まアおゑんちゃん？ あんた、黙つて這入つて来るから、びつくりするぢやないの。」

瞳は流石に氣が差したのであらう。宛名を書いたばかりの封筒を、婦人雑誌の下に挟むと、態と荒ッぽい調子で云つた。

「あたしとこだからいゝやうなもの、これが警察だつたら、いきなり二晩は留められるね。」
「だつて、まだ寝てるんだと思つたんですもの。」

「いゝ加減にしてよ。お天道様が、西からでも出やアしまいし。……」

「あれだ。たまにや西からも出すくせに。——」

「お生憎さま。あたしや新宿ホテルの帳場と、顔なじみにやならないからね。」

「ご免、ご免。もうそのことは云はないでさ。」

「おほゝ、案外もういんだね。」

「もういゝから、速く虎行さんの言附聞かせてよ。」

「めんどくさいだらうと思つて、手紙を書いたわ。——これ。」

と瞳は雑誌の下から、いま隠したばかりの封筒を取出して「やッぱり持つてツてくれる？」

「だつて、そのために来たんぢやないの。」

「でもさ、あんまりいゝ使ひぢやないから。……」

「結構、そのかはり、いまにたんと奢つて貰ふわ。」

「兎に角、新宿まで一緒に出るわよ。あたしさつき、トーストパンと、紅茶を飲んだばかりなんだもの。」

「布袋屋のおこわなら結構よ。」

「まさかそんなちやちな物は奢りやしない。」

「ぢやア焼飯？」

「まあ何んでもあたしに附いて来りやいゝの。」

「大きく出たわね。そんならひとつ、血になる物を奢つて頂戴。」

裏葉色の帽子を取つて、斷髪の先がちよいと受け型になるやうに冠ると、瞳は手早くネクタイを結び直して、立ち上つた。

「いゝわ。」

「鍵は？」

「鍵はポケット。」

「簡單でいゝわね。——あたしのやうに、駄菓子屋の二階に下宿してるのとくらべると、とても高級だわ」

「おだてたつて駄目よ。豫算だけしきや、奢りやしないから……」

階段を降りた突き當りの「受附」と書いた窓際へ行くと、瞳は如何にも快活さうにのぞき込んだ。

「伊東さん。あたし出掛けますから、誰か来たら、お願いしますわ。」

「けふはどちら？」

「まだ判らないの。——歸りの十二時だけは、確かだけ……」

「おほゝゝ、相變らずですね、田村さん。いけませんよ、そんなに夜遊びばかりなすツちや。」

受附の伊東さんといふ、陸軍大佐の未亡人にしては、ひらけ過ぎてゐるくらゐの、四十を二つ三つ出

た小母さんに、こんな冗談を浴びせられながら、瞳とおゑんとはアパートを出た。

「新宿まで歩く？」

「それでもいゝわ。」

大久保キネマの横を曲つて、山ノ手特有の道の悪さを氣にしながら、それでもガード下まで出てしまふと、ストップキングにはねのあがる心配もなく、二人は青バスの横丁を、驛前へと出て行つた。

「それアさうと、虎行さんの方、しつかり頼むわよ。」

「呑み込んだ。——だけど、今夜はどこで會ふの？」

「どこツて、そんなこといゝぢやないの。」

「だつて、氣なるもの。」

「虎行さんの都合次第よ。あたし兎も角、例のところ、電話を待つことになつてるんだから……」

五

四時近くに、植物園からあわてて歸つた虎行は、汗の滲んだ正服を脱ぐ間もなしに、母の居る茶の間へ、挨拶に行かなければならなかつた。

母。——虎行に取つて、いまの母ほど暗く、冷く、しかも恐ろしい者は他にはないのだ。それは單に

繼母であるといふ、さうした關係ばかりではない。例へば蛇の前に出た蛙のやうに、自身の意志は如何なる場合でも、表現することが出来ないのだつた。實際母の行爲は、その一言々々が、虎行には恐ろしかつた。自分が確實に「右」と信じてゐる事でも、母が「左」だと云へば、彼は決して「右」を固執するだけの勇氣はなかつた。だから彼は母に仕へるといふよりも、寧ろ主人に仕へる従僕のやうな心持で、今日までの長い年月を終始して來たのだつた。

彼は繼母の前身に就ては、餘り多くの知識を持つてはゐなかつたが、震災の翌年までゐた古い女中の話に依ると、おさだが（女中は蔭でさう呼んでゐた）虎行の母として、父の許へ來たのは、虎行の實母が死んでから、丁度五年目の春のことだつた。

「——でもねえ坊ちゃん。人は氏より育ちツてね。どうせ新橋だつて、三流どころで稼いだ人なんですよ。何ひとつまとまつたことなんか、出來やう筈はありませんよ。——あたしがゐる間は、どんなことがあつたつて、決して坊ちゃんに指一本さゝせやしませんから、氣を大きく持つて下さいましよ。小さくなつたり、いじけたりしてえちや、亡くなつたお母様が、行くところへいらツしやれませんからねえ。」

虎行は、唯一の味方である女中の口から、常にかうした言葉を聞かされたのを、今でもはつきり覚えてゐるが、さてさう云はれてもいざとなると、何かしら睨まれてゐるやうな氣がして、心からのびく

した氣持で暮す日は、唯の一日もなくて來てしまつたのだつた。

しかも、これも女中のおきみに云はせれば、ある寄席藝人との間に出來た、連つ子の登美子が、物心のつくに従つて、我儘の限りを盡すやうになつてからは、虎行の氣持は、日一日と凋んで、繼母の一言一句が、針のやうに胸を刺して行つた。——ひねくれまい、いじけまいと努力すればする程、眼に見えない壓迫が感じられて、伸びやかな晴れぐしさを失はれてゆくのが、明々と自分にも判るやうなことが多かつた。

殊におきみが去つてしまつてからの歲月は、虎行に取つては、益々暗い流れだつた。一人の味方とてもない上に、年毎に大人びてゆく登美子は、母の愛を一身に集めて、恰も衆議員議員坂本高行の一家は、登美子の成長のために、存在してゐるかの如き觀があつた。

父の高行は、代議士としてこそ相當の古顔であつたが、もともと大して教養があるわけではなく、彌次的行動に因つて認められながら、どうやら盟友會の陣笠で押し通して來ただけに、家庭を顧みるよりも、何年経つても茶屋酒の味が忘れられず、家のことは一切妻君まかせとあつて、知らぬ人には豪傑肌とも見えるであらうが、その實、子女の教育などは、考へて見たことさへないといふ、至極無鐵砲な政治家なのだつた。

そんな譯合からであらう。貞子は教育の重任を感じてゐる氣持からか、二言目には代議士の息子とい

ふことを引合に出して、矢鱈無性に叱り飛ばしさへすれば、それで教育は出来るものとの履違へを、眞甲に振り翳すのだから堪らない。虎行は、常に文化的繼子責めに會つて、伸びようとする芽を、片ツぱしから摘まれてゆくより外はなかつた。
いまも、遅れて學校から戻つて來た彼は、母がどんな眼をするかを知つてゐただけに、つひ茶の間へ這入つてゆくのを、ためらつてゐたのだつた。

六

「あら、虎ちやんが歸つて來た。」
玄關側の三疊で、切れた靴下の踵を氣にしてゐた虎行を見ると、かう云つて飛んで來たのは、義妹の登美子だつた。十六にしては、早熟すぎるくらゐ早熟の上に、亞米利加映畫で鍛へ上げたながし目など、盛んに遣ふだけあつて、あのお下げを斷髮にして、校服の水兵服を、おとなびたハウス・ドレスにでも換へれば、それこそ二十の令嬢だと云つても、疑ふ者はないほど、どこからどこまで體が出来てゐた。したがつて、登美子は虎行に對して兄といふ氣持など、少しもないらしかつた。
「何してたのよ、今まで。——お母さん、とてもお冠だわよ。」
「何してたつて、校友會雜誌の、漢文の校正があつたんだから、仕方がないよ。」

「そんならちやんと、その譯を、お母さんに云つとけばいゝぢやないの。」
「云つてあるぢやないか。」
「云つてあるもんですか。お母さん、ちつとも知りやアしないわ。——それに虎ちやん。だいち、今頃時代遅れぢやないの、漢文の校正だなんて。せめてヴァレンチノさんの思ひ出でも書いた本の、校正ぐらゐして頂戴よ。」
「駄目だよ、そんなこと云つたつて、學校の雜誌だから、僕らの勝手にやならないんだから。」
「ケチな學校ねえ。文明中學なんて、名前だけはへんにハイカラなくせに、斷然古いんだからいやんなつちやうわねえ。アスファルトのベッチー・アーマンさへ知らないんぢや、話ならないや。——何しろ速く、お母さんとこへ行つて、あやまんけりや駄目よ。」
「そんなに、お母さん怒つてるかい？」
「とてもよ。云つて聞かせることがあるツて……」
「まるツちやつたなア。」
「まるることはないぢやないの。いまあたしに云つたやうに、漢文の校正があつたんだから、仕方がないよツて、さう云へばいゝわ。」
「お母さん、一人かい。」

「一人よ。茶の間に國定忠次讀んでるわ。」

「頭痛がするつて云つてやしない？」

「そんなこと、どうだつていゝぢやないの。速くいらつしやいよ。あたし先へ行つて、虎ちゃんが歸つて來たつて、云つといてやるから……。」

「そんなこと、云はなくつてもいゝよ。」

虎行は、漸く決心が着いたのであらう。一度外した正服のボタンを、手速く再び掛けると、破けた靴下の踵をづらして立ち上つた。

「あたしも行くわ。」

「登美ちゃん止せよ。」

「いゝわよ。あたし虎ちゃんの叱られてるのを見てるのが、とても好きなんだから……それに、虎ちゃんのためにだつて、あたしが側にゐる方がいゝのよ。お母さんは半分ぐらゐしか叱らないもの。」

何を思つたか、虎行は突然部屋の襖を開けると、廊下傳ひに、茶の間の方へ駈け出した。

「虎ちゃん！」

が、彼は振向きもしなかつた。

「唯今。——」

母。——虎行は五六年前、芝居で「鏡山」といふ狂言を見たことがあつたが、その時美しい御殿女中をいぢめる、岩藤とかいふ女のヒステリックな顔付が、生き寫しと云つてもいゝくらゐ母に似てゐたのを、かうした度毎に思ひ出さずにはゐられなかつた。虎行の聲を聞くと同時に、講談本を放して、上目使ひにこちらを見た顔は、丁度岩藤が草履を振り上げたあの時と、今でも、少しの相違がなかつた。

「學校は、いつからはねが遅くなつたの？」

その第一聲は虎行の考へてゐた通りに冷かつた。

「校友會雜誌の、校正をしたもんですから……。」

「學校へ月謝を出してるのは、こつちなんだからねえ。何も向ふの仕事を手傳ふことは、ないぢやないか。それともお前は、學校からいくらかお小遣でも貰つてるのかい。」

「そんなこと……。」

「なら、ちやんと時間に歸つて來ればいゝぢやないか。まだ、庭だつて掃いてありやしないんだよ。」

七

「僕、直ぐに掃きます。」

「そればかりぢやないんだよ。大體お前は、この頃お母さんを、馬鹿にしておいでだね。」

またか、と虎行は思つた。この「大體お母さんを、馬鹿にしておいでだね」といふ言葉が出た時、今までの経験に依ると、彼は少くとも一時間は、そこを動くことが出来なかつたのだ。

「馬鹿になんて……」

「いゝえ、馬鹿にしてますとも。馬鹿にしてなけりや、そんなあたしを踏み附けたやうな眞似が、出来るわけがないぢやないか。この一週間ばかり、毎日のやうに學校からは遅く歸るし、庭の掃除はいゝ加減だし、勉強はしないし、それぢやまるで、あたしなんか居ても居なくつてもおんなじことだからね。

——それアもうあたしは、お前の生みのお母さんの様な、教育のある女ぢやないしするから、お前に馬鹿にされても、仕方がないだらうが、かりにも親と名が付きや、他人ぢやないんだからね。それにさ、お前が横道へ反れるとなれば、お父様の御商賣に」と、この御商賣といふ言葉に、ひどく力を入れて「頭から疵が附くぢやないか。」

「僕、横道へ反れるなんて、そんなことありやアしません。」

「知らないと思つて、白をお切りでないよ。お前がこの節、どんなことをしてるかぐらゐ、判らないやうぢや、憚りながら、親の務めは果せないんだよ。——だからあたしを、踏み附けにしてるといふんぢやないか。」

「でも僕は……」

「お黙りツたら。口返答は聞きたかないよ。お前がそんな剛情を張るから、何んにも知らない登美子までが、云ふことをきかなくなるんだ。あたしが白い齒を見せてりや、いゝ氣ンなつて、馬鹿にするのもいゝ加減にするがいゝや。」

「お母さん。」

「お母さんぢやないよ。一體今まで、どこで遊んで來たんだよ。」

「どこツて、ほんたうに學校にゐたんです。」

「あれだ。まだ白を切つてやがる。先のお母さんの、お墓詣りに行つてたんだらう？」

「え？」

「どうだい、圖星を指されて、驚いたらう。馬鹿！そんなことをするから、可愛氣がなくなつちやうんだ。あたしに、眼がないとでも思つてるのかい。」

「そんな、お墓詣りなんぞ、僕は決して行きアしません。もし嘘だと思つたら、學校へ行つて、聞いてくられても構ひません。」

「馬鹿も休みくお云ひよ。誰が學校へ、坂本虎行は、お墓詣りに行きましたかツて、聞きに行かれると思ふんだい。そんなことを聞きに行くくらゐなら、あたしや寝ころんで、ラヂオの安來節でも聞いてらア。」

「虎ちゃん」と、そばでコンパクトを開いてゐた登美子が、急に口を狭んだ。「早くお母さんに、あやまつちやいなさいよ。あたしまで、叱られるぢやないの。」

「だって僕、悪いことをした覚えがないんだもの。あやまるツたつて。……」

「いゝよ登美子。こんな剛情な奴の肩を持つてやることはないんだから、うツちやつときよ。」

「僕ちつとも剛情なんか張つてませんよ。ほんたうにさうぢやないから、さうぢやないツて、云つてるんぢやありませんか。」

「畜生！」

貞子の手は、いきなり読みさしの講談本を虎行の顔へ、叩き付けてゐた。

「不良少年！お前のやうな不良は、もうどうなつたつて構はないから、どこへでも行つちまへ！」

「お母さん」と、流石に登美子は母の手に縋つた。「もういゝわよ。虎ちゃんは頭が悪いんだから、何云つたつて駄目よ。虎ちゃんも、なぜ速くあやまんないのよ。」

「あやまるこたアないよ。」

虎行はさういふと、そのまゝ縁先から、庭の方へ出て行つた。

八

新宿の支那料理店で、好きな「蟹玉」を奢つて貰つたおゑんは、その間武蔵野館で、ハンセンの「歸郷」を見ながら待つてゐるといふ瞳に別れると、そのまゝ青バスに乗つて、四谷津の守の虎行の家へと急いでゐた。

荒木横丁といふあの大通りを左へ折れて、坂を降りようとする左側に、黒塀で圍んだ、見るから古めかしいが、庭ぐるみ三百坪はあらうと想はれる一構へ。門標に尤もらしい太い字で「士族坂本高行」と記された、その士族がいま時代遅れも甚だしいと、この邊で評判になつてゐるにも拘はらず、高行は頑として取換へようとする意志もないらしく、日露戦争直後から住んでゐるために、今では坂本と聞くよりも、士族と聞く方が、却て通りがいゝくらゐ有名だつた。

おゑんは、こゝへ瞳の使ひで来たのは、これで二度目であつた。それまでも、瞳は、水兵の渾名のある芳公や、ベイちゃんの名で通つてゐる米澤など、二三の男を使ひに寄越して見たのだつたが、流石かうしたことには慣れてゐる不良少年達も、どうにも虎行を呼び出す術がなかつた。ベイちゃんなどは、妹の登美子が、相當オンチなのを知つて、まづ登美子からなづけてやれと思つたらしかつたが、それもどうやら行き違つて、面目玉を押し潰してしまつたのだつた。

そこへゆくと、おゑんの用ゐた手はよかつた。お絹といふ女中が、三度の飯より千恵藏の映畫が好きだといふことを探ると、彼女は袈裟に、數へれば、五十枚もあらうかと思はれる程の、千恵藏のプロマ

イドを一束にして、お絹が始終買物に来る、食料品屋の小僧の手から、まづ巧に渡して貰った。

その文句が——あたしもやツぱり千恵さんが好きでくたまらないんですから、あなたの用心持を察して、これを差上げます——といふのだつた。確に成功した。見ず知らずの人でも、同じファンなら友達だわと、ふだん奥でやかましく云はれてゐるだけに、お絹はひよつこり、おゑんの手に乗つてしまつたらしい。

受取つてくれりや、こつちのものだつた。それからもう、お絹はおゑんの意の儘だつた。どう轉んだつて損にはならない、虎行への手紙の取次など、謂つて見ればお易い御用に違ひない。その上たまに、四谷館の切符でも貰へば、もち彼女はいふとこはなかつた。

けふもおゑんは、バスから降りると、直ぐにバットを二箱買った。これは食料品屋の小僧へのわいろだつた。

「ちよいと。——」

急いで飛んで出て来た小僧に、おゑんはバットを渡して「濟まないけど、またお絹さん呼んでよ。」

「オーライ。どこで待つてる？」

「あのポストのそば。」
小僧は門をはいると、勝手口の方へ廻つて行つた。それが黒塀の透間から、廻り燈籠のやうに見えた。

「こんにちは。——広島屋です。」

「うるさいね、今時分何さ。」

突然茶の間から、甲走つた聲が聞えた。

「へい。御用聞きで……」

「けさも、用はないと云つたぢやないか。」

「へい。」

一散に駈け戻つて来た小僧は、ポストの側まで、夢中だつた。

「奥さんに、怒鳴られちやつた。」

「聞えたわよ。あれが奥さん？」

「とても凄いぜ。——お絹さんは、ゐないらしいんだよ。」

「いゝわ。使ひに出たんなら、あたしこゝで待つてるから……」

「待つてりや歸つて来るよ。」

「有難う。誰にも内所であつてね。」

「でも、用が足りないのに、煙草を貰つちや悪いな。」

「ふん、案外正直だね。いづれ埋合せはして貰うからいゝよ。」

おゑんは十分間ばかり、ポストの側に立つてゐたが、さて、お絹が果してどこまで、使ひに行つたのかを考へると、多少不安がないでもなかつた。このまゝ夕方まで歸つて来ないとすれば、武蔵野館で、首を長くして待つてゐる腫にも、云ひ譯がないやうな氣もするし、第一そんなことがあつたら、あんまりドチを踏み過ぎるといふ氣もしたので、やがて彼女は、ポストの側から離れると、坂本家の黒塀について、裏の方へと廻つて行つた。

崖に面して、西向に建てられたこの家の周囲からは、崖下に軒を並べた土地の花柳界の有様が、手に取るやうに見えてゐた。ある家では、明けひろげた二階の手摺に、見るからなまめかしい友禪模様の夜具が干してあるかと思へば、ある家では、長襦袢一枚の若い藝者が、寝ころんだまゝ密豆を頬張つてゐるし、ある家では、姐さんらしいのが、下地ツ子を前に置いて、盛んに三味線を掻き廻してゐた。

一さいの、かうしたパノラマみたいな風景が、おゑんには妙に珍らしかつた。——十五の年に父親が亡くなる間もなく、藝者にしようか、事務員にしようかと、母と叔父とが相談の結果、藝もないのに藝者にするのは可哀相だとあつて、遂にデパートの賣子に通ふやうになつたおゑんだけに、もしもあの時、藝者屋へやられてゐたとしたら、いま目の前に見える、あのうちのどれかのやうになつてゐたに違ひな

かつた。どつちが幸福だか知れないにしても、お座敷もへちまもなく、遊びたい時には遊び廻つて、甘い男から、時々小遣をせしめて暮せる今の方が、考へやうに依つては、のんきだつた。——

そんなことを、ちよいとしんみりした氣持で考へながら、黒塀を裏手へ廻つて来たおゑんは、ふと植込の中に箒の音を聞き附けて、背後に眼を遣つた。と、その刹那彼女は思はず「あッ」と叫ぼうとした口を、自ら固く押へたのであつた。

そこには、學校の正服を着たまゝの虎行が、獨り不愉快さうに、箒を動かしてゐた。

「虎行さん！」

殆んど聞えるか聞えないくらゐの、そのくせ力を置めた聲で、おゑんは破れた塀の間から、虎行を呼びかけた。が、その聲が耳へ這入らないのであらう。虎行の眼は、木の間の苔の上を見詰めた儘動かなくなつた。

「虎行さん！虎行さん！」

再び、おゑんは續けて呼びかけた。と同時に、彼女は塀の間から手を入れて、振つて見せた。

「あッ！」

「あたしよ。」

虎行は、何か急に怯えたやうに身を引いたが、それがおゑんであると知ると、あわてて塀際へ駆け寄

つて来た。

「いま駄目。とても、お母さん怒ってるんだから。……」

「どうしたの？」

「どうしたんだか判らないけど、僕いま、こゝへ逃げて来たんだから。……」

「ぢやアとも角、これ受け取つて頂戴、瞳さんからの。……」

おゑんの指は、素速く帯の間へ這入つたが、直ぐに西洋封筒を取り出してゐた。

「是非都合してね。」

虎行が手紙を受け取ると、おゑんは、かぶせるやうにかう云つて、ぢつと顔を見詰めた。

「でも僕……」

「大丈夫よ。その中に、詳しく書いてあるのよ。瞳さんは、とても虎行さんのことばかり、考へてるんですものねえ。——その時間に、電話を掛けてあげてね。」

「そんなに云つたつて。……」

「でもあんたも、まさかイヤぢやないでせう？」

「そんなこと。……」

「ぢやア頼むわ。あたし責任があるんだから。……」

虎行は、何んと答へていゝか判らない氣持で、封を切つた。

十

新宿の歳藏野館の婦人席に、ガラになく、獨り小さくなつて、おゑんの返事を待つてゐた瞳は、既に「歸郷」が五巻の半ばを過ぎてゐるにも拘はらず、一向に姿が見えない不安から、いまはもう、ぢつとスクリンの表を、凝視してゐる氣にはなれなかつた。

彼女は席を離れて、先刻シートを知らせておいた入口の案内人に、いらくした氣持で訪ねた。

「まだ誰も来ませんか？」

「おいでんなりません。」

「どうしたツてんだらう。もう一時間半も経つてるのに。……」

「いらつしやいましたら、お知らせいたします。」

「いらつしやつたらツて、それが駄目なのよ。こんなに遅れる譯がないんですもの。——ほんとに、どうかしたんぢやないかしら。……」

武藏野館の案内人は、大抵かうしたことは慣れてゐた。が、それにしても、女がいらつづくのは、九分九厘まで、相手が男である場合に限られてゐるのに、女が女を待つにしては、少し念が入り過ぎてゐる。

「さう云つたやうな顔付で、案内人の眼は、瞳の顔から離れなかつた。」

「瞳さん！」

「え？」

思はず振り向いたとたん、ニヤ／＼笑ひながら、丁寧に帽子を取つたのは、銀座ボーイの熟生だった。

「あら、健ちゃん！ お一人？」

「五人。」

「五人！ とても頑張るわね。誰達？」

「みんな、瞳さんの知らない顔ですよ。けふはリーグ戦の歸りなんだから。——それより、ひどく興奮してらしいけれど、大丈夫？」

「大丈夫過ぎるの。」

「どうだかなア。」

「ほんたうよ。何しろおゑんちゃん、鐵砲丸の使ひなんですもの。」

「ぢやア、返事を待つてゐるツて寸法なんですね。」

「まアねえ。」

「いけない。ボールにや敗けるし、この上あてられちゃ堪らないから失敬しよう。」

その熟生が、あとの連中と、二階へ上つてしまつた時だった。瞳は、入口のドアに、ふとおゑんの映つたのを發見して、振り返つた。

「あゝ。——」

「とても待つてゐるだらうと、思つただけど、これでも、随分急いで來たのよ。」

「ゐた？ 虎ちゃん。」

「ゐたわ。ゐたにやゐたけど、まるで怯えちやつてるのよ。」

「ぢやア來られないの？」

「いゝえ、來ることは來ると思ふわ。でもねえあいにく今まで、お袋に捕まつて、とても絞られてたんですツてさ。」

「でも、何しろ來るのね」と念を押して「來てさへくれれば、それでいゝのよ。こんな入口ぢや話も出來ないから、お茶でも飲みに行かないこと。」

「もう出る？」

「だつて、活動なんか見ちゃゐられないぢやないの。——あの手紙は？」

「渡した。讀んでたわよ。」

「ぢかだつたの？」

「丁度庭ンところにもたんですもの。でもねえ、虎行さん、なんとかしてあげなきや、可愛さうだわ。あんな鬼のやうな、お袋に縛られてちやア。」

「百も承知よ。あたしには、ちやんとあたしの考へがあるんだから、大丈夫。」

武藏野を出ると、二人はわざと、裏通りのカフェー街を避けて、三越の前の方へ歩いてゐた。

「いま何時？」

瞳は、角型の腕時計が、食ひ込むやうになつてゐる腕を、自分の眼の前に持つて行つた。

「五時半よ。」

「ぢやアまだ、七時までには間があるわねえ。」

「一時間半。」

「それまで附いていてい？」

「いゝにやいゝけど、六時半になつたら、別れるからね。」

「もちいゝわ。」

「なら青バスへ乗つて、三宅坂まで来るんだわね。」

十一

右へ行かうとする力と、左へ行かうとする力と、それが初めは半々であつたが、いつの間にか虎行の心には、右へ行く力の方が勢力を増して、いまははや、善悪とか良否とかの冷静な批判力は、薬にしたくもなくなつてゐたのだつた。

瞳の手紙を、おゑんの手から受取つて以後今になるまでの、二時間ばかりの間が、虎行に取つてはどんなに長かつたことだらう。丁度同じくらゐの勢力を持つた波が、一つの岩を目掛けて打ち寄せて來たのと同様な、避け難い立場に在つて、しかも遂に、その波間を潜つて出たのであるから、虎行の全身はづぶ濡れだつた。

初め彼は、母に對して、何か嘘を構へて家を出ようかと考へた。が、それは先刻のことがあるだけに、決して賢明な方法ではないと直ぐに思ひ返した。で彼は、心ひそかに、いつも母が怒つた後でするやうに、其の叔父の家まで、徒歩で使ひにやつてくれれば、有難いと思つた。しかし今日に限つて、母はまつたく忘れてしまつたのか、叔父の家への使ひのことは、おくびにも出さなかつた。

實際使ひの主旨から云へば、母が脚へする灸の艾などは、何も叔父の家で特別に造つたといふ、そんな勿體振つた物には、及ばなかつたに相違ない。そこらの薬屋で、一掴みも買へば、事は十分足りるに極つてゐたのだ。それを、どこまで取るに足りるかを知らないが、神告に依つて造り上げたといふその艾を、わざわざ、電車へも乗せずに、四谷津の守から、芝の二本榎まで、取りにやらうといふのだから、

正にその量見の程は判り切つてゐた。

判り切つてはゐたが、今となつては、さうしたことをしてくれるのが、寧ろ虎行に取つては、救ひの手にも等しいことなのだつた。往復二時間は優にかゝる。それを電車で足せば、一時間半近くは、少しの不自然もなしに、残すことが出来るに極つてゐた。

が、それさへ、向ふから云へばその惨酷の、憎いがためにさせる用事さへ、けふは命ずる氣がないのではなからうか。ないとすれば、瞳に會ふためには、如何にして、家を出たらばよいのか、まづたく迷ふより道がなかつた。

「虎ちゃん！」

六時の時計を聞いて二十五分、虎行は、もう矢も楯も堪らなくなつて、そつと和服を學校服に着換へてゐた時だつた。突然襖を開けて這入つて來た登美子は、虎行を飛び上るまでに驚かした。

「あら、校服なんか着てどこいくのよ？」

「どこつて、またいつものやうに母さんが、叔父さんそこへ、使ひに行けといふだらうと思つてさ。」

「まあいやだ。けふはどうだか判りやしないわよ。それとも虎ちゃん行きたいの？」

「行きたかないけど……」

「をかしな人ねえ。あんなところまで歩かされて、あたしならまツ平だわ。」

「登美ちゃんは、僕に何か用があるのかい。」

「用なんかないわよ。」

「そんなら、勉強するんだから、あつちへ行つてくれよ。」

「こゝにゐたつて、勉強出来るぢやないの。」

「出來やしないさ。そんなところで喋つてゐられちゃア。」

「とてもこの頃、勉強家になつたのね。ふゝんだ。そんなにあたしを邪魔にするんなら、お母さんにそ

云つて、ほんたうに芝の叔父さんそこへ、お使ひにやつて上げるから……」

「馬鹿。お前なんかの指圖を受けるかい。」

「覺えてらつしやい。」

登美子は、廊下を踏み鳴らして茶の間の方へ駈け込んで行つた。虎行には、思ひ掛けない救ひの手が現はれたのが、とても嬉しかった。もう十分のうちに、家を出られれば、何もかも不平をいふところはないと思つた。

「虎行！學校の服なんか、着てるこたアないんだから、早く脱いでおしまひ。」
五分の後、彼は母の、嚙み附くやうな聲を背後に聞いた。

西紺屋町——新しく變更された呼名で云へば、銀座西一丁目の、河岸近く建てられた東門ビル。(これは、近頃はやりの名稱なればこそ、ビルディングなどと名附けたやうなもの、その實、二階を入れて五六室あるかなしかの、表だけはどうかコンクリートまがひに出来てゐるが、裏は體のいゝブラック建の小屋普請だ) その二階の南に突き出たやうな一室——疊を敷いたら、それでも八疊は敷けるだらうが、周囲の壁紙などが、ひどくちやちなので、如何にもお粗末極まる部屋だといふ感じがする。——その部屋の電話の前で、先刻から腫は、スターを立て続けに喫みながら、獨り虎行からの電話をいらくした氣持で待ち侘てゐた。

室代金二十五圓、それで電話が附いてゐるのだから、いくら不景氣の當節でも、安いことはこの上なしたが、さてその安い室代さへも、この三月といふもの、唯の一錢も入れたことがないのだ。責任者の名前は、米澤徳三郎と云へば何かいつぱしの實業家のやうにも聞えるが、これがペイちゃんと綽名のあつる腫の仲間なのだから、俱樂部といふ名で貸しただけに、家主は相當困つてゐるらしい。

ガランとしたこの部屋を、近頃腫は、六時から八時までの二時間一人で占領することになつてゐた。虎行との打合せや待合せに、カフェーやバーのやうに、人目に附く惧れがないだけでも、彼女らの仲間

の隠言で所謂「龍宮」は、氣易かつた。

腫は、また腕時計を見た。針は七時五分前を指してゐた。

ついさつき、おゑんと三宅坂のバスの中で別れる時も、虎ちゃんはきつと電話を掛けるわよと、あれほど自信あるらしく云はれたのだから、まさか待ちばけを食ふやうなことは、あるまいと信じてゐるのだが、それにしても、あの鬼のやうなお袋に叱られたあとだと聞いてゐるだけに、やッぱり不安の方が先に立つて、何か電話のベルに故障でもあるのではなからうかと、幾度も毛筋ほどの微動さへしてゐないベルの上を、見詰めたりしてゐた。

「——あゝ辛い。あたし、どうしてあんな子供のような虎行さんに、かうまで會ひたいんだらう。……」こんな時は、ペイちゃんでも、水兵でも、出目金でも、誰でも構はないから、息詰るやうなこの氣持から、救ひ出しに来てくれればいゝ——と、腫は思った。が、彼女の日頃の命令を、主命のやうに心得てゐる彼等や彼女達が、嚴禁されたこの時間に、こゝへ現はれやう筈はなかつた。

腫は、仕方なしに、またスターに火を點けた。と、その刹那、彼女は軽くドアをノックする音を聞いた。

耳を澄ました。——また聞いた。「はい。」

「這入つてもいゝの？」

「あら！」

實際瞳が驚いたのも、無理はなかつた。電話さへどうかと危むでゐた虎行が、興奮に頬を眞ッ赤にし、ドアの陰から覗いてゐたのだから……

「いゝの？」

「いゝも悪いもないのよ。さ、速く這入つて頂戴。」

轉がるやうに駈け寄つた瞳は、虎行の手を、力一杯握りしめた。

「随分待つたわ。あたしさつきから、電話の前に腰をかけたきり、些とも動かずにゐたんですもの。——でも、よく来てくれたわねえ。」

「随分、まるツちやつた。出て来ようと思つても、駄目なんで……」

「さつき、おゑんちゃんから聞いたわ。お母さんに、何かひどく叱られたんですつてねえ。」

「あゝ。」

「あたしのことで？」

「さうぢやないけど。——あのね瞳さん。僕もう家へは歸らないつもりなんだよ。」

「ええ！」

瞳は流石に驚きの眼を見張つた。

十三

息詰るやうな沈黙が、突然二人の上を掩つた。虎行はやり場のない視線を、近くのビルディングの屋根に輝く、ネオン照明の上に投げてゐた。瞳の眼は、虎行の顔から離れなかつた。

「虎行さん！」

彼女の聲は眞剣だつた。

「え？」

「あんた、いまのこと本當？」

「どうして？」

「だつて、本當なら本當のやうにあたしも、覺悟しなけりやならないもの。」

「覺悟なんて……」

「いゝえ、さうなの。もとを云へば、みんなあたしの責任なんだから……」

接吻市場

「うゝん、さうぢやないさ。僕が家を出ようと思つたのは、僕の勝手なんだよ。瞳さんの責任なんて、そんなことありやアしない。」

「虎行さん！」と瞳は再び、虎行の手を握りしめた。「あんた、いざらしいことをいふわねえ。——安心して頂戴、あたし、どんなことがあつたつて、あんたを失望させるやうなことは、しやしませんから。……」

「失望だなんて、僕ちつとも考へやしないけど、唯これから先、もう學校へは行けないし、どつか會社へでも這入つて、食へることぐらゐ、自分で働かなければならぬからね。——なんていふんだらう、就職口ツてのも變だが、どつか、さういふ勤め口を、瞳さんの知つてゐる人に、頼んどいて貰はなけりや。……」

「まア、そんなことまで心配してるの？ いゝわよ。瘦せても枯れても、瞳が附いてる間は、決してあんたに餘計な苦勞はさせやしないわ。あんたのためなら、あたしどんな悪者にでもなつて、十倍も百倍も、幸福にして上げるから。……」

「でも僕、やつぱり自分で働かないと、気が済まないもの。體は丈夫だし、それに、男なんだし。……」

「あんたは本當に、無邪氣な方ねえ。今の世の中ぢや、男だなんてことには、何の價値もありやアしないのよ。あんたよりもつと大きな、立派な體をした男が、この東京だけにだつて、どんなに澤山仕事がなくつて、うよく／＼してるかを考へてごらんさいな。それがみんな、學校だけはどうか卒業した、知識階級ツて仲間ぢやないの。そのことを思や、女の値打ちや、まるで廢りがないのも同じよ。よんどご飯を食へるのに困つたら、エプロン一枚持つて、どこかのカフェーへ駆け込めば、その日から、どん

なにしけの時だつて、二圓やそこらのお小遣には有り附けるんですものねえ。——こんなこと、虎行さんに云つたつて、判りやしないでせうけど、それ程、男の値打は下落してる時代なのよ。だから、自分で働かうなんてことを考へるのは、どう考へたつて無駄な話だわ。ね、あたし決して悪いやうにはしないから、その決心で出て來たんなら、これから先のことは、一切まかせといて頂戴。」

「でも、僕は、こゝに去年から貯めといたのを、十圓持つてるだけなんだもの。……」

「だからよ、そんなことは、氣にしないで、親船に乗つた氣でゐればいゝといふのよ。——あたしの世界中で、一番好きな人なんですもの。この身を割いたつて、不自由させやしないわ。——それより、どう？ あんたまだお夕飯前なんでせう？」

「前には前だけど、ご飯なんか、ちつとも食へたくないから。——」

「まアそんなこと云つてちや駄目よ。食へる時には、ちやんと食へとかないと、あとで困るわ。直ぐおもてへ出れば、何んでもあるから、一緒に食へに行きませうよ。」

「でも實際僕、ちつともお腹が空かないんだもの。」

「空かなくつても、食へれば食へられるものよ。さ、行きませう。」

瞳はさう云つて、テーブルの上に置いたハンド・バッグを取ると、虎行の手を引張つて立たせた。「かうなつたら、どうせこれからは、世間と戦争よ。あんたが確かりして下さらなけりや、大敵を向

ふへ廻しての、戦ひは出来ないわ。」

土曜日

——こんばんのチェリー・ダンスに、あなたの爲のシートを取っておきました。七時に帝國ホテルへいらつしやい。D——

それは、家出をした虎行を、百人町のアパートへ連れて来てから丁度一週間目の土曜日だった。瞳はやがて三十分で會社が引けやうといふ、正午間際なので、いつものやうに、ハンド・バッグを小脇に抱へて、念入りの化粧をして出て來ると、カバールを掛けたタイプライターの上に、極めて拙い日本語で書かれた、かうした會社の用箋が載せてあるのを發見した。

署名を見るまでもなく、それが支配人のダーモンであることは、瞳にはいきなり直感されたが、彼女はわざと、そこから斜めの向ふに見える、ダーモンの方へは眼をやらずに、澄ましてその用箋をまるめてしまつたのだつた。

接吻市場

「——ふん、冗談でせう。その手に乗つてたまるもんかい。お生憎さまだア。」

瞳は口の中でかう呟くと、いまし方綺麗に紅を付けて来たばかりの下唇を、やけにまげて、前歯を噛んだ。

「どうしたのよ、田村さん。」

瞳のすぐあとから、これも顔を直して歸つて来た、カード係りの石井鶴子は、小聲で彼女の顔を覗き込んだ。

「なんでもないのよ、問題にする程のことぢやないわ。」

「でも、あんたお任せねえ。」

「何が？」

「御最負が澤山あつて。」

「有り難迷惑よ。なまじツか、そんなものない方が、どんなにいゝか知れないわ。御希望なら、いつでもそちらへ廻すわよ。」

「だめよ、あたしのやうな古い女ぢや、先さまがお氣に召さないから……」

「うまく云ふわ。——何しろひと足お先へ。——」

「あら、もう？ あと十分よ。」

「あと十分がイヤなの、けふは鬼門だから……」

一週間この方、毎日一番最後に会社の通用口を潜つて、一番最初に門を出てゆくのは、瞳だった。誰一人として、今度の虎行の事件に就ては、知つてゐる者はなかつたが、それにしても、彼女のかうした態度が、忽ち會社中の評判になつたことは、争はれない事實だった。が、獨り支配人のダーモンだけは、どういふ考へか、そんなことには眼もくれずに、只管瞳に對する好意を、益々あからさまに標榜してゐた。

云つて見れば、その道にかけては、素人ではない筈の瞳は、今夜ホテルで、チェリー・ダンスがあることぐらゐ、百も二百も承知だった。しかも、ひよつとすると、ダーモンから誘はれはしないかとの豫感も、ないではなかつたのだが、さてそれが、現實として現はれて來るとなると、腹の立つほどイヤで堪らなかつた。

チェリー・ダンスと云へば、知つてゐる顔から考へても、二十や三十は間違ひなくゐるに極まつてゐた。その二三十人の視線が、一齊にダーモンと自分とに集まるのを想像する時、瞳にはどう有利に考へたところで、餘りみえになる役ではなかつた。

接吻 彼女が、歸り仕度の速足で、太い柱の蔭まで來掛つた時だった。いままで、少しもこつちのことなど、氣にしてゐるらしくもなかつたダーモンが、あわてて背後から追つて來て、軽く指先で肩のあたりをツ突くと、命ずるやうに、No.3と書いた應接室を眼で指した。

「ご用？」

「イエース、大急ぎ。」

この三號室は、重役用になつてゐるだけに腫は、秘密會議のタイプを叩く時でもなければ、滅多に這入つたことのない部屋だつた。

「お掛けなさい。」

「——（おあいにくですがね。家にや可愛い虎行さんが、首を長くして待つてるのよ。チェリー・ダンスのおつきあひなんか、どう致しましてだ）——」そんな氣持で腫は、テーブルの向ふ側へ腰をおろした。「あたし、あなたに、ひみつの話あるのです。」

ダーモンは、さう云つて、ニヤリと笑つた。

二

「秘密のお話ですつて？ まアなんでせう。」

それが例令外人であるにもせよ男の口から聞く「秘密の話」には腫は慣れ切つてゐた。相手が秘密がれば秘密が程、實は、大した秘密でないことも、彼女は百も承知してゐたのだつた。

いま、ダーモンが、こんな重役の應接室へ、自分を連れ込んで、妙に聲をひそめたのを見ると、寧ろ

腫はその吐の底が見え透いてゐるだけに、苦笑さへ禁じ得なかつた。

「わたしのあげた手紙、讀みましたか？」

ダーモンは尖り氣味に赤味を帯びた鼻の頭を、ちよいとハンカチでこすりながら、かう云つて、上眼遣ひに腫を見守つた。

「え、拜見しました。秘密と仰しやるのは、そのことですの？」

「さうです。ひみつ、誰にも内所です。あなた、田村さん。喜んで今晩行つてくれるですね？」

「ホテルへですか？」

「さうです。わたし常に、あなたをヘルプしてあげてるでせう。これ、決して恩に着せるころありません。たゞ今晩は、いつしよに楽しく、二人で踊りたいと思ひます。ね？ そのために、シート取りました。會社の人ひみつなら心配ないです。直接ホテルへ行つて下さい。」

「折角ですけれど」と、腫は極めて明瞭に否定した「あたし、今夜はお供させて頂けないんですの。」

「今晩いけない？ なぜ？」

「弟と、邦樂座へ行く約束してあるんですもの。」

「弟と？ あなた、弟さんあつたですか。」

「ありますわ。ちやアんと……。」

「弟さん、何してます?」

「まだ中學生ですの。とてもシャンですわよ。」

「シャン?」

「おほ、と」と、瞳はわざと朗かに笑つて「あたしこれまで一度も弟との約束を、反古にしたことありませんのよ。ですから残念ですけど。……」

「田村さん」と、デーモンは、おツかぶせるやうに云つた「あなた、わたしの好意解りませんか?」

「いゝえ。とてもよく解つてますわ。でも、そんな具合ですから、今晚は失禮させて下さいませね。」

「いけません。——あなた、弟さんとマネーヂアと、どちらが大切ですか。」

「さア、そんなこと仰しやられても、あたし、困ツちまいますわ。マネーヂアを、決して軽く見てる譯ぢやないんですけれど。……」

「かるく見てゐる? さうです。大切に見て居りません。それよろしくありませんよ。あなた今までに、いくたび、首にする話出たか知れませんか。けれども、その時、いつもわたし、仲裁して、田村やめさせる、よろしくないといふ、抗議しました。——みな、わたしのおかげでしょ。日本婦人、よく義理知つてる。あなたも、そのこと考へる本當です。」

「デーモンさん。」

「もつと靜かに、話して下さい。人に聞かれるといけない。」

「あたしも義理はよく知つてますのよ。」

「さう? それ偉いです、それなれば、今晚ホテルへ來ますね?」

「いゝえ。」

「なに?」

「ですからあたし、伺へないんですの。可愛いあたしの弟は、今夜の邦樂座をどんなに楽しみにしてるか、知れないんですもの。今更約束を、反古には出來ませんわ。」

「わたしいま、あなたに頼んでゐる。もしかこれ、わたしの命令でしたらあなたどうします?」

「命令?」と、瞳はちよいと眼を險しくしたが、すぐにまた思ひ直して、微笑した「命令なんて、そんなことなざる筈はないぢやありませんか。」

「あるかも知れませんが。あなた、わたしの部下、マネーヂア命令する、勝手です。」

「ぢやア、命令してごらんなさい。あたしがどうするか。」

「ほう、えらい勢ひ!」

デーモンはさう云つて、殊更愉快さうに笑つた。

それから三十分の後、圓タクで、躑躅ヶ丘アパートへ歸つて來た瞳は、自分の部屋で黒いツボンに、セーター一枚の虎行と、同じソファーに腰をおろして、話し合つてゐた。

「だからあたし、嘘をついて出るのはいやだから、あんなに、みんな云つちやつたんぢやないの。ね、解つたでせう？その支配人は立派に奥さんもある人なんだから、決して間違ひのあらう筈はないし。……」

「僕、さつきから、そんなこと、いゝとも悪いとも、云つてやしないぢやないか。たゞ、寂しいから、行かないで済むんなら、よして貰ひたいツて、頼んでるんだよ。」

「寂しいツて、それだツて、ほんの二時間ばかりぢやありませんか。それに寂しいのはあなた一人ぢやない筈よ。イヤで、仕方なしに、それもあなたと二人の、これから先のことを考へればこそ、出掛ける私の氣持にも、少しはなつてくれたらどう？ それアこゝへは、別に、狼も來る氣遣ひはないし、から、あなたを、ゐない留守に、攫はれるとは想はないけど、一人で残して置くことは、あたしの身になつてみれば、どんなに心配だか知れやしないわ。ねえ虎行さん、あたし、決して行きたくツて行くぢやないのよ。といツて義理でもなければ、義務でもないの。みんな、あなたがいとしいばかりに、少しでも二人が恵まれた生活をしたと思ツて……」

「瞳さん、僕はそれがイヤなんだよ。ほんたうに僕のために、そんなにまでして、イヤな思ひを忍んでくれるんなら、僕は却て辛いもの。——考へて見てよ。家を出てから、今日まで十幾日の間、會社へ行く外には、十分と僕の傍を離れてゐたことのない瞳さんが、一度歸つて來て、またあらためて出掛けて行くなんて。……一人残された僕が、ホテルでその毛唐と踊つてる瞳さんを想像した時、どんな氣持だか、それくらゐの事、解つてくれるだらうと思ふんだがな。」

「ぢやアあなたは、あたしに、どうしても行くなツて云ふのね。」

「どうしてもツて、そんなに迄いふ權利はないんだから、萬止むを得ないんなら、仕方がないけど、なるべく行つて貰ひ度ないんだ。」

「お馬鹿さん！ 人の氣も知らないで……」

「怒つた？」

「怒りやしないけど、さうぢやないの。あたしが、こんなにまで事をわけて話して居るのに、ちツとも心も汲んでくれないなんて。——いゝわよ。そんならあたし、明日ツから、グレイ商會を棒に振つちやつて、今夜はダーモンさんを、すつぽかしてしまふから……」

「そんな、そんな亂暴なことしなくツたツて……」

「亂暴ぢやないわ。今夜すつぽかせば、どうしたツて、明日は首に極つてるわ。今までにだツて、随分

我儘勝手をして来たのを、みんなマネーデアが、大目に見てくれたんだから。……その代り、首ンなりやア、當分二人とも干乾よ。ねえ、そのくらゐのこと、覺悟してて頂戴ね。」

瞳はさう云ひながら立上ると、いま冠り換へたばかりの、グリーン色の帽子を、やけに取つて、斷髪の頭を、もぢやくくに掻きむしつた。

「いゝよ、瞳さん。止さなくつても。」

「止すわよ。あんたがそんな氣で待つてるのを知つて、行けるか行けないか考へてごらんさいな。」

「だから僕、もう何んとも思やしないから、行つて来てさ。二時間ぐらゐ、どんなにでも辛抱してるから……。」

「本當に?」

「あゝ。」

「それが本當なら、あたし、思ひ直して、行つて来るわ。その代りお土産、とても澤山もつて来てあげるからね。」

「お土産なんか、どうでもいい。」

「いゝえ、もつて来るわよ。——あ、さうだ。あんた九時なつたら、ホテルの演藝場の出口まで来て、あすこで待つてて頂戴。——さ、ぢやア分つたら、ちよいと、お別れのキスして……。」

四

經營費の大部分を、そこから捻出すると云はれてゐる、帝國ホテルの、孔雀の間と稱する、五階の大ホールは、今宵、年一回のチェリー・ダンスとあつて、世間の不景氣も何んものかは、周圍の色提燈に、まだ燈のはいらぬうちから、數百の内外人が豫約のテーブルに詰め掛けて、夢ばかりなる春の一夜を、精一杯の歡樂に過ごさうとしてゐた。

ダンス場の四隅には、根本から切られた自然木のまゝの八重櫻が花もたわゝに飾られて、こゝばかりは、失業者の苦しみも、就職者の悩みも、まったく別世界の空事に過ぎぬのであらう。ホールの周圍から、サイド・ステージまで、所狭くセットされたテーブルからは、盛んにカクテルやシャンパンを呼ぶ聲が亂れてゐた。

定刻の七時になると、各テーブルは、もはや一の空席もないまでに満されて、その間を今宵こそ、貰つただけ身に附くチップを目當の、ヘルプのボーイ達が、腕に擦を掛けて、サービスに努めてゐた。

ジャズの響、ダンスの靴音、煙草の煙、女の匂ひ、酒の匂ひ——それらが次第に濃くなるにつれて、あたりは益々華やかな雰囲気浸つて行つた。

バルコニーに臨んだ、南側の一隅に豫約しておいたテーブルに、三十分程前から、獨りミリオンダラ

1を飲みながら、頻りに入口の方へ視線を遣つてゐたダーモンは、再び三度、毛の一杯に生えた手首の、腕時計に眼を移したり、その合間には、シガレット・ケースを開いたりして、盛んに瞳の來るのを待つてゐた。が、七時を過ぎてても、彼女の姿が見えないのに、聊かいらくした氣持で、いま、ボーイにカクテルの代りを命じたところだつた。

「やはり、ミリオンダラーでよろしうございますか？」

「さう。速く！」

「はい。」

ボーイは、ぴよこりと一つ頭を下げると、急いで彼方に去つた。このダーモンの様子を、先刻からぢつと見守つてゐたのは、青羅紗のジャケットに、小さな箱を胸から下げた煙草賣のボーイだつた。

「やつこさん、ひどくぢれてやがるな。——」

彼は口のうちでかう呟くと、ちよいと鼻の頭を動かして、冷笑した。と同時に、如何にも丁寧らしく頭を下げて、ダーモンの前へ佇んだ。

「お煙草でございますか。」

「ノー、煙草よばない。」

「失禮いたしました。」

「おう。」

「へえ。」

「ウエストミンスター。」

「はい。」

ダーモンは、五十錢銀貨を二個箱の中へ投げ込むと、ひつたくるやうにボーイの手から、ウエストミンスターを取つた。

煙草賣のボーイ、それは瞳の仲間の、ベイちゃんであつた。

彼は先刻、いつも行きつけの、淺草の玉屋で玉を突いてゐるところへ、突然、瞳から電話が掛つて來たのだつた。——今晚、ダーモンと一緒に、どうしてもホテルへ行かなければならない破目になつたら、何んとかして腕を籍して貰ひたい。——といふのがそれだつた。場所がホテルだけに、ベイちゃんに取つては、至極簡単だつた。あすこにある友達に頼んで、ダンス場へさへもぐり込めば、どうにでもなる。——さう思つて、彼は一も二もなく、引受けてしまつたのだ。

で、彼は危急の場合とあつて、圓タクを奢つて、ホテルへ乗り着けると、早速友達に、唯で働くからといふ條件で頼み込んだ結果、煙草賣のボーイといふ役を振られたのであつた。

慣れない仕事だが、難しくはなかつた。殊に器用な彼は、至極愛想のいゝサービスで、まんべんなく、

ホールの隅々まで廻つて歩いた。が、その眼は、絶えずダーモンの上から離れなかつた。

五

瞳が、アパートの出際に思ひ直して、洋装を振袖と着替へて、ホテルへ現はれたのは、ベイちゃんが、ダーモンに煙草を賣つてから更に十分を過ぎた時分だつた。

「済みません、こんなにお待たせして……」

あでやかな、といふよりも、寧ろ一種の媚態にさへ見える迄、婉然として、テーブルへ近着いて来た瞳を見ると、ダーモンは、今が今まで、なかば中ツ腹であつた、その心持を、まったく忘れ果てたやうに、如才なく席を立つて、彼女を迎へた。

裾に春駒を大きく出して、紅白の幕の中に、満開の櫻を見せた振袖は、圖から云つても、かなり野暮な好みには相違なかつた。一口に横濱物と稱する、かうした輸出向風の恰好は、チェリー・ダンスの場合など、殊に歓迎されるらしく、フェルトの草履を軽く踏んで這入つて来た瞳を見ると、満堂の視線は、一齊に彼女の上に集注されてしまつたのだつた。

「田村さん、まことに美しいです。よく注意して、和服着て來ましたね。今晚のにんき」と、このにんきの上に、ひどく得意の力を入れて「みな、あなたに集ります。」

「ほゝゝ、飛んでもない。あたしなんか、なるたけ人目に附かないやうに、隅の方に小さくなつて居りますわ。」

「左様な必要、少しもないです。きれいな顔、きれいな着物。大いに、みなに見せるよいです。みな喜びますこと、わたし證明します。」

そして瞳がテーブルに着くと直ぐに、ダーモンはボーイに、ミリオングラマーを二つ命じた。

「あら、あたし、お酒頂戴出來ませんわ。」

「大丈夫、強くないカクテール命じました。日本酒のよに、酔ひません。」

「でも、まッ赤になつてしまひますもの。」

「少し、酔つても、わたし附いてゐます。心配ないです。自動車で送ります。」

ベイちゃんも、一刻も速く、自分の存在を瞳に知らせ、安心させようとの意志からであらう。わざと足音高くダーモンの側へ歩み寄ると、今し方彼が銜へたウエストミンスター目掛けて、素速くマッチを擦つた。そのマッチの、極めて些細な焰の先に、顎のしゃくれたベイちゃんの顔が、クロースアップされた。

「あゝは安請合したものの、まさか、ベイちゃんが、青服の煙草賣に變装してゐやうとは、流石の瞳も氣附かなかつただけに、突然鼻の先へ顔を差出された時は、ハンカチで、眼を拭かずにはゐられない程、

あわててゐた。

「——(驚いたわね。もうそんなことに、早變りしちゃつたの?)」

「——(達者だらう? かうなつたら、もうどんなことがあつたつて平ちやらだぞ。構はないから、うんと飲んで、うんと踊つて、目茶目茶に絞つてやる方がいゝんだ)」

「——(あとは、引受けてくれる?)」

「——(そのために來たんぢやないか。いくらでも引受けるから、大膽にやるべし)——」

ベイちゃんと瞳とは、突嗟の間に、眼と眼で、かうした會話を済ませたのだつた。

「ぢやアあたし、遠慮なしに戴きますわ。」

ボーイがカクテルを、銀盆の上から滑らせると、瞳はかう云つてデーモンの顔を仰いだ。

「お飲みなさい。えらいです。わたしの國の婦人、みなカクテル平氣で飲みます。あなたも、わたしの親愛な友達。カクテル飲んで、幸福になるよろしいです。」

「プローデット。……」

「ブラボー。……」

グラスが、快い音を立てて鳴つた。と、瞳はデーモンと同じやうに、そのまゝグラスを唇へ持つて行くと同時に、ぐつとひと息に、飲み干してしまつたのだつた。

「あなた、強い。」

「いゝえ、夢中で飲んぢやツたんです。もしか苦しくなつたら、助けて戴きますわ。」

「心配ない。わたし附いてゐます。」

デーモンはさう云つて、ニヤリと笑つた。

六

躑躅ヶ丘アパートの一室では、獨り残された虎行が、初めて知つた異様な寂しさを、沁々胸に味ひながら、一分間が一時間にも當る様な焦慮の「時」を過してゐた。

生れて正に十八年「愛」といふものの微塵もない、繼母の袖の蔭に成長した少年としては、稀に見る素直な心持で、今日までを送つて來ただけに、そこに聊かのひがみもある譯ではなかつたが、それでも、後からくと追つて來る今宵の不安は、否定すればするだけ次第に展がつてゆくばかりだつた。それは丁度、池中に投じた一つの石に因つて、作り出された波紋が行くところまで行かないうちは、容易に消えないのと同じ姿であつた。

接吻市場

信じてゐるとか、信じてゐないとか、さうした心持は、毛筋程もある譯ではない。が、確に右の掌に握つてゐた筈の寶石が、いつの間にか、左の掌に移つてゐたのを考へると、取り止めのない寂し

さが、孜孜として彼の胸を打った。

「瞳さん」と、虎行は突然聲を立てて呼んで見た。が、素より誰一人相手のゐない部屋の中は、特に瞳が、寂しがないやうにと云つて、つけて行つてくれた百燭の照明が、皎々として、周囲の壁紙に牙えてゐるばかりであつた。

彼は机の上に手を伸ばして、水差を引き寄せると、グラスを起して半分ばかり水を注いだが、ふと棚の上に置かれた、ウキスキーの角塚に眼を移すと、いきなりそれを取つて、いつも瞳がするやうに、五分の一ばかりの分量に、グラスの中で調合したのだつた。

實際虎行は、今まで一度だつて酒と名の附く物に、唇を觸れたことはなかつたのだ。だから、うまいとか、まづいとか、そうしたことは一切考へても見なかつたであらう。しかも今日ばかりは、その一杯でも飲めば、何か胸に蟻まつてゐるもやくした氣持を、拂ひ退けることが出来るやうに考へられてそのまゝ、直ぐに唇へ持つて行つたのであつた。

「辛い。——」

口中が、きゆうツと締つてゆくやうな氣がした。と同時に、針先で胸を刺されるやうな思ひがした。と、この時突然、卓上電話のベルが鳴つた。彼はあわててグラスを置くと、受話機を耳に當てた。それは受附の伊東さんからであつた。

「——はい、さうです。え？ 今村さん？ 僕、知りませんね。——でも、僕會つて見ても、姉さんに用があるんぢや、駄目です。——さうですか。そんなら兎に角、お通り下さいつて、云つてくれませんか。」

虎行としては、今村恒彦の名は初めて耳にする名だつた。その初めての人が、弟さんでもいゝから（瞳は、自分の仲間の者以外には虎行を、飽までも弟で通すつもりらしかつた）ちよいとお目に掛りたいといふのは、どう考へても解せなかつたが、さうまでいふものを、そのまゝ歸す譯にも行かないので、兎に角部屋に上つて貰はうと思つたのだつた。

間もなく、ドアをノックする音が聞えた。虎行は自分で立つて行つて、黙つてドアを開けた。「僕、今村です。」

紺の背廣の上に、バーバリーのレイン・コートを着て、何かおどろしたやうな態度で、ドアの外に立つてゐた今村は、虎行が開けると同時に、かう云つて、ひよつこりと一つ頭を下げた。

「どうぞ、お這入り下さい。姉は唯今留守ですが……」

ほんの一滴ではあるが、初めて飲んだばかりの、ウキスキーが利いてゐたのであらう。虎行はこの「姉」といふ言葉を、聊かのわだかまりもなく、云つてのけたのだつた。「失敬します。」

今村は急いでレイン・コートを脱ぐと、またびよこりと頭を下げてから、椅子の近くへ寄つて来た。

「急にお話したいことがあります。……」

「どうぞ、お掛け下さい。」

「お邪魔ぢやありませんか？」

虎行は、あらためて今村を見上げた。

七

「實は僕、今夜君の姉さんがお留守だといふことも、ちやんと知つて来たんです。」

椅子へ腰をおろして、ちよいとあたりの裝飾などを一瞥すると、今村は聲をひそめてかう云つた。

「姉の留守を、御存じだったんですか？」

「流石に虎行の聲は高かつた。」

「えゝ。ですけど、人に知られると困ることですから、そんな大きな聲をしないで下さい。」

さう云つて、今村は更に秘密らしい態度をしてから、おそらく自分の氣持を落着けるためであらう。

ポケットからシガレットケースを取り出すと、わざとゆつくりその一本に火を點けた。

「一體、どんなことなんです。何か姉が、いけないことでもしたんですか？」

「いゝえ、瞳さんがしたといふ譯ぢやない。寧ろ瞳さんは、被害者の方の立場にあるんですよ。」

「被害者ですツて？ ぢやア加害者は誰なんです？」

「あなたに云つていゝか、悪いか知れませんが、相手は今夜、瞳さんがホテルへ一緒に行つた、あのグレイ商會のマネーヂアなんですよ。」

「何んですツて？」

「驚いたでせう。實は僕も、今し方或所で、そのことを耳にしたんで、一刻も早く、あのおゑんちやんにでも知らせたいと思つて、出掛けたんですが、あの人が、こつちへ来たと聞いたもんですから、急いでやつて来た譯なんです。——虎行さん。うツかりすると、瞳さんは、もう二度とこゝへは歸つて来ませんぜ。」

「歸つて来ない？ まさかそんなことはないでせう。姉は僕に、九時ンなつたら、ホテルの演劇場の出口で、待つてるやうにツて、さう云つて出掛けたんですから。……」

「君は何んにも知らないから、そんな暢氣なことを言つてるんでせうが、あのダーモンといふマネーヂアは、日本と上海を股にかけてる、凄い色魔なんですよ。」

「だつて、まさか姉が、そんな毒牙に掛らうとは、僕には考へられませんもの。」

「それア勿論瞳さんは、あんな伶俐な人だし、それに、さう簡単に誘惑に乗るやうな人ぢやないのは判

つてるけど、何しろ相手は毛唐ですからね。どんな手段を用ゐるか知れないといふ、心配があるんですよ。今までにだつて、ダーモンに見込まれた者は、殆んど悉くと云つてもいゝくらゐ、彼の毒牙に罹つてるといふし……君の前で、こんなことをいふのは變だが、瞳さんに友達以上の好意を持つてる僕としては、とても心配で堪りませんからね。」

「今村さん！」

「え？」

「あなたが、今云つた姉に友達以上の好意を持つてるといふのは、本當ですか？」

「弟さんの前で、イエスと答へるのは、ちよいとてれる譯だが、そいつは實際なんですよ。」

「失敬ですが、直ぐに歸つて下さい。」

「何んですつて？」

「直ぐ歸つて貰ひたいんです。僕は、姉に友達以上の好意を持つてる人などと、この先、五分間だつて、話しちやアゐられませんか……」

「變ですね、そいつは。僕が瞳さんに好意を持つのが、いけないといふんですか？」

「いけないさ、友達なら友達でいゝが、男が女に友達以上の好意を持つなんて、そんなことが、いゝ譯はないぢやないですか。——何しろ、もう澤山ですから、歸つて下さい。」

「これア驚いた。人に好意を持つて怒られやうとは思はなかつた。——しかし虎行さん。君の姉さんの身に、何か間違ひが起つても、僕は知らないぜ。」

「結構ですよ。親切以上の親切なんか、他人にして貰ふことはないんだ。」

虎行はさういふと、いきなりそこにあつた残りのウキスキーを、息をも繼がずに飲み干してしまつた。

八

何が何やら、一向解せない心持で、今村が歸つてしまつたと、虎行は、もう一刻もぢツとしては居られなかつた。彼は更に、グラスに残つてゐたウキスキーを、嘗めるやうに飲み干すと、市松模様のスキーの上へ、學校の正服を着けて、烏打帽子を鷲掴みにしたまゝ、一散に階段を駆け降りて行つた。駆け降りたといふよりも、ウキスキーに足をとられて、轉がつて行つた、と書いた方がいゝかも知れない。——兎に角、心臓が破裂しさうに急だつた。

「伊東さん、濟みませんが、圓タクを呼んでくれませんか？」

折から子供のエプロンへ、飾りミシンを掛けてゐた受附の伊東未亡人は、びつくりしたやうな眼を虎行の上に落した。

「まア虎行さん！ 今頃そんなに急いで、どちらへお出かけなんですの？」

「ちよいと、急いで行きたいところがあるんです。」

「いけませんね。姉さんのお留守に。——おまけに、そんな赤いお顔をして。」

「大丈夫ですよ。僕、悪いところへ行くんぢやありませんから。……」

「あなたのやうな善良な方が、お酒を召上るなんて。……」

さういひながらも、伊東さんは四谷の五三五番へ掛けて、自動車を呼んでゐた。

瞳の眞似をして、ちよいと喫んだのが、一三日前から急に癖になつたらしく、虎行は、圓タクの来る

間、ポケットから出した煙草を頻りにふかし續けた。

「お姉さんは、どちらへいらしたんですの？」

「帝國ホテルです。」

「およばれですか？」

「毛唐とダンスをしに行つたんですよ。」

虎行は、吐き出すやうにかう云ふと、もう一刻も落着いてゐられなくなつて、折から来た自動車を目

掛けて、玄關先へ飛出してしまつた。

「どちらへ？」

「帝國ホテルへ行つて下さい。」

「はい。」

運轉手はバック、ミラーに映る虎行の顔を、不審さうに見守つてゐたが、そのうちにも、車は西大久保

から改正道路を、抜弁天の近くへ出てゐた。

三十哩は出してゐる筈の車が、虎行には遅くて堪らなかつた。

「もし急げませんか？」

「承知しました。」

が、急いでゐる客の、かうした註文に慣れてゐる運轉手は、返事だけはしても、決してそれ以上の速

力を出さなかつた。

車は河田町から合羽坂に出て、士官學校の前を、津の守坂の方へ曲らうとした。と、虎行は、あわて

て聲を掛けた。

「君、まッ直ぐ行つてくれませんか。その坂を上られると、僕少し困ることがあるんだから。……」

急停車した運轉手は、聊か不平さうな顔をバック・ミラーに映した。

「お急ぎでしたら、この坂を登る方が、近道なんですがね。」

「急ぐにや急ぐんだけど、そつちは具合が悪いから。……」

實際、いくら夜でも、虎行は父の家の前を、自動車で通過する氣にはなれなかつた。——運轉手は、

市ヶ谷八幡の方へ車首を向けた。と、その刹那であつた。彼は女中のお絹と共に、向ふから歩いて来た妹の登美子と、ばったり顔を合せてしまったのだつた。

「あッ！」

確かに虎行は、登美子の聲を聞いた。が、事實それが、どれだけはつきり彼女に印象されたかは疑問だつた。なぜなら、その一瞬間、彼は眼深にハンチングの廂を、おろしてしまつたから……

まさか登美子に、自動車の番號を見極める程の、智慧があらうとは思はれなかつた。しかし、活動好きの彼女の頭には、さうした考へが、突嗟に起らないとも限らないといふ不安が、直ぐに後から涌いて来た。

九

ホテルでは、今やダンスが酣だつた。孔雀の頭に當る、正面のステージに控へたジャズ・バンドは、盛んに日本の俗曲なども取入れて、彌が上にも今宵の歡樂を徹底せしめようと努めてゐた。

各所の二三人から二三十人を一團としたテーブルには、いづれも半ば以上女が混じつてゐたが、中には、瞳のやうに外人と唯二人だけで、テーブルに着いてゐる者も二三組はあつた。——いづれかの公使館附の青年武官であらう。空色の軍服を着た背の高い一人は、自分と共に踊る筈の相手が、頻りに他の

グループの紳士と踊り續けてゐるのに、快々として樂しまず、矢鱈にカクテールを註文しては、唇の干く暇もないまでに、飲み續けてゐるのが、満座の視線を集めた。

シャンパンを抜く音が、盛んにジャズに混じつて聞えた。渦巻く紫烟の中に、女の肌の匂ひと、男の髪の毛の匂ひとが、更に絡れ合つて、人々は、少しでも強い刺戟を需めるのに急だつた。

瞳は、ダーモンと共に、既に數回踊つてゐた。しかもその度毎に彼女は、ダーモンにシャンパンを勧め、彼の酔ふのを待つた。

酒にかけては、可なりの豪の者らしかつたが、あとからくと、矢繼早に勧められるのには、好きな道とはいへに、彼は相當まゐつたらしかつた。

ダーモンが、蹠蹠として、洗面所へ立つたあとだつた。それを見たベイちゃん、あわてて瞳の側へ寄つて来て、聲をひそめた。

「やつこ、なか／＼強いぢやないか。」

「大丈夫、もうたいがいまゐつちやつてるから……」

「どこへ連れ出す氣なんだい？」

「横濱さ。いゝ加減な時間が来たたら、自動車へ積み込んで、京濱國道をドライブすれア、せい／＼四十分足らずで、向ふへ行けちやうもの。」

「だけど、うまく行くかい？」
 「細工は隆々仕上げを御覽じろだ。憚りながら、腫姐さんの腕でする仕事だよ。」
 「いけねえ、ひとちゃん。自分から先へ、そんな上機嫌になつちやっちや、駄目だぜ。」
 「ネヴァー・マイン。——けじめはちゃんと附いてるんだから、御心配なしさ。——それよりベイちゃん。もう間もなく九時だからね。うツかりしていると、虎行さんが、約束通り、演藝場の入口の所へ来て、立つてるかも知れないんだよ。あんた、その煙草をどつかへ片着けといて、ちよいと様子を見て来てくれない？」

「よろしい。それなら直ぐに見て来よう。」

「まだいゝわよ。あと十分経つて九時なつてからで。」

「ぢやアもう二つ三つ、ウエストミンスターを賣るか。」

「まづあたしに一つ頂戴。」

「つりは出さないことにしてるんだから、一圓だよ。」

「仕方がない。あたしもお客並に拂ふわよ。」

腫がベイちゃんの手から、煙草を受け取つたと同時に、戻つて来たのはターモンだった。彼は、金を拂はうとしてゐる腫の手を、あはてて押し退けた。

「いけない。お金わたし拂ふ。」

「さう。——ぢやア済みませんがこのボーイさん、とてもあなたのこと賞めてたんですから、チップ少し餘計やつて下さいませんか？」

「わたしのこと賞めた？」

「えゝ。およそあたしと、よく釣合ふんですつて……。」

「おゝ、よく釣合ふ。つまり似合の夫婦。オーライ。チップたんと出します。」

ターモンはさういひながら、ポケットにぢかに入れて置いた五圓札の一枚を取つて、ベイちゃんに渡した。

「あなた物事よく判る、懶巧者これ上げます。」

「済みません、こんなに戴いて」そして殊更腫の前に頭を下げた。

「奥さん、有難うございました。」

「いゝえ、少しばかり……。」

腫はさう云つて、くすぐつたい顔を、ステージの方へ向けてしまった。

「ちよいとお尋ねしますが、今夜チェリー・ダンスをやつてるところは、どこなんです？」
圓タクを乗り棄てて、演藝場の入口へ駆け込んだ虎行は、いきなり正面に立つてゐる、金モールを附けた案内人に、かう訊ねた。

「ダンスは五階の廣間ですが、どういふ御用ですか？」
暫し穴のあく程、虎行を凝視してゐた案内人は、やがて、言葉だけは丁寧だが、如何にも胡散だと云はぬばかりの態度で訊き返した。

「どういふつて、人を迎へに来たんです。」

「ぢやアあなたは、お供の人なんですか？」

「お供？」流石に虎行は、苦笑せずにはゐられなかつた。「僕はお供ぢやないぜ。姉さんを迎へに来たんだからね。」

「さうですか。姉さんを？——ではお名前と、テーブルの番號を仰しやつて下さい。ボーイに呼ばせませうから……」

「呼んで貰はなくつても、僕が自分で行くから、場所だけを教へて貰ひたいな！」

「それアいけません。あなたの、その服装で廣間へいらしつちや困りますよ。」

「學校の正服でもいけない？」

「駄目です。チェリー・ダンスはタキシードにきまつてゐるんですからね。——何しろ、あなたの御用の方を呼んで上げませう。何んと仰しやるんです？」

「田村瞳——グレイ商會の、ダーモンといふ人と來てる……」

「あゝ、ダーモンさんのお連れですか。」
ダーモンと聞くと、案内人は、更めて虎行の顔を見直してから、鼻の先を、ちよいと掌でこするやうにして、奥へ這入つて行つた。

「畜生！ だから、あんな毛唐と來ちやア、駄目だつていふんだ。」

虎行は、いらくした氣持で、登石に靴を踏み鳴らした。

と、案内人がまだ戻つて來ないうちに、慌ててそこへ出て來たのは、青服のボーイだつた。

「虎行さん！」

「え？」

虎行は、思はず眼を見張つた。

「僕だよ。」

「あ！ ベイちゃん！」

「今來たの？」

「いま。——でもベイちゃん。そんな服なんか着て、どうしたのさ。」

「これにや、色々譯があるんだ。でも、そんなことあとで判るよ。」

さう云ひながら、彼はポケットから、金縁の小形の名刺を出して、素速く虎行の手に渡した。

「なに？」

「瞳さんの言附だよ。速く見てさ。」

虎行は急いで、裏を返した。そこには、極めて無雑作に、鉛筆の走り書がうねつてゐた。

——あたしを信じて、すぐアパートへ歸つて待つて下さい。委細はのちほど。——

「ぢやア瞳さんは、まだ歸れないの？」

「だからさ。君はそこに書いてある通り、どこまでも瞳さんを信じて、アパートへ歸つてりやいゝんだよ。ベイちゃんが附いてるんだ。決してドヂを踏ませるやうなことはないから。……」

「でも僕。——」

「弱氣ぢや駄目だぜ。ね、その通りに實行しなけりや駄目だよ。」

そこへ先刻の案内人が、戻つて來たのを見ると、ベイちゃんはわざと丁寧に、虎行の前に頭を下げて、逃げるやうに消えてしまった。呼び止めようとして、虎行は咽喉まで聲が出たのだったが、ふと口を緘んだ。

「お待たせしました。唯今、こちらへボーイが見えませんでしたか。」

「有難う。もう判つた。」

この上口を利きたくない虎行は吐き出すやうに、かういふと、あとをも見ずに、廣場の方へ駈け出してゐた。

敷き詰めたやうに見えるクローバーの上に、おぼろの月影が落ちて、窓から洩れるジャズの音は掻き攪りたい氣持の胸を、一層焦立たせずにはおかなかつた。

十一

島流しにでも遭つたやうな、半ば悲哀と、半ば自棄との心持に浸りながら、百人町のアパートへ歸つて來た虎行は、静めようとすればする程、神経が昂ぶつて來て、ともすればその手は棚に在るウキスキの角壘へ運ばれて行つた。が、どうしたことか、心臓の高鳴りが激しくなるのと反對に、頭は益々冴えて、思ひ切り毛布を被つたベッドの中に、眼は容易に冥ぢられさうにもなかつた。

と、彼は突然、軽くドアをノックする音を聞いた。

「誰れ？」

虎行の問は、吐き出すやうに鋭かつた。

「あたし。——」

「あたしぢや判らないよ。名前を云つてさ、名前を。」

「まア、何んだつて、そんなにおかんむりなの？」

さう云ひながら這入つて来たのは、おゑんだつた。

「何んだ、おゑんぢやんか。」

「まア虎行さん。あんた一人？——どうしたのよ、そんな恐い眼をして。——まア、あんたお酒飲んだのね。一體、瞳さんはどうしたのよ。」

おそろく今頃は、二人でトラムプでもしてゐることと、想像して来たおゑんは、まったく思ひも掛けないこの室内の有様に、呆然として虎行に曇みかけた。

「どうもしないさ。君だつて知つてゐるくせに。——」

「冗談ぢやないよ。あたしが、何を知つてゐるもんですか。知らなけりやこそ、こんなお土産まで持つて、わざわざ下谷から出て来たんぢやないの。」

「ほんたうにおゑんぢやん。君は知らなかつたのかい。」

「あたしまだ、友達に嘘をつくほど、芯は腐らないつもりよ。——あゝ判つた。あんた今夜、瞳さんに何か逆らつて、新宿かどつかへ一人で散歩に出られちやつた、といふ譯なのね。ね、さうなんでせう？」

「そんなことぢやないよ。」

「おや！ 違ふの？」

「瞳さんは、今頃、帝國ホテルでデーモンとかいふ馬鹿野郎と、ダンスをしてるんだ。」

「ダンスを？」

「さうさ。で、僕がさつき、約束の九時になったから、迎ひに行つたら、ベイちゃんに言附けて、こんなもの寄越すぢやないか。——あたしを信じて、先へアーバトへ歸つて、待つて、下さい——おゑんぢやん。一體どつちが無理なんだか、考へて見てくれよ。」

おゑんは、虎行がポケットから摘み出した瞳の名刺を、穴のあく程見てゐたが、やがて聲を立てて笑つた。

「虎行さん、あんたほんたうに、お坊ぢやんねえ。」

「何が？」

「何がツて、さうぢやありませんか。ちつたア姉さんの氣持も、察しなけりや駄目よ。」

「氣持も何もないさ。僕がこんなに、不愉快な、イヤな思ひをしてるのに、自分だけ、毛唐とダンスなんかしてるなんて……」

「だから、それがねお坊ぢやんだといふのよ。こゝでかうして待つてるあんたより、ホテルで、イヤな

男の相手をしてる方が、どれだけ辛いかわらる、考へて御覽なさいな。死ぬ程好きなあんたを、誰が酔狂に、ダンスなんかしてるもんですか。そんなことぐらゐで、やけになつたり、お酒を飲んだりしたら、それこそ罰が當るわよ。」

「ぢやア一體おゑんちゃんは、瞳さんが、何んのために、そんなイヤナ奴と、ダンスをする必要があるツてんだい。」

「何んのためもない、あんたのためによ。」

「僕のために？」

「さうよ。みんな虎行さんのためを思へばこそ、姉さんは、そんなイヤな思ひ迄してるんぢやありませんか。唯、無暗に怒つたり、情氣たりしちやア勿體ないわ。」

「イヤだ。僕は、僕のためになら斷然そんな眞似はして貰ひたかないんだ。」

虎行はさういふと、兩手で頭を掻きむしつた。

十二

そこに、どれだけの時間が経つたか、虎行は少しも知らなかつた。カナリヤの聲に（瞳は半年ばかり前から、二羽のローラ・カナリヤを飼つてゐた——）ふと眼を覺した彼は、日の差し込んだ枕許に、既に

に、洋装と着替へて、いつもの通りの装をしてゐる瞳が、椅子に凭れて、新聞を見てゐるのを發見した。

——昨夜、おゑんが自分を慰めて歸つた後の何時間かを、悶々のうちに過ごしてゐるうちに、いつの間にも眠りに落ちたのか、記憶の糸は極めて茫漠たるものであつたが、ベッドの中で、午前二時を聞いたことまでは、正に彼の記憶にあつた。確に（或はこの確には、大して確ではなかつたかも知れないが）虎行の記憶の範圍では、その時までには、確におゑんが枕許の近くの椅子に凭れて、「映畫と演藝」などを見てゐるに相違なかつた。だから、いつ、そのおゑんが瞳と代つたものか、そこに到ると少しも考へ及ぶことが出来なかつた。

ふと彼は、外すのを忘れて、そのまゝにしてゐた腕時計を見た。いつの間にこんなに眠つたものか指針は丁度十時を指してゐた。

「お目が覺めて？」

新聞に視線を落しながらも、虎行のすべてを見送さずにゐた瞳は無論彼が腕時計に眼をやつたのを氣附かぬわけはなかつた。いつもの朝と少しの違ひもない微笑が、瞳の頬には、明るく漂つてゐた。

「よくお休みなつたわねえ。」

「……………」

「おゑんちゃんがいっつ歸つたか、まるで知らないでせう？」

「あたしの、歸つて來たのも。——」

「……………」

「まア虎行さん。あんたどうしたのよ。そんな黙りこくつて。——あゝ判つた。あんたゆうべのことで、氣を悪くしてらッしやるのね。まアイヤだ。馬鹿々々しいわ。あたしさへ信じて下されば、平氣なこどぢやないの。——ほんたうに、なんてお坊ちゃんなんぞでせうねえ。それに、あんなに、ウキスキーなんか飲んだりしてさ、體でもわるくしたらどうするのよ。」

「いゝよ、僕、自分の勝手なんだから。……」

「ほゝゝゝ、お馬鹿さん。あんたは、どんなことがあつても、怒らない約束ぢやないの。——まアいゝから、いゝ加減に機嫌を直すものよ。あんたのために、あたし、とても稼いで來てあげたんぢやないの。」

さう云ひながら、瞳が虎行の眼の前に、古端書のやうに投げ出したのは、五枚の百圓紙幣だつた。

「これであんたは、希望通り、今日ツからでも、新興洋畫會へ通つて頂戴。」

さすがに虎行は、瞳の顔を見守らずにはゐられなかつた。

「どうしたのよ、そんな顔して。……あんたがこの間ツから、あんなに言つてた、思ひが通つたんぢや

ありませんか。」

突然、虎行はベッドの上に跳ね起きた。

「一體そのお金、誰から借りて來たのさ。」

「そんなこと、どうでもいゝぢやないの。あたしが、あんたの迷惑になるやうなこと、して來る筈ないんだから。……」

「だつて、少しなら兎も角、こんなに澤山のお金。……」

「虎行さん。あんた、も少し度胸をつけてよ。これが萬とまとまつたお金なら別だけど、百圓紙幣の五枚や十枚に驚いたやうな顔をしちや、耻よ。どこからどう借りて來ようと、貰つて來ようと、みんなあたしの考へひとつなんだから、あんたは唯それをもとでにして、自分のほんたうにしたいと思ふ勉強さへしてれば、それでいゝぢやないの。——脇目も振らずにまつしぐらになつて。……」

「でも、そんなことは僕には出來ない。」

「どうしてよ。」

「だつて、僕は男ぢやないか。」

「またあれだ。——」

瞳は、じれツたさうに、軽い舌打をした。

「あたし、この前もあなたに云つたわねえ。今の世の中では、男なんて名前には、三文の値打もありやアしないんだつて。——考へても御覽なさいな。人間が、男といふ名前を貰つたばかりに、どんなに悪いことを、臆面もなくしてゐるかつてことを。私設鐵道から賄賂を取つた大臣も男なら、勳章を賣つた總裁も男。それを買つたのも、仲へはいつたのも、みんな男ぢやありませんか。——弱き者よ、汝の名は女なり。だなんて、キリストはその昔、こんな時代が來る事を、知らなかつたもんだから、随分偉さうに云つてるけど弱き者は女ぢやなくつて、實は男だつたんだから、をかしいぢやないの。——ねえ虎行さん。殊にあんたは、まだ學生よ。みつともないの、耻かしいのつてことなんか、なんにも考へる必要はないんだから、萬事あたしに任せといたま、自分の好きな道を、精一杯に勉強するに限るんだわ。あたしだつて、これでも満更の馬鹿ぢやないんだから、自分のしてゐること、して悪いことのけじめだけは、ちやんと附けてるつもりなの。だからあんたも、男なんて、つまらない名前の意地に囚はれないで、もつと素直な、ゆつたりした氣持であらうか？ たとへあたしが笑はれたつて、あんたを笑はせるやうなことは、決してしやアしないから……」

かう云つてゐるうちにも、瞳の頬には、いつか微笑が消えて、次第に眞剣な色の溢れてゆくのが、あ

りありと讀まれた。

が、虎行にも、やはり所謂「男」の意地はあつた。殊に彼は、壯士から出世した父の大言壯語、例へば「男子一度、青雲の志を抱けば……」の如き、矢鱈強がりの言葉を、幼少から耳にしてゐただけに、その性格の温順にも似ず、いつとはなしに「男であるから」との氣持が、肚の底に密着してゐて、容易に脱け切ることが出来なかつた。

だから、瞳にそんなに云はれても、この上、彼女が如何にして得て來たか不可解の金で、洋畫研究所へ通はうといふ氣には、どうしてもなれなかつた。

「僕、瞳さんのその氣持は、判るには判るんだが……やつぱりイヤだなア！」

「なぜそんな、こじれた氣持になるのよ。」

「なぜも何んにもないけど、こんな、出所の判らないやうなお金で研究所へ通つたつて、氣持よく勉強は出来ないからね。」

「だから、今も云つたぢやないの、そんなことには、氣を遣はなくつてもいゝつて。あんたは、銀行から出して來たお金を、そのまゝ遣ふやうな氣持であれば、云ふとこはないのよ。ね、判つたでせう？」

「ぢやア瞳さん。僕に本當のことを云つてくれないか。この五百圓のお金は、誰の手から出たかつてことを……」

「誰の手から？」

「あゝ。瞳さんは、餘計な心配だといふかも知れないが、僕に取つちやア、とても大事件なんだからね。はつきり、ほんたうのことを云つてくれない？」

「あんたは、そんなに、あたしを信じないの？」

「信じるとか、信じないとか、そんな問題ぢやないよ。僕は唯、自分の心が済むやうにその出所をはつきり知つときたいと思つてるんぢやないか。」

「おほゝゝゝ。あんたは案外神経質ね。——ぢやア云つてあげませう。そのお金はね、あたしが、ダーモンから貰つて來たの。」

「ダーモンから？」

「さうよ。そんなこと今更訊くだけ野暮よ。あたしが何時に行つて何時に歸つて來たか、それを考へれば、直ぐ判ることぢやありませんか。おまけに相手が不良外人で會社の支配人と來れば、筋はお誂へ向ぢやないの。——だけどねえ虎行さん、安心して頂戴。あたしはどんなにケチな女に成り下つても、命まで賭けた、あんたに申譯のないやうなことは、決してしやアしませんから。……こんな蓮ツ葉な風はしてゐても、あたしにも日本人の持つ、女の心だけは、ちやんとしまつてあるんですからねえ。」

瞳の臉には、ふと、露が宿つてゐた。

トリック

—

虎行が、瞳のまごころに動かされて、四谷仲町に在る新興洋畫研究所へ通ひ始めたのは、それから三日の後だった。

當分は、石膏像のスケッチのみに、専心であればよいにも拘はらず、入學が決定すると同時に、速くも瞳は、自ら會社からの歸途を文房堂へ廻つて、繪の具はいふまでもなく、ブラッシから大小數種のカンヴァス、更にガウンから野外スケッチの帽子に至るまで、互らぬ限もないまでの諸用具を、一つ残らず買ひ揃へて、戻つて來たものであつた。

「まだこれも買つたわ。これも、これも……」

さう云ひながら、後からくと、テーブルの上に列べる、瞳の指先を見詰めてゐるうちに、虎行は、何んだか天勝の奇術でも見物してゐる様な氣持になつて、思はず失笑しずにはゐられなかつた。

接吻市場

「こんな大袈裟なことしたつて、人前で描けるまでには、とても大變だぜ。」

「心懸けひとつよ。その気でやれば。自分の好きな道なんだから、どんく進めると思ふわ。あたしが、タイプを叩き始めた時だつて、やつぱりさうでしたもの。」

「タイプライターと繪とは、一緒ならぬよ。」

それでも、これまで他人はもとより、肉身の者にさへ、一度として、これ程の温かい心で迎へられたことのない虎行は、瞳の、かうした行爲には、妙に沁々させられるのだつた。——たとへどんなに墮落しても、平ツたく云へば、命までもと惚れた一人の人以外には、最後のものまで許す程馬鹿ではないといふ。一途に、その言葉が信じられればこそ、ダーモンの問題にしても、いまは虎行の心をさまで暗くしてはゐなかつたのだ。そればかりではない。瞳の、ダーモンに對して持つたやうな、一種のうでが、いまの虎行には、寧ろ軽い尊敬の心さへ、起させたりしたのだつた。

「僕はもう、ほんたうにさつぱりした氣持でゐられるよ、瞳さんの心持が、底の底まで解つて來たから。……」

研究所からの歸途を、時間の都合のつく限り、四谷見附の停留所で待合せて、新宿あたりで、夕飯を済ませて歸つて來たり、時には虎行の方から銀座方面へ出掛けて行つて、瞳の歸りを、エスキモーや資生堂で待合せたりするのが、近頃の例になつてゐた二人は、けふも虎行の方が、一時間早く濟んだところから、見附内の自動電話で打合せると、五時半に、オリンピックで待合せて、暮れの築地河岸を散歩

してゐた。

「僕はもう、ほんたうにさつぱりした氣持でゐられるよ。瞳さんの心持が底の底まで解つて來たから。……でも僕は、いつになつたら、展覽會へ出るやうになつて、瞳さんに恩返しが出来たらうか。」

「恩返しだなんて、どうしてあんたは、そんなつまらないことをいふのよ。二人の仲に、恩とか義理とか、そんなことのある譯はないぢやないの。」

「僕にはあるさ。かうやつて、すつかり瞳さんにもたれ掛つちやつて、僕は何一つ、働くといふやうなこともしないんだもの。」

「また癖が始まつたわね。あれ程云つて上げたぢやないの。人間が働くことは、ほんたうに自分の土臺が出来てからでいゝんだつて。……それでなけりや、きつと途中で崩れるに極つてゐるわ。——そりやア十錢のお金を儲けるのも、千圓のお金を儲けるのも、働くといふ言葉には、變りはないでせうけど、同じ働くなら、十錢より千圓の方がいゝに極つてゐるものねえ。それにはヤツぱり土臺の積み方が肝腎よ。やわな土臺で大きな柱を建てようとしたつて、そんなことは無理なもの。——あんたは今、その土臺を築いてるんだから、ちツとも焦ることなんかないと思ふわ。世の中は、物質で成功するか、藝術で成功するか、二つなんだから、あんたは何んにも考へずに、その藝術の道を、馬車馬式に進んでいゝのよ。」

「いゝも悪いもないぢやないの。あんたはあたしの半身だから、さうするのが、あたしの責任よ。それに、なんにも希望といふものがないあたしは、あんたに希望を繋ぐのが、せめての生甲斐なんだから……」

折からの上汐に、鉛色の川波は、夜の目にだけ美しい石垣を、ひたくと打つてゐた。

二

「瞳さんに、希望がないなんて、そんな筈ないぢやないか。」

虎行は、ふと歩みを止めると、今更のやうに、石垣を打つ川波から眼を離して瞳の面を見詰めた。

「そりやアあたしが、希望がないなんて云へば、誰だつて、本當には聞いてくれないには違ひないけど、まったくあたしには、今となつて、人並の希望を持つことなんか、どんなにしたつて、出来る譯はないのよ。人間、一度石に躓いたが最後、もうおんなじ道を通る氣には、到底なれやしないもの。」

「ぢやア瞳さんも、その石に躓いた一人だといふんだね？」

「もちよ。あたしなんか、いくつの石に躓いて来たか、知れやしないわ。おまけに世間の人達は、そんなことのあるたんびに、一人だつて、手を引いて、起してくれようといふ、親切がないばかりか、みんな横手を打つて、囃し立てるんだから、叶はないぢやないの。——ごまア見やがれ、親に反いて自分勝

手の眞似をしてやがるから、そんなことになつたんだ。てめえのやうな奴は、いつそのまゝ、路端の石ころにでもなつちまやがれ。——ツて、どれもこれも、いつぱしの道徳家振つて、云ふことだけは人並なんだからね。——それがどうだらう。一足裏へ這入つたとすると、今が今まで、ころんだあたしの背中を、土足で踏み附けてた奴が、急に膝の泥を拂ひ落してくれたり、靴の紐を結んでくれたりして、變に色目を使うんぢやないの。そして擧句の果にや、私は、心からあなたに同情します、なんて、まったく、よくも慚しくもなく、そんなことが云へたもんだと思ふくらゐ、氣障な手で攻めようとするんだから、やり切れないわ。——謂つて見れば、こんな世の中よ。こんな世の中に、今更希望の持つてようが、ないぢやありませんか。だからあたしは、せめてあんただけに、一つの希望を繋いで、これから先の生活を、少しでも明るくして行きたいと思つてんの。ね、判つたでせう？」

「瞳さん！」

「え？」

「僕、だからさつきも云つたやうに、いつになつたら、展覽會へ出るやうになつて、瞳さんの恩、と云つていけないなら、希望を満たすことが出来るだらうと、それを想ふと、不安になるんだよ。」

「不安なんて、そんな弱いこと云つちや駄目よ。あんた、印度のガンヂーといふ人知つてるでせう。男は誰でも、あの氣概がなければ駄目だと思ふわ。——しようと思へば、どんなことでも出来るツて、あ

れよ。虎行さんも、ガンヂーの意氣でやつて頂戴。さうすれば、きつと何年かの後には、立派な畫家として、立つことが出来るんだから。……」

ふと虎行は、腫の言葉が胸を刺すのを覺えた。——しようと思へば、どんなことでも出来る。——まして好きな道を究めてゆく自分に希望の日の來ない筈はない。そんな氣持が、力強く湧いて來た。がそれと殆んど同時に、彼の腦裡に浮んだのは、自分の體質といふことだつた。小學校へ通ふやうになつて間もなく、長い間、病床に就いてゐて死んだ、實母の死因が肺患であつたのを思ふ時、虎行の心は常に暗かつた。現在、どこがどう悪いといふのではない。が、先頃まで學校へ通つてゐた當時も、人が好んであばれ廻る體操の時間などは、彼には一向に興味がなく、ともすれば病氣を名にして、休むことが多かつた。一年一回の體格検査では、いつも乙の低位だつたし、顔色も、どつちかと云へば、あまり冴えてゐる方ではなかつた。考へなければ、考へないでも濟むことも知れない。しかし愈々といふ時になるとやはり考へずにはゐられなかつた。惠まれない體質の纖弱さが、そこにあつた。

「どうしたのよへんにふさいで。」

腫はさう云つて、明るく煙草へ火をつけた。

「どうもしやアしない。」

「そんならもつと、景氣のいゝ顔をしてよ。」

「景氣はいゝさ。」

虎行は、殊更聲を立てて笑つた。

「さうだ。あたしこれからあんたを、いゝところへ連れてくわ。」

三

おそろく、それから三十分とは経つてゐなかつたであらう。腫と虎行とは、吾妻橋から一錢蒸汽に乗つて、小松島へ上つてゐた。

徂く春の、夜の帳が漸く降りて、狭霧の立ち罩めた隅田川の眞上に、まん丸に懸つた月は、日蝕のやうに、重い鉛色に光つて、今し方上つて來た蒸汽の發着所から、見渡す限り帯を展げた、川筋の對岸にまばたく燈が、泡く水面に揺れてゐた。

向島と呼ばれるこのあたりの地理には、まったく通じてゐない虎行に取つては、何か異つた世界へでも來たやうな、もの珍らしさがあつた。十年ばかり前の一夏を、父に連れられて、箱根に過した以外殆んど山ノ手の範圍を出た事のない彼は、實際一錢蒸汽の乗心地さへ知らずに來てしまつたのだつた。

「一體、どこへ行くのさ。」

「どこでもいゝの。あんたは唯、黙つて附いてらつしやい。面白いものを見せて上るんだから。……」

「氣味の悪いもんぢやないんだらうね。」

「大丈夫よ。繪を描くあんたが知つとけば、キツと爲めんなるものよ。」

震災後、荒れ果てたまゝになつてゐる、サツポロピールの庭園の側に、二丁程續いて架けられた假橋を渡つて、百花園とは反對の坂路を降りると、瞳は、とある洋食屋の角を曲つたが、それから時間にして五分ばかり、どこをどう幾曲りしたか知らぬ間に、虎行は、表に「御仕立物處」と書いた看板の懸つた小さな家の前に立たされてゐた。

「こつちへいらつしやい。」

脊中へ手を廻して、虎行を招いた瞳は、表の格子戸は開けずに、竹垣に附いて右へ折れると、丁度庭木戸の様になつてゐる入口の、蔭に隠れてゐる鏡を、ピンと手で弾いて、中へ押した。とそれが、合圖なのであらう。小走りに出て來た老婆は、無言のまゝ、かるく二人に會釋をした。

「誰か來てる?」

「はい、多勢さん。」

「ぢやア丁度よかつたわ。——虎行さん、あんた、ゐる人がみんな女ばかりだけど、恥かしがつたり、遠慮したりしちや駄目よ。ちつとも遠慮なんかすることないんだから……。」

虎行は頷いて見せた。

老婆は庭の彼方へ廻つたが、瞳はすぐそこから縁側へ上ると、鏡形になつてゐる廊下の、突當りの杉戸を颯と開いた。無論虎行も後に續いた。

「今晚は。——」

「あら、瞳さん!」

八畳に四疊半の二間を通して、その中の情景が眼に這入つた時、虎行は、思はず一足退かずにはゐられなかつた。

何んといふグロテスクな場面なのであらう。見渡したところ、十人ばかりの、下は十四五歳から上は五十を越したかと想はれるまでの女が、或はズロース一枚のまゝ、或は長襦袢一つのまゝ、或は文身の脊を出したまゝ、或は屈み、或は寝そべり、或は立つて、各自四面に張られた鏡の前に、媚態の限りを盡くしてゐるではないか。しかも彼女等の眼は、一樣に鏡の中に吸ひ着けられたかと怪しまれるまでに、微動もしてゐないのだつた。

虎行は口がきけなかつた。と、瞳ははじめて小聲で説明した。

「よく見とくとといゝわ。みんな、これから稼ぎに行く人達が、扮装してるところなんだから……。」

「稼ぎつて?」

「判らない? 甘い馬鹿な男達のお金を、絞りに出掛ける、その下拵へのところよ。」

「ぢやアみんな。——」

「どう。……驚いた？」

「……………」

「後學のためよ。驚くひまに、よく見とくといいわ。——あすこにゐるあの小母さん、あの人が、いま直ぐに、十七八のお嬢さんになつちやうから。……」

「あッ！」

「どう？　これがほんたうの、人の世の姿よ。」

四

虎行は、瞳が指さす彼方の小母さんなる者の上に、眼を見張つた。

おそらく三十を二つ三つ越えてゐるであらう。背中に磐若の面の文身をした小作りの彼女は、丁度女形が、樂屋で化粧をするやうに襟脛から顔一面にかけて、濃いおしろいをベッタリと塗つてゐたが、やがて、それを牡丹刷毛で刷子終ると、今度は棒紅を取つて、ハート形をそのまゝに、唇に濃い型を附けた。そして更にその棒紅は眉の下に飛び、耳に飛んで棄てられると、右手にはコンテが持ち換へられて、瞬く間に、ほのかなる月の眉毛は造られたのであつた。しかし不思議なのは、そればかりではな

つた。彼女は傍らの鬘懸から、お下げの毛がうしろへ垂れた洋紅色の帽子を取ると、如何にも器用に、すツぽりと冠つたものだ。

「どう？　輝ちやん。」

彼女は、鏡を見たまゝ、直ぐ隣りの少女に訊いた。

「も歩し深い方がよくない？」

「さうかしら。……」

女は、こゝろもち帽子を目深に下げた。

「今度は？」

「あゝいゝわ、とてシャンよ。」

「まだ、おだてるにや早いよ。」

「でも今夜だけは、賞める方を先へしとかなないとね。よツぼどいゝ鴨らしいから。」

「あれだ、現金だつたらありやアしない。」

「白しやもぢぢやないけど、それが御時勢だもの。」

「あきれた。——」

そんな事を云ひながらも、彼女の手は絶えず動いて、それからそれへと、扮装の身仕度は進んで行つ

た。——緋羅紗の水兵服に、紺の短いスカート。六型の腕時計に純白のストッキング。さうしたお下げの彼女を見た時、誰が二十を出てゐると想へやう。まして三十を二つ三つ越した上に、背中に磐若の文身があらうなどは、如何にしても、夢想も及ぶところではなかつた。

茫然とその姿を凝視してゐる虎行に、瞳は云つた。

「あたし、いつかあなたに話したことがあつたでせう。磐若のお民さんて人のこと。あの人がさうなのよ。」

「あら瞳さん。つまらない紹介なんかしないでさ。」

お民と呼ばれた彼女は、そのまゝ水兵服姿を、こつちへ向けると片笑顔を寄せながら微笑した。

「綽名なんか、可愛い坊ちゃんにあんまり知らせたくないぢやないの」

「あなたはうぶだからねえ。」

「さうなの。恥かしくつて、顔が赤くなるわ。」

「相變らず、云はせておけば、色々云ふね。」

「これがために、好きな人に逃げられたんだもの。」

お民は、さう云つていきなり横坐りになると、長煙管の雁首で、向ふに在つた、刻みの函を引き寄せた。

「御免なさい。」

「あら、これは御馳走さま。」

瞳は、お民が吸ひ着けて差出した長煙管を一度左の手で受取つたが、直ぐに右手に持換へて、すうツ

と一いき、うまさうに吸ふなり紫の輪を鼻の穴から静かに出した。それはどこから見ても、かうした

二人のモダン・ガールの行爲にしては、餘りに飛び離れた仕方であつた。が、しかもその受け渡しは、

唐棧の襦袢を着て、髪をいばじり巻にした女にも劣らないまでに立派な型に出来上つてゐた。

「あなたのいふ、自分よりも可愛いツてのは、この方ね。」

いきなり、虎行の方を見てゐたお民は、瞳にかう訊ねた。

「さうなの」そして一段聲を張り上げて「皆さん、これ虎行さんて人なんだから、よく見覚えて頂戴。」

虎行は、全身の血が、一度に顔へ上つて来たやうな気がして、ほかの色々に化粧をした女達が、一樣

に會釋をしたのも、到底正視してはゐられなかつた。

「僕も帰るよ。」

彼は小聲で瞳の耳に囁いた。

セーラ姿のお民と、瞳と虎行との三人が、小松島から、再び蒸汽に乗つたのは、それから間もない八時頃だった。川下から寄せ始めた南風に、いつか靄は晴れて、冲天に冴た月光は、舳が左右に分ける川波の上に、幾つもの銀の小皺を見せてゐた。

お民は、今夜九時に、雷門のカフェー・オリエントで、先刻お輝が云つた、一人の「鴨」に會ふ事になつてゐたのだつた。——お民の話した儘をざつと書けば——

「——ゆうべとおとゝひ、二日續けて、あたしや、そいつに會つたんだよ。初めての晩は、人形町のダンス・ホールで、ゆうべは公園の廣養軒で。——ところが、そいつはね、どツかの重役の息子だとかいふんだけど、とてもあたしの手に乗つちやツてるんだから面白いや。新緑もいゝしするから、近いうちにどツか筑波へでも行きませんかつていふから、行つてもいゝわツて云つてやつたら、まるで、あたしを嫁にでも貰つたやうな氣になつて、ぢやアあしたの晩、色々詳しいことを相談したいから、九時にオリエントで待つて下さい。なんでも。おまけに、いふことがいゝぢやないか。民ちゃん（もうそいつはゆうべ、こんな呼び方をしたんだよ）君十七？ 十八？ それともまだ、女學校四年？ だとさ。あたしや、そいつの親の顔が見てやりたかつたね。——」

そこで、その色々詳しい相談をするといふ今夜、偶然會つたのを幸ひ、瞳と虎行は、いゝ機にして附いて來たわけなのだが、そんな話しを聞いてゐるうちに、虎行としても、何か映畫の一場面を見てゐるやうな氣にもなつて、相手に對する興味と云つたやうなものが、次第に胸の底から湧いて來るのだつた。

「かうなつて見ると、あたしの方が、ずツと若作りなんだから、虎行さんと似合やしない？」
藝者と、四五人のボートの選手らしい學生が、言問で上つてしまつたと、お民はわざと虎行に身體を押し付けて、瞳の顔を覗き込んだ。

「さうね。似合ふかも知れない。」
「虎行さん。あんた、あたしと浮氣しないかな。」

「冗談云つちやいけないよ、お民さん。あたしの方は、そんな浮いたんぢやないんだから。……」
瞳はあわてて遮つたが、それがあまり眞剣だったので、自分でも可笑しくなつたのであらう。今度はわざと丁寧な頭を下げた。

「この人、まだほんの子供ですから、あんまり、荒ツぽく取扱はないで頂きます。」
「おや、これは御挨拶ね。——あたくしもあのまだ十七で。……」

虎行は、勝手の違ふ二人の仲に狹まれて、苦笑するより外に道がなかつた。
やがて船が吾妻橋に着くと、瞳とお民とは、素速く眼でそれと示し合つたが、お民は如何にも女學生らしい足どり、誰よりも先に岸に飛び上つた。

「少しあとからゆくよ。」

「どうして？」

「もうこゝ迄来ると、とてもうるさい小父さん達があるんだから、連れらしい風はしない方がいいの。腫は殊更歩みを緩めながら、ふと、腕時計の上へ眼を落した。指針は八時半を指してゐた。」

「丁度いゝわ。これから三十分。民ちゃんのあとから、オリエントとへ這入つてツて、知らん顔をして待つてれば、その鴨さんが見られるんだから……」

「重役の息子だつて、云つたやうだね？」

「どうせそんなことよ。女を引ツ掛けたり、女に引ツ掛つたりするのは、大抵閑人に極つてゐるわ。社で云へば重役、役者で云へば名題、月々の家賃を氣にしてゐるやうな正直な人には、そんな真似は出来ないやうだよ。」

赤い水兵服が、段々遠くなつてゆくの見送りながら、二人は地下鐵線の前を、比較的ゆつくり雷門の方へ歩いて行つた。

「仲見世、少し歩く？」

「どうでも。」

「ぢやア十分ばかり歩きませうよ。あたし、豆人形を買つてきたいから……」

二人が仲見世へ曲る時、お民は線路向ふの、オリエントの玄關に立つてゐた。

六

オリエントの、階下の一番奥のボックスに納まつたお民は、まだ約束の相手が来てゐないのを知ると、如何にも御尋常に、レモンソーダを注文して、ストローを吸つてゐた。

この店で、お民の身分を薄らでも知つてゐるのは、古くから赤組にゐるお高一人だつたが、それとも、お民が一番活躍した四五年前に、不思議な女客の一人として知つてゐるのに過ぎないのだから殆んど三年振り、しかも水兵服にお下げなどといふ變つた扮装で現はれたとなれば、あの人こそと圖星を指して當てる程の、確信を持つてゐる譯でもなかつたのだ。

だから、お民は、氣が楽だつた。澄して相手の来るまで、下を向いてゐれば——こんな少女がたつた一人で這入つて來ることの、多少不審は持たれるにしても、別に身を狭めてゐるひけめはなかつた。

「どなたか、おあとからいらつしやるんですか。」

係りの女給は、餘り長い間、黙つたまゝでゐては、悪いと思つたのであらう。やがて愛想笑ひをしながら、かう訊ねた。

「さうなんですの。お目に掛る方があるんですけど、九時ツてお約束ですから……」

場 市 吻 接
「あゝ九時——ぢやアもうお見えになりませう。」

果して、その女給が、ボックスの間から伸び上つて、布袋竹の植込を透した瞬間、大急ぎで飛込んで来たのは、お民の待つ相手だった。

「失敬、ほんとお待たせして失敬しました」奥のボックスに、お民を發見した彼は、いきなり前側に腰をおろすと、それでもネクタイの曲りなどを、素速く気にしながら、二つばかり續けて頭を下げた。と同時に彼は、傍へ寄つて来ようとした、二三の顔馴染の女給に眼で知らせた。

「あたし、唯今来た許りですの。」

「さうでしたか、僕、途中で圓タクがパンクしたりしたもんで、とてもあわてちやつたんです」さう云ひながら、彼は大きな腕時計に眼を移して「あゝ、丁度いま九時でしたね。」

「でも、却てよろしうござんしたわ。あたしの方がお待たせしたのぢやなくつて。——」

「そんなことないですよ。女の人が、男を待たせるのは、こんな場合當り前なんだから。——まあしかしめて、時間を過ぎさなかつただけ助かりましたよ。」

彼は如何にも恐縮したやうに、頭を掻いた。

殆んど、彼が這入ると同時に、こゝの玄關を跨いだのは、瞳と虎行だった。瞳は、かうした時の定石通り、お民が奥に陣取つてゐるのを知つて、直ぐに奥へ這入つて行つた。

「あッ！」

思はず虎行の叫ばうとしたのを危く手で制した瞳は、あわててお民と背中合せのボックスに身をひそめた。

「今村だね。」

「あたしもびつくりしたわ。だけど、あんな時、聲を出しちや駄目よ。相手が今村だとすれば、とても芝居は面白くなるんだから。……」

「だつて、あんまり意外だつたんで、驚いちやつたもの。」

そんな囁きを交してゐるうちにも、隣りでは、今村が盛んにお民の機嫌を取り續けてゐた。

「民子さん、お宅はどちらです。」

「とても遠いんですの。」

「遠いつて、やッぱり東京なんでせう？」

「それア東京ですけど、ズツと北の外れの方ですもの。」

「北の外れツて？」

「千住ですの。」

「千住なら、直ぐぢやありませんか。とに角僕、自動車でお送りしますから、時間の許す限り、つきあつて下さい。」

「送つてなんか戴いちや、困りますわ。あたしとても母が嚴格なんでございますの。」

「大丈夫ですよ。いけなければ、お宅の一二丁手前で降してあげますから……」

「でも、そんなに遅くまでは……」

「まあいゝから、僕に任せといて下さい。御迷惑はかけませんから……」

瞳は、つと立上ると、眼で何事かを、お民に合圖した。

七

「さう。そんならあたし、今晚は何事もあなたにお任せしますわ。」

瞳の合圖をそれと知ると、お民は急に今村を凝視しながら、稍媚びるやうな調子でかう云つた。

「任せてくれますか？」今村は得たりとばかり、大きく頷いて「ほんたうに、それが一番賢明な方法です

よ。僕、決してあなたの悪い様にはしないんですから……ぢやアひとつ、さうと極つたら、どつか、

もつと落着いたところへ出かけませんか。こんな所ぢや、ちつとも話がしんみりしないし、それにあなた

も、もしか知つた人に見られるやうなことがあると、困るでせうから……」

「さアそれア困るには困りますけど、あたしまだ、男の方と二人きりで、しんみりお話なんかしたこと

ないんですもの。きまりが悪くツて、そんなところへは行かれませんか。」

「そんなことツて、僕、あなたを困るやうな所へ、連れて行くとは云ひませんよ。唯、こゝぢやあんな

り殺風景だと思ふから……」

「本當？」

「武士に二言はありませんさ。だけど、僕、嘘をつくと思つてるんですか。」

「いゝえ、嘘をおつきになるなんて、ちつとも思ひませんけれど。」

「さうでせう。少くとも僕は、紳士道を心得てるつもりですからねえ。あなたに嘘は云ひませんよ。」

「今村さん！」

突然今村の背後から、かう呼びかけたのは、瞳だつた。

「えッ！」

彼は思はず振り返つた。

「あッ！」

今村は、手に握つてゐた焼砂を忽ち顔面に叩き附けられたのと同じやうに、眼の前が、闇よりも暗く

なつたのを感じた。

「そんなに、お驚きならなくつても、よろしいぢやございませんか。その方、あたしの御懇意なお嬢

さんなんですから……」

が、今村は餘りの不意の出来事に、眼を見張つたまま、一言をも發することが出来なかつた。

「あら」と、お民はわざとらしく瞳の方を見上げた「田村さんでいらつしやいましたのね！」

「さうですの。先程から、お聲をお掛けしようか、どうしようかと思つて、躊躇して居りましたんですけど、丁度、今村さんも存じ上げてゐたものですから、失禮とは思ひながら、ついお呼びしてしまひまして……」

「まア、さうでございましたか。あたしまさか、こんなところで、あなたにお目に掛らうなんて……」

「いゝえ、そんな御心配は、却ていけませんわ。あたしどんなことがありましても、あなたの秘密を人に云ふやうなことはいたしませんもの。」

「どうか後生ですから、そのことだけは、仰しやらないで下さいませね。」

「そりやア、もう決して……」そして瞳は、今村の方を向いて、苦笑しながら云つた「今村さんも御安心遊ばせよ。あなたに折角民子さんみたいなの、いゝお友達が出来たのを、あたしは、邪魔立てする程、卑怯者ぢやございませんからね。」

「僕、奢ります。どんなにでも。」

今村は始めて、瞳の顔をまともに見ると、かう云つて、先刻お民にしたやうに、二つ三つ續けさまに

頭を下げた。

「奢るなんて、御心配には及びせんわ。それよりあなた、民子さんとても純な方なんですから、親切にして上げて下さいませね。」

「そりやアもう、僕どんなことがあつても、決して不親切の行爲なんか、する筈はありませんよ。——兎に角、今夜は、これから僕につきあつてくれませんか。」

「瞳さん。……僕歸るよ。」

虎行はたまらなくなつて、ボックスから立上つてゐた。

八

「民ちゃん、あんた焼が廻つたわねえ。」

「どうして？」

「だつて、あんなでれ村なんかをいゝ鴨だと思つて、モーションをかけるなんて、譬若のお民さんもだいなしだわ。」

今村が、ビール・スタンドの側へ、電話を掛けに立つて行つた間、瞳は苦笑しながら、お民を揶揄してゐた。

「ぢやア重役の息子でツての、嘘なのかい？」

「嘘ぢやないわ。嘘ぢやないけど、部屋住で、てんで融通が利かないんだから駄目よ。」

「もう糸引いたことあるの？」

「たつた一度だけれど、こりちやつたわ。サラリーを絞つただけが、大手柄なくらゐなんだから。」

「だつて、今夜これから、つき合つてくれなんていやに大束極めてるぢやないか。」

「つまりテレたから、あんなこといふのよ。これから先、つき合つたりしたら、あべこべに、こつちが背負込むやうなことに、なるかも知れないわよ。」

お民は舌打をした。

「癩に觸るね。あんな青二才に、擔がれたと思ふと。——」

「だからよ。だからあんたも、焼が廻つたツていふのよ。いつそ速く歸つた方がいゝわよ。」

「このまゝ。」

「さうさ。」

「そいぢやアまるツきり、衣裳代も出ないぢやないか。」

「ケチな事は云はないの。競馬だつてさうぢやありませんか、穴が外れりやそれまでなんだからね。」

そこへ電話から戻つて來た今村は、大方スタンドで、ウキスキーを一杯煽つて來たのであらう、へん

に威勢のいゝ調子で、虎行の肩を叩いた。

「虎行さん。君もひとつ、歸るなんて云はないで、僕らにつき合つてくれたまへ。いゝだらう？」

「イヤだ」と、虎行はきつぱり云つた「第一腫さんだつて行かないぜ。」

「そんなことはないよ。ね、腫さん。あなたは無論、僕につき合つてくれますね？」

「あたし、失禮しますわ。」

「そんな、そんなこと云はないで下さい。折角かうして、偶然お目に掛つたんですから、今夜は僕らに。

……」

「僕らにツて仰しやると、あなたと、ほかにどなたなんですの？」

「僕と、この民子さんですよ。」

「冗談ぢやない」と、民子は吐き出すやうに云つて、横を向いた。

「あたし、もう御免だわ。」

「なんですツて？」

「あたしね、思ひ直して止しにしたの。」

「思ひ直して？」

「さうよ。あんな、見そくなつちや駄目よ。」

「見そくなうツて、そんな苦ないぢやありませんか。僕はあなたを初めから尊敬して……」
 「氣障な云ひ方をするのは、止して頂戴。尊敬するもしないも、廣養軒で一度、ダンスホールで一度、こゝで一度と、それも三度合せて、一時間とは會つてゐないあたしを、尊敬するも何もないぢやないの。馬鹿々々しい。あたしや憚りながら、そんな手にや乗らないんだから……」
 緋の水兵服が、如何にも無邪氣に見える少女の口から、いまは耻も外聞も忘れて、心のまゝに吐き出される言葉の綾に、今村は狐につまゝれでもしたやうに、たゞ目はたきをしながら、お民を見詰めるばかりだった。

「今村さん」と、瞳が口を挟んだ。

「あんたこれから、民ちゃんを、どこへ連れてくおつもりなの？」

「どこへツて、どつか氣持のいゝところを、ドライブでもしようと思つて……」

「明石町のあの家なら、止して頂戴よ。民ちゃんは、とつくに御存じなんですから。——」

「あの家を？」

今村は、あらためて驚きの眼を見張つた。

九

それから、さんぐ今村を擁揄した擧句、お民と田原町の角で別れた瞳が、虎行と圓タクを飛ばして大久保のアパートへ歸つた來たのは、かれこれ十二時に近い時分だった。

いつもならかうした場合瞳は、必ず裏門へ廻つて、その潜りから這入る慣はしになつてゐたのだが、どうしたことが今夜に限つてまだ玄關受附の電燈が、そのまゝカーテンの中に黄色い光りを見せてゐた。虎行は、大方宿直に當つた伊東さんが、眠れぬまゝに編物でもしてゐるのだらうと思つた。が、複雑に働く瞳の頭には、何か不時の出來事が、起つたのではなからうかとの考へが、稻妻のやうに閃いたのだつた。

門前で車を降りた二人は、虎行が表から這入らうといふのを、瞳は拒んで、いつもの通り、裏門の潜りから這入ることを主張した。

「大丈夫だよ、瞳さん。折角受附に電氣がついてるんだから、裏へ廻ることはないぢやないか。」

「いゝえ、やツぱり裏へ廻つた方がいゝわ。あたし何んだか今夜はおもてから這入つちや、いけないやうな氣がする。……」

先へ立つて、裏門から這入つた瞳が、廊下をまっ直に、階段の下まで來掛つた時だった。受附室から、スリッパの音も急がしく、走つて來た伊東さんは、あわてて瞳の前に立ち塞がった。

「田村さん、ちよつと。」

「まだ起きてらしたの？」

「あなたのとこへ、お客様がいらして、さつきから、お待ちですよ。」

「まア、あたしとこへ？」

流石に瞳は、この突然の報告に驚きの眼を見張らずにはゐられなかつた。

「男の方がお二人。——」

さう云ひながら、伊東さんは、手にしてゐた二枚の名刺を、瞳の前に差し出した。瞳はそれを受取る
と、體を斜めに、明るい壁の方へ翳してゐたが、一瞬間、その面に閃いた不安を、殊更微笑の裡にまぎ
らはせると、さり気なく伊東さんに訊ねた。

「いつ頃お見えでした？」

「もう二時間ばかり前ですの。あたくし、いまお留守だからと申上げたんですが、どうしても會ひたい
から、歸るまでお待ちすると云つて、おきんになりませんのよ。——もし御都合の悪いお方でしたら、も
う十二時になりますから、今夜はこのまゝお歸しいたしますけど。……」

「いゝえ、會はなければ、會はない方がいゝんですが、かうなつたら仕方がありませんから、會ひます
わ。——で、二人は、あたしの部屋にいらつしやるんですか。」

「お部屋へお通ししようと思ひましたが、何しろ初めてのお方だししますから、應接間へお通ししてご

「さいますの。先程お伺ひしましたら、お二人で碁をおやりなつてゐらつしやいましたわ。」

「あゝそりやア濟みません。」

そして瞳は、不安さうに立つてゐる虎行を顧みた。

「あたし、ちよいとそのお客様に會つて來る間、あんた先へ部屋へ行つて頂戴。」

「誰か來たの？」

「誰でもいゝのよ。」

「僕の知らない人？」

「さう。何しろ、あんたは少しぐらゐ暇が取れても、降りて來ちや駄目よ。あたしが行くまで、待つて
なければ。……」

「あゝ。」

虎行が階段を昇つて行つてしまうと、瞳はあらためて、手にした名刺を見詰めた。

——衆議院議員 坂本高行。他の一枚は、石井私立探偵社 安住昇一郎。——

「お一人でお會ひになつて、大丈夫ですか。」

伊東さんは、何かそこに、尋常でない動きのあるのを察して、心配さうに訊ねた。
「御心配なく。別に大した問題ぢやありませんから。……」

「ぢやアあの、二番の應接ですから……」

「済みません。」

瞳は、ひそかに決するところがあるらしく表玄關側の應接室の前まで行くと、靜かに足を停めた。

十

應接室の中からは、盛んに碁石の音が聞えてゐたが、いづれかが瞳の足音を聞き附けたのであらう。ドアの前に停ると同時に、石の音は、拭つた様に消え去つてゐた。

瞳は、ドアを軽く叩いた。

「はい。」

それは肥つた老人を思はせる、太い、皺枯れた聲だつた。

「御免遊ばせ。」

あでやかに、しかも極めて平靜を装つて、ドアを排した瞳を見ると直ぐに四十格好の男が立上つた。

「田村さんですね？」

「ね」の字の語尾に、妙に力を罩めた、よくいふ刑事口調が、いきなり瞳の氣持を暗くした。が、彼女にはわざと丁寧な頭を下げた。

「左様でございます。」

「私は先刻名刺を差上げておいた石井私立探偵社の安住です。」

「お待ちせいたしましたして、申譯ございません。——どうぞお掛け下さいませ。あたくしも失禮いたしましたから……」

いざとなれば、度胸は寧ろ、瞳の方にあつた。さう云ひながら、椅子に腰をおろした彼女は、そこまです持つて来たハンド・バッグを開けて、シガレット・ケースを取出すと、クラブマンの一本を摘んで、如何にも氣輕に火をつけた。

「あの、どういふ御用でございますう？」

「ほう、これはなかくの尤物ぢや」と、肥つた、色の黒い、眼尻の下つた、頑丈らしい、五十五六の（それが虎行の父の、高行であることはいふまでもないが）他の一人は、呟くやうに云つて、さてあらためて、瞳の顔を見直した。

「私の来た用事は、既にあなたに判つとる筈ぢやがのう。」

「まア、そんなこと仰しやつてもあたくし女でございますから、まるツきり……」

「判らんと云はれるかの？」

「では安住君。君から説明してくれんか。」

「承知いたしました。」

安住はかうした、男に有りがちな、相手を直ぐに犯人扱ひにしたがる癖を、相當露骨に出して、そのくせ態度だけは、いやに丁寧らしく、腫の方に、まともに向き直つた。

「田村さん！」

「はい。」

「あなたは間違ひなく、醫學博士田村精一郎さんの娘さんですね？」

「そんなこと、お訊ねなつて、どうなさるおつもりです？」

「どうもかうもない。必要があるから訊くんです。——それに相違ありませんな？」

「さア、さうかも知れません。」

「知れませんか？ 冗談を云つちやいかんよ。はつきりしたことを云つて貰はんと。——」

「でもあたくし、初めてお目に掛かつたあなたに、そんなことまで申上げる、義務はないと思ひますわ。」

「義務がないことはありますまい、これだけの大事件を、仕出來しておきながら……」

「大事件で、なんでせう。」

「白を切る氣だな。——よし、そんならそれで私の方も、田村博士の娘さんとしてでなく、不良少女田

村腫として訊ねますぞ。」

「おほ、おほ。あたくし、氣が小さいんですから、どうか、そんな怖い顔はなさらないで下さい。お訪ねなることなら、知つてる限り何んでもお答へしますから。」

「坂本さんの御令息、虎行さんをどういふ氣持で誘惑したのか、まづそれから聞かせて貰ひませう。」

「安住さんと、仰しやいましたね。——失禮ですが、あなたはほんたうに、石井探偵社の方ですか。」

「なんですつて？」

「いゝえ、お間違ひぢやないかとお訪ねするんですの。本當に探偵社の方なら、そんな馬鹿氣たことをお訊きなる筈がありませんものねえ。」

腫はさう云ひながら、再び紫煙を輪に吹いた。

十一

「もう一度、もう一度聞かう、今のことを……」

安住は洋服の裾を両手で掴みながら、テーブルの上へ、體を乗り出した。

「何度でも申上げますわ。本當に探偵社の方なら、そんな馬鹿氣たことを、お訊きなる筈はございませぬ。」

「ぢやア君は、私を偽物だといふんですか。」

「偽物なんて、失禮なことは思ひませんけど、あたくしが、どんな氣持で虎行さんを誘惑したかなんて、御質問にも、程があるぢやございせんか。——あたくし、決して虎行さんを誘惑した覚えはございせん。」

「誘惑した覚えはない？」

「はい。」

「白ばツくれちやいけない。どんなに白ばくれたつて、もうネタはちやんと擧つてるんですぜ。覚えはないなんて、よくもそんなことが……」

「あなたこそ、よくもそんな亂暴な斷定を、お下しなれますね。あたくしが、虎行さんを誘惑したか、しないか、神様でないあなたに、お判りなる筈はないぢやございせんか。」

「ふん、君はこの安住を、めくらだと思つてるんだね。君がいつ、どんな手段を用ひて、坂本さんの御令息を誘惑したかぐらゐる判らないで、探偵社の社員が、勤まると思ひますか。速く泥を吐いてしまつた方が爲めですぜ。」

「泥を吐く？」と、瞳の眼は、急に險しくなつた。

「泥さ。泥に違ひないぢやないか。善良な人の子を誘惑するなんて。——」

「探偵屋さん！」

「何んだつて？」

「何んでもない。探偵屋さんだから探偵屋さんと呼んだままでの。——濟みませんけどね。あんただけ、直ぐこの部屋から出てつてくれませんか。」

「出て行く？」

「さうですよ。あなたのやうな下等な人と、あたしもう、お話は出来ませんからね。」

「人が、下手に出てゐれば、いゝ氣になつて、下等な人とは何事だ。私は職務で來てるのだから、話の判るまでは、斷じてこゝを動くやうなことはしないぞ。」

「おどかしツこは、なしにしませう。無暗に大きな聲なんか出してこゝは、あたし一人の家ぢやありませんからね。下宿屋なんだから他にも相客は、澤山あるんですよ。百姓の劍術ぢやあるまいし、矢鱈に大きな聲なんか出されちや、はた迷惑だわ。——一體、何時だと思つてるんです。」

「君が待たせたんぢやないか！」

「お生憎さま。待つて下さいとこつちからお頼みした覚えはありませんよ。——何んでもいゝからここを出てツて下さい。あなたのやうな人とは、もう一分もかうしてゐるのはイヤなんですよ。」

「馬鹿ッ！」

「馬鹿は、あんたぢやありませんか。相手をみて、口を聞くことも知らないやうな、そんな探偵屋があるでせうか。えばりさへすりや怖がると思つてるなんか、あんまり智慧がなさ過ぎるぢやないの。」

「よし。さう云ふ風に出るなら、こちら相當の手續を取つてやる。」

「どうとも御自由に。相當の手續なんて言葉で、心にもないことを云ふ程、あたはまだ、氣持が腐つちやめませんか。」

「先生。こいつとても、一筋縄では駄目です。一應その筋へ訴へませう。」

「まア待ちたまへ。」

と、坂本高行は、漸く沈黙の口を開いた。

「私が話をする。君はひとまづ、この部屋から出てゐたまへ。」

「そんなことして宜しいですか。」

「大丈夫ぢや。この人は、君がこゝに居ると、おそらく何も云はんぢやらう。私が訊く、君は他の部屋で、用事の済むまで待つてくれりやよい。」

議會で、緋熊といふ紳名のあるだけに、高行は樽のやうな首を、大きく前後に振つた。

十二

憤然として、安住がドアを排して出て行つてしまふと、さて高行は、あらためて衆議院議員の態度を、一層勿體らしくテーブルの向ふに誇張させて、瞳をぎつと見守つた。

「田村さん。あんたは、なかく、伶俐者ぢやな。」

「いゝえ、決してそんな、お賞めにあづかるやうな者ぢやございませんの。」

「いや、さうでない。流石に私の悴を連れ出すだけあつてよい度胸ぢや。——のう田村さん。ひとつ正直に云つてくれんか。あんたが悴を連出した目的を。私は今夜それを訊きに來たのぢやから。……」

瞳はしばし、凝と高行の顔を見詰めてゐたが、やがて寂しさうに笑つた。

「申上げませう、何んなりとも。あたくし、あの探偵社の方には、何も申上げないつもりでゐたのでございませう。……」

「いふて下さい。それに因つて、私も考へなけりやならん。」

「そんならまづお訊ねしますが、あなたは今夜、まさか虎行さんを連れにおいでンなつた譯ぢやございませうまいね?」

「連れに來たのだとしたら、どうするのぢや?」

「どうするといふこともございせんけど、もしかさうでしたら、わたくし、もう何も申上げることにございせんから。」

「ではあんたは、人の子を誘惑しといて、飽までも、親の手へは戻すまいといふ考へなのぢやな。」

「どうか、その誘惑といふお言葉だけは、お遣ひにならないで頂きます。あたくし、虎行さんを、お救ひした覚えはございますが、誘惑した覚えは、毛筋ほどもございませんの。」

「虎行を救うた？ これは異なことを聞くものぢや。何んであんたが、虎行を救うたのぢや。まづそれから聞かうぢやないか。」

「失禮ですけど、あなたは政治家としては、お偉い方も存じませんが、家庭人としては、ほんたうに、お氣の毒なくらゐ、不幸な方でいらつしやいますのねえ。」

「そんなことはどうでもよい。君が虎行を救うたといふ、私はそのことを聞いてゐるのぢやよ。いつ悴が、あんたに依つて救はれたかを……」

「虎行さんが家出をなすつた、その日からすわ。」

「家出をした日から？ 君は詭言を弄して、私を揶揄せうといふのぢやな。」

「詭言でも何んでもありませんわ。虎行さんは、其日から完全に救はれたに、相違ございませぬもの。」

「虎行は、私の保護の下にある悴ぢや。その私の子が、君のやうな少女に救はれたなどと、つまらんことは云はんで貰ひたい。私は衆望を負うて立つて居る、國會議員ぢや。その私が、他人に、しかも一少女に、悴を救うて貰つたとあつては、世間へ顔向けが出来んぢやないか。」

「世間がどうであるか、そんなことちつとも存じませんが、虎行さんは、あたくしが救つて上げたに、相違ありませんわ。——あのヒステリーのお母さんの手から……」

「ヒステリーとは何んぢや。」

「お氣に觸つたら、御免遊ばせ。ヒステリーと申上げて悪ければ、賢夫人と申上げて結構ですわ。——兎に角虎行さんを、あの暗いどん底から救つて上げたのは、あたくしの愛に、違ひないんでございますもの。」

「君は、私の家庭を侮辱するのぢやな！」

「尊敬しては居りませんが、別に侮辱しても居りませんの。唯、お氣の毒だとは存じて居りますけど。」

「……」

「氣の毒ぢや？」

「さうですわ。お氣の毒だと思へばこそ、あたくし、今日のあることも覺悟の上で、虎行さんを、お救ひしましたの。僭越かも知れませんが、あのまゝにしてゐたら虎行さんは、どんな結果になつてしまふか判りませんもの。」

「餘計な世話ぢや。虎行がどんなにならうと、私は私の子を、一少女の手で、守護して貰はうとは斷じて想はん。」

「おほ、」と、瞳は冷く笑つた。「ではあなたは、お父様として、虎行さんのお身の上を、どうなつても構はないと、思つてらしたのでございますか。」

「何を馬鹿なことを云ふのぢや。子の身の上を考へない父が、どこの世の中にある。」

「そんならなせ、子に對する責任を、お盡しならなかつたんでせう。あなたのお蔑みになつてらつしやる、小娘の口から、こんなことを申上げるのは、生意氣かも知れませんが、あなたは決してこれまで、親として、子に對する責任を、お盡しになつたとは、考へられないぢやございませんか。」

「何んぢやと？ 私に責任を盡して居らぬ？」

「さうなんですの。失禮ですけどあなたにとつて、これまで一番御大切のものは、何んだつたとお思ひです。お子さんでもなければ、お家でもない。代議士といふ、一つの商賣だつたのぢやございませんか。」

「代議士といふ商賣？ 代議士は國家の名譽職ぢや。商賣とは何を云ふのぢや。」

「商賣ですわ。昔はどうか知れませんが、今の代議士は、政治といふ高等政策の蔭に隠れて、勝手なことをしてゐる、體のいゝ商賣人だと思ひますわ。」

「お前のやうな不良少女に、何が判るのぢや。」

「不良少女でも、不良老年でも、道理に二つはない筈ですわ。あたくしどんなに不良でも、義理と人情とだけは、心得てゐるつもりですの。表通りがあるのに、暗い裏道を通つたり、正しい人を陥れて罪を負はせたりするやうな、そんな卑しい量見は持ちませんからねえ。」

「餘計な理窟は云はんでもいゝ。それより何んで、私が親としての責任を盡して居らぬと云ふのか、それを云ふて見い。」

「ですから、あなたが政治商賣に夢中にお成りなつて、お宅のことは、少しもお考へになる時のないのが、とりもなほさず、お子さんに對しての、無責任だと申上げるのぢやございませんか。——この數年間、虎行さんが、お宅でどんなに恵まれない、暗い年月を過していらしたか、あなたは、それを御存じないでございませう。天下とか國家とかを、お考へになる前に、もつと小さな、自分の家といふものをお考へなされる必要が、十分あると存じますの。」

「貴様、この高行を、嘲弄する氣で居るのぢやな。——よし、それならそれでよい。私は斷じて、お前のやうな不良少女を、この社會へ存在させては置かんから、そのつもりで居れ。」

「存在させぬと仰しやつて、どうなさるおつもり？」「警察の手に渡してやるのぢや。」

「おほ、野暮ないやがらせは、あなたの人格に係はりますわ。あたくしこれでも、警察の御厄介になる程、不正な真似はいたしませんの。」

「人の子を誘惑したことが、不正でなくて何んだといふのぢや。」

「ですからさつきから、あたくしまだ、虎行さんを、誘惑した覚えはないと、あれほど固く申上げてるぢやございせんか。——無智な、ヒステリーな、その上親としての愛も何も知らない女の人に、身も心も苛まれて、いつも暗い影ばかりを見詰めてゐる、一人の善良な中學生があつたとしたら、誰れが黙つて見てゐられませう。あたし虎行さんが好きだつたと同時に、あなたと、虎行さんの今のお母さんが、憎くてならなかつたんです。ですから、ほんたうに救はれなければならぬ方を、救つてあげたと、今ではどんなに、喜んでゐるか知れませんの。」

「もう止せ。私はそのこま、つちやくれた口から、もう何も聞きたうはない。それより、直ぐに連れて歸るのぢや。虎行をこゝへ出せ。」

「お生憎さまですが、そりや少し道が違ひますわ。」

「何んで道が違ふのぢや？」

「虎行さんは、もうあなた方の虎行さんぢやありませんもの。」

「瞳はさう云つて、天井を見詰めた。」

十四

「虎行は、私等の虎行ではない？ たわけたことを云ふな。」

高行は、もう辛抱が出来ないと云はぬばかりに、議會馴れのした拳を、テーブルの上に叩き附けたが、瞳は極めて平然たるものであつた。彼女はかうした場合、相手が激昂すればする程、却て氣持が平靜だつた。

「お氣に觸つたら、御免遊ばせ。——ですけど、どんなにお叱りを受けましても、虎行さんが、あなた方から本當に離れてしまつたことだけは、どうすることも出来ませんわ。あの方だつて、さういつまでも、人の心の判らないやうな子供ぢやございせんもの。」

「あれの心が、私等から離れたとすれば、それはお前のせいぢや。お前が仲に這入つて、云はでもよい智慧を、あれに授けたからぢや。」

接吻市場

「お氣の毒様。人の氣持ちなんてものは、そんなに單純に極まるものぢやございせんものよ。虎行さんがあゝなるまでには、もつと根本的な、あなた直接の問題が、どんなに澤山あつたか知れせんわ。——小さい時に、實のお母様と別れて、無智な、微塵も愛のない人を、お母様と呼んで、同じ家庭に暮らさなければならなかつた虎行さんは、丁度時離れた小鳥のやうに、人の心の温かさを、どれほど求めた

ことでせう。しかも、塙はあつても、凍てた羽を温めてくれる親鳥は、一夜として、ひとつ巢葉には寝てくれなかつたんです。——男だから、といふ心持は、いつも虎行さんの痛々しい胸に、辛抱を教へて、熱くなる臉を、ぢつと閉ぢさせて居りました。それア子供は、愛のふところに抱かなくても、食事にさへ不自由させなければ、大きくはなりません。ですけどその胸は、目茶々々に傷付いて、踏み蹂られた花のやうに、見る影もなくなつてしまふんです。男として、一番痛快らしく見える、政治家といふ御職業のあなたに、細かい神経を求めめるのは、求める方の無理かも知れませんが、父としてのあなたにも、少し細かい神経があたりでしたら、虎行さんを、あれ程不幸になさなくても、済んだのぢやございませうか。

「うるさいツ！」

高行の聲は、室内を壓した。

「長々と、くだらん説教は止めてくれ。私はお前などに、今更親としての心得を、説いて貰ふ程筆碌はして居らん。」

「こゝは待合や田舎道ぢやございせんから、そんな大きな聲は、なさらないで下さい。大きな聲をなすつても、別にあなたの、親としての價値が、重くなる譯でもございせんからね。」

「何んでもよいから、直ぐに虎行を出せ！」

「いゝえ、お渡しすることは出来ません。」

「出さぬといふなら、お前の部屋へ行つて引張り出すぞ。」

「どうぞ御自由に。——ですが、お断りしておきますが、あたしの部屋には、虎行さんは居りませんよ。」

「胡麻化しても駄目だ。いつもお前の部屋に虎行の居ることは、先刻受附で聞いて知つてるぞ。」

「冗談ぢやない」と、腫は冷笑した。「敵の闖入を知りながら、誰がむざくと、腕を拱いて待つてるもんですか。——虎行さんは、もうとつくに、あなたの眼の届かないところへ、遁げてしまつてますからねえ。」

「遁げてる？」

「さうですとも。虎行さんは、どんなことがあつても、再びあなたのやうな、親としての資格のない方の許へは、お返ししたくはないんですの。」

「安住君！」と、高行はいきなりドアに手を掛けて怒鳴つた。

「探偵屋を呼んで、どうなさるおつもりですか？」

「貴様を、警察へ引渡してやるんだ。」

「どういたしまして。誰がそんな手に乗るもんですか。」

この言葉が消えるか消えぬうちに、瞳は速くも、部屋の外に飛び出してゐた。

十五

虎行は先刻から、瞳に云はれた通り、獨り神妙に部屋に引籠つて、彼女の戻つて来るのを待つてゐた。彼は、二人連れで訪ねて来たといふ、その客の誰であるかを、色々に想像して見た。瞳の會社關係とか、友達關係とか。が、如何程考へても、この夜中に、突然訪ねて来なければならぬ用件の人は、思ひ當らなかつた。或は警察關係の者ではなからうか、とも想つて見たが、それならそれと、當然瞳が云つてくれるはずだつた。

随分長い間辛抱してゐた彼は、遂に堪へ切れなくなつて、部屋を出ると、ひそかに階段を降りて行つた。——と、彼は階段の途中まで来かゝつた時、突然應接室の中から、「貴様を警察へ引渡してやるんだ」と、叫ぶ男の聲を耳にした。直ぐに「どういたしまして。誰がそんな手に乗るもんですか」といふ、瞳の聲を聞いた。と同時に颯とドアが開いて廊下へ飛び出して来たのは瞳だつた。瞳の眼は鋭く、階段の途中にゐる虎行を發見してゐた。——彼女は眼で、速く部屋へ這入れと示した。そして一旦階段の方を向いた彼女の足は、反對の方へ向つたと思ふ間もなく、廊下を一散に走り去つた。瞳の姿が、廊下の角から消えた時、虎行は、そこに、全身を怒りに燃え立たせた、父を見出したので

あつた。

「あッ！」

危うく叫ばうとしたのを、彼は唇に噛みしめて、栗鼠のやうに階段を駈け昇つて行つた。

そこへ、隣りの應接室から、高行と出合頭に飛び出したのは、安住だつた。

「ど、どうなすつたんです？」

「どうもかうもない。あの女怪しからん奴ぢや。——どつちへ行き居つた？」

「逃げたんですか。」

「君は、何んのために同行して来たんぢや。あいつが、この部屋を逃げ出してゆくのを、知らん奴があるか。」

「たしかに、あちらです。」

「捕まへてくれ。」

安住は、なかば高行に對する面目なさから、まん丸になつて廊下を走つた。

X

X

X

X

X

「大丈夫よ。そんなに心配しなくツても。」

「でも、もしか親父が警察へ訴へたら……」

「まア、とても臆病な方ね。平氣だから、何事もあたしにまかせておけばいゝのよ。」
夢にも想はなかつた、突然の騒動が持上つてから、一時間の後、二人はソファーに並んで掛けたまゝ、
午前二時の時計を聞いた。

ト

「そんな馬鹿な眞似をするもんですか。お父さんにも、名譽といふものがあるぢやありませんか。それに、どう考へたつて、理窟はこつちにあるんですもの。」

「いくらこつちに理窟があつても、親父はかうと思つた事は、仕遂げずにはおかない性分だからね。」

「安心してらっしゃい。歸りがけに、伊東さんに——あんな馬鹿な忤は、二度と再び家へは入れん。——と云つたお父さんの言葉、あれが全てを語つてるぢやないの。お父さんは、あんなを、あたしに下すつたのも同じよ。ねえ、もう何んにも心配する事はないから、落着いてゆつくりお休みなさい。」

「本當に大丈夫かしら？」

「あたしが保証してよ。あんなのお父さんにだつて、親子の情は、有り餘るくらゐ有る筈よ。たゞそれが、いままで、何もいふ人がないばかりに、あんなの上に、現はれて來なかつただけなの。本當から云へば、目上の人に、あんな口を利いて悪いことは、あたしだつて百も承知してゐただけど、云はなければ、判つていたぢやないと思つて、随分ひどいことを云つちやツたんだわ。——だからあんなのお父様が、お怒りなつたのも、決して無理ぢやないの。」

「瞳さん。」

「え？」

「夜が明けたら、すぐにこゝを越さない？」

父 と 父

「いやんなつちやうわね。お互に好いてりや、純も不純もありやアしないぢやないの。あたしなんかさう思ふね。どうせ人生五十年のうち、いゝところは、たつた十年だもの。氣の向いた儘に暮さなきゃ損だつて。」

「そりやアまア、さう云やさうかも知れねえが、はつきり、さうばかりも云へねえよ。腫さんにして見りや、虎ちゃんは、砂利の中から掘り出した、ダイヤモンドのやうなもんなだからなア。ちつとだつて、疵は附けたかねえんだらうよ。」

牡丹げし、ゼラニウム、フリージア、さうした草花が或は扇面形に、或は龜甲形に、或は國旗模様、様々な技巧を盡して植込まれた、日比谷公園の花壇の一隅に在るベンチは、多くの場合、戀を囁く男女のために、極めて親切な役目を果してゐるのであるが、今夜は聊か勝手の違つた二人を、その腕木でささへなければならなかつた。——一人はベイちゃん、一人はやつぱりその仲間に、カルメンの紳名で通

つてゐる某デパートのショップ・ガール龍子であつた。

「そんなもんかしら、ねえ。」

「そんなもんだらうよ。何しろ腫さんの氣持は、おれにや判るな。大事なく、虎ちゃんの爲めなら、世間の奴等を、みんな敵にしちやつてもいゝツツていふ、あの氣持は。——」

「そりやアあたしにだつて、あの氣持は判るさ。判ればこそ、明日の大役を引受けたんぢやないか。」

「そんならもう、あんまり、いやんなちやうなんてことは、いふなよ。お互にこの役だけは、成功させなきゃならないからなア。」

「さしづめ、軍縮會議の全權ツてとこだね。」

「背負ツちやいけねえ。それ程の事アねえさ。何しろ、世間にや、どんな偉い人だか知れねえが、どつちも相手は爺さんぢやねえか。」

「だからさ。爺さんだけに、却て難ケしいんだよ。相手が若けりや、あたしや朝飯前だと思つてるんだけどねえ。」

「ふん、色仕掛はひでえぜ。」

「相手次第さ。でも、その手で濟めア、一番樂なんだがねえ。」

「何しろ明日は、起きたら直ぐに行く方がいゝぜ。」

「八時にや向ふへ着くつもりだから、時間は大丈夫よ。――」

「だが、五百圓は、いくらなんでもちつと阿漕だねえ。」

「さうでもねえさ。金持の五百圓はおれ達の五十錢にもつつかはねえんだもん。無いところから取るな悪いが、有るところから取るんなら、ちつとも構やしねえよ。おまけに、親子の間柄なんだからな。」

「あたしも、さう思つて引受けたんだけど、片手と切り出すにや、よつ程顔の皮がいたるね。」

「割方弱氣なことをいふんだな。ふだんは随分押すくせに。」

「あたしにだつて、人情はあるからねえ。」

「あれだ。人情もへちまも、そんなこと云つてる時ぢやねえよ。どうせこんなこと、好き好んで引受ける仕事ぢやねえんだから、ちつたア厚くならなけりや、第一、氣だけで顔負けしちやうにきまつてらアな。」

「でも、取れると思つてる？」

「無理にも、さう思はなけりや、駄目なんだ。」

「あたしや、底を割つたところ、半分だと思ふね。五百圓の半分の三百圓。」

「こつちの出方次第だが、半分ぢや、頼まれ甲斐がねえや。」

「だつて、何しろこの不景氣ぢやないか。」

「不景氣なんてこたア、金のねえ奴がいふ言葉だぜ。有る身になつて見りやア、景氣も不景氣も、そんな區別はねえよ。」
「何しろ、頑張るにや頑張るよ。」
「さうしろよ。腕の見せどころなんだ。」
梅雨にしては珍らしく晴れた空の、月が皎々と花壇の上を照らしてゐたが、さすがに十時近くの本チの上は、スパンクレープの上着から、肌に着く露が冷かつた。
「一本どうだい。」

二

青山南町五丁目の、水菓子屋の角を曲つて二丁ばかり、やがて坂路へ降りようといふ左側の一角に、コンクリートの塀をめぐらした、和洋折衷の一構へ、さして広い家ではないが、主人の潔癖性からであらう、格子戸などは花柳地にでも見るやうに、しみひとつないまでに拭き込まれて、整然としたその低い石の門柱に、瀬戸の表札も新しく「醫學博士田村精一郎」――
内地よりも、寧ろ獨逸の方が有名なくらゐる、外科手術で名を賣つてゐる田村博士は、今日の日曜を午

前中だけ、虎の門に在る自分の病院で、外來患者を看てしまうと、いつもの通り、午後からの面會時間、自宅の二階で、和服に兵兒帯といふ、簡単な装でくつろいでゐたのだつた。

博士は先刻からぼんやり、醫事週報に眼を向けてゐたが、今朝、自分が出ると間もなく、訪ねて來たといふ、未知の少女のことが、何んとなく氣に掛つて仕方がなかつた。——その少女が、再び訪ねて來ると云ひ置いて歸つた午後二時が、つひ眼の先きに迫つてゐる今。——

長女の雪子と、次女の瞳とを遺して、先妻が死去した數年間は、周圍から、お子さんもあることだしお一人では何かと御不自由だらうからと、頻りに薦められる後妻問題を、一も二もなく斷つてゐた博士は、天晴れ良き父として、良夫賢妻主義の人達からは、盛んに賞讃の辭を浴びせられたものだつたが、それがどうした魔が魅入つたものか、信州出の、いともくだらない看護婦と道を誤つた結果、世間の風評や何やかやを懼れて、遂に後妻に直してしまつた。それが變に（昔の言葉で云へば、何様にでもなつた氣で、田村家を、我物顔に掻き廻し始めたのだが、大體が田舎出の、上流家庭のことなどは、藥にたくも知らない人物だけに、その頃既に女學校へ通つてゐた長女の雪子や、次女の瞳と、思想的に云つても、相容れる筈はなかつた。だから、雪子が女學校を出ると同時に、陸軍大尉の許に嫁いだのも、謂つて見れば、家にゐるのがイヤだといふ、それより外に原因はなかつたのだ。瞳にしたつて、この「母」と呼ぶにしては、餘りにくだらない相手を、勿論尊敬する氣にはなれなかつたであらう。虎行の場合と

は反對に、正面衝突をして家出をしたのも、到底辛抱がしきれなくなつた結果に外ならなかつた。

その雪子が——滅多に來たことのない雪子が、けふはどうした風の吹き廻しか、午飯が済んだ時分から、飄然と階下へ現はれて、わざと父には會はずに、殊更佛壇の前にうづくまつたりしてゐるのが、博士には、妙に不愉快で堪らなかつた。

後悔なんて言葉が、今更臆面もなく使へるものだとしたら、博士は後妻のことに就ては、かなり深刻な後悔をしてゐるに相違ないが、雪子にすまぬ結婚をさせたことも、瞳が不良少女になつたことも、今は自分の不徳として、さんぐに諦め抜いた擧句だつた。成るやうにしか成らなかつた出來事に就ては、もはや憂鬱に考へる根氣はなかつた。——イヤになると、博士は酒を飲んだ。相當卑怯な手段には相違なかつたが、さうするより外には道がなかつたらしい。

「誰か、お客様よ。」
階下で、突然女中にかう云つてゐる雪子の聲に、博士は耳を澄ました。

「誰もゐないの？」
その間にも、玄關のベルは、盛んに鳴り續けてゐた。

「仕様がないわね。」
そして、バタ／＼と走つてゆくスリッパの音が、廊下に響いた。

「どなた様ですか？」

「あたくし、今朝程伺ひました益田龍子といふ者でございますけど、ちよいと先生にお目に掛りたいと存じまして……」

「あの、御診察ですか。」

「いえ。」

「では、どなたかの御紹介でも？」

そんな應答を、博士はぢつと二階で聴いてゐた。

三

やがて、階段を慌しく昇つて来たのは、小間使のお種だった。

「あの、この方が、お目にかゝりたいと仰しやいました……」

角丸の、金縁を取つた名刺に、近頃流行の宋朝文字で「益田龍子」と記したのを見た博士は、それが何んであるかは、的確に判断出来ないまでも、何かしら、来るべき者が来たやうな、淡い感じが、胸の底から湧いて来るのを覺えた。

「用事は何んだといふのだね。」

「唯、ちよいとお目に掛りたいと仰しやいました……」

「どんな人だ。」

「二十ぐらゐの、洋髪のお嬢さんでいらつしやいます。」

「居ると云つたんだね。」

「はい。長谷川様の奥様が、さう仰しやつたやうでございます。」

「兎に角、應接間へ通しておいてくれ。」

「かしこまりました。」

小間使が降りてゆくと、博士は間もなく、側にあつた葉巻を一本取つて、おもむろに火を點けた。氣になつてゐただけに、未知な少女に會ふ好奇心が、年甲斐もなく妙に博士を愉快にしてゐた。

階下では、應接間へ少女を通して出て来た小間使をつかまへて、雪子が直ぐに話しかけてゐた。

「どこの人なの？」

「初めての方ですから、ちつとも存じません。」

「カフェーの女か何んかぢやない？」

「さア、如何ですか。」

「でもそれにしちやア、少し人馴れてないところもあるわね。——この頃お父様、夜はお早い？」

「大概夕方には、お歸り遊ばしますが……」

「をかしいわね。一體何んでせう。病院の方へ行かないで、こつちへ訪ねて来るなんて。」

「どちらかの、お嬢様でございませう、きつと。」

「速くお茶を持ってツて、もう一度よく様子を觀察してごらんよ。」

「かしこまりました。」

小間使が、お茶を持って、再び應接間へ這入らうとした時、梯子段を強く踏みしめながら、葉巻を啣

へて降りて来た博士は、お種に云つた。

「茶よりも、何か冷い物を持って来てくれ。」

「はい。」

茶盆をそのまゝ持つて、お種が戻つて行くのを見ながら、博士はドアを開けた。そこには、つゝましやかに籐椅子にかけて、正面の油繪を眺めてゐる、美しい少女の姿があつた。

彼女は、博士を見ると、あわてて立ち上らうとした。

「いや、立たんでもいいから、さうしてゐたまへ。——私が田村です。」

博士は極めて無造作に、軽く頭を下げると、そのまゝ椅子に凭れた。それでも彼女は、両手を膝にあて、丁寧な頭を下げた。

「突然お伺ひいたしました。——あたくし、唯今お取次まで、名刺を差上げておきました、益田龍子でございます。」

「今朝も來られたさうですな。」

「はい。日曜でしたもので、朝のうちのほうが、御都合がよろしいかと存じまして……」

「朝は、日曜でもやはり、病院の方へ出かけるものぢやから……で、御用件は何んですね。」

「あとう……」

ちよいとはにかむやうに、眼を俯せた少女を、博士は不審さうに見守つた。

「やはり、診察の件でおいでぢやね。」

「さうぢやございませぬの。」

「ほう、診察の件ではないと。それならひとつ、はつきり云つてくれたまへ。私には見當が附かん。」

「實は少し、秘密でお知らせ申上げたいことがございまして……」

「秘密で知らせる？」

博士の眼は異様に光つた。

父博士が這入った時から、應接間のドアに、耳を付けて佇んでゐたのは、雪子だった。彼女は、偶然に落合つたこの美しい訪問者が、妙に氣になつてならなかつた。——最初自分が出て、診察の用であるか否かを訊いた時、診察だと聞いてゐれば、勿論大して氣にすることもなかつたであらうが、ちよいとお目に掛りたいといふやうな、至極あいまいな言葉だつただけに雪子のヒステリックな神経は、をかしく尖つて、何か聞き出さないと、自分の估券に係はる氣さへしたのだつた。

それにしても、自分の知つてゐる範圍の父は、知人か、紹介状を持つた人にでなければ、決して會ふやうなことはなかつたのであつたが、最初から紹介状もなく、突然訪ねて來た若い女に、如何にも氣輕に會つたのからして、たまに歸つて來た彼女に取つては、不審でならなかつた。——雪子は、内部から洩れる會話を、一言半句も聴きもらずまいとしてゐた。

「その秘密といふのは、どういふことだか、ひとつ聞かせて下さらんか。」
秘密と聞いて、眼を光らせた博士の口調は、急に引きしまつて聞えた。

「でも何んですか、ちよいとお氣の毒のやうな氣がしまして……」

「そんな遠慮はいらんぢやないですか。それがために、わざと一日に二度まで、私を訪ねて來て下さつたあんたなのぢやから。」

「そりやアさうでございませうけど……では先生は、どんなことを申上げましたも、お怒り遊ばすやう

なことは、ございませんか。」

「怒るやうなこと？ さア、怒りはせんつもりだがね。——一體、直接私に關係のある問題ですか。それは？」

「ございませとも。しかも先生のお心持ひとつで、どうにでも解決のつく問題ですの。」

「ほう、これは意外なことを聞くものだ。私の心持ひとつで解決がつく秘密。それア何か間違ひぢやないかな！」

「いゝえ、決して間違ひぢやございません。わたくしそれがために、随分迷ひました擧句、心を決して申上げに伺つたのでございませうもの。」

「決心をして來たのなら、私が怒らうが怒るまいが、そんなことは問題外の筈ぢや。」

「いゝえ。先生に怒つて戴くやうなことですと、折角のあたたくしの心盡しも、何んのお役にも、立たないことになりまますから、このまゝ申上げずに、おいとましてもよろしいのでございませう。」

「いや、怒りはせんよ。まア話して見て下さい。潔く。——」

「ぢやアお話しいたしますわ。——實はあの瞳さんのことでございませうの。」

「瞳のこと？」

博士の聲は、急に鋭かつた。

「まア、お立ちんなるなんて、それぢや先生、お約束が違ひますわ。」
カルメンは、立ち上つた博士の袂を掴んだ。

「いや、そんなことなら、初めから聞かんでも解つとる。」

「お解りですツて？」

「あんな不孝者のことなど、今更耳新しくいふて貰ふには及ばんのだ。」

「でも先生、瞳さんは、いま、死ぬか生きるかの、境においでなんでしょう。」

「死ぬか、生きるか？」

「それでも、お聞きにはなりませんか。」

「……………」

「それも、病氣や、怪我ではございません。瞳さんは、或暴力團長の許に、監禁されておいでなんです。」

「監禁？」

「はい。——これが昨晚おそく、あたくしのところへまゐりました、瞳さんからのお手紙でございます。」

カルメンは、さう云ひながら、唐革のハンド・バッグから小さい洋封筒を取出すと、そのまゝ博士の前に置いた。

「瞳さんのお筆跡はよく御存じでございます。兎に角一應、お読みになつて下さいませ。」
博士の腰は、おのづから、再び籐椅子におろされた。

五

「あんたはこれを、誰に頼まれて來られた？」

封筒のまゝ、テーブルの上に置かれた瞳の手紙を、暫し凝視してゐた博士は、やがて、今までとは反對の重い口調で、龍子に訊ねた。

「誰からも、頼まれはいたしません。あたくしの一存で、お目に掛けた方がいゝと思ひましたので、伺つたのでございますから……………」

「たしかに、それに違ひないですな。」

「まア！ そんなこと、何んで嘘を申し上げますものですか。」

博士は素早く封筒を取上げた。その手はこゝろもち顫へてゐた。

龍子さん。

取急ぎこの手紙を認めます。

あたしいま、思ひも掛けない災難に出遭つて、ある暴力團長の家に監禁されて居ります。けふで丁

度一週間になります。
 あたしは毎日、暴力團長やその子分から、白刃やピストルで脅迫されてゐるんです。ですけどどんなことがあつても、たとへ生命に換へても、貞操だけは死守する覚悟でゐます。これまで人から受けた、不良少女といふやうな誤解を、今こそ解く時だと考へまして――
 この二年間、あたしは一個の瞳として、過ごして來ました。ですが今といふ今は、完全に、田村精一郎の娘瞳として、自分の一身を守り續けてゐるんです。熊井（暴力團長）は、あらゆる手段に訴へて、あたしにイエスの返事を求めてゐます。が、わたしはそれこそ八つ裂きにされても、父の子として、この唇を固く閉ぢ續ける覚悟で居ります。おそらくこのまゝで済まないことは、よく判ります。こんな石庫のやうな、陽の目も通はない三疊の部屋に、食事といへば、これまで口にしたこともないやうな粗食を、しかも日に一度しか與へられてゐないので、暴力的脅迫の一方には、蛇の生殺しといった、卑怯な手段を取つてゐるんです。
 昨晚あたしは、彼等がひそかに話してゐるのを聞きました。それは、お金を五百圓持參することによつて、あたしを放免しようといふことなんです。
 五百圓のお金、もとよりそんな物がいまのあたしに、出来るわけはありません。と云つて、最後の物を與へる氣には、尙更なれないんです。

所詮は「死」だと思つて居ります。親に對して、あらゆる反抗を續けて來たばちが、今こそこの身に報いて來たのだと、觀念するより外はありません。
 おほかた、いゝえ、十が十まで、これがお別れの手紙になることと思ひます。もしもあなたが、いつの日にか、父にお會ひの機會がありましたら、瞳は心からお詫をして、死ぬまで娘のまゝで通してゐたことを、せめてものお詫のしるしにして戴きたいと、父にお傳へ下さいませ。
 この手紙は、肉屋の御用間に頼んで投函して貰ひます。
 御機嫌よう。

悲しき瞳より

龍子さま御許

おそらく新聞の、折り込みであらう。十ヶ月拂ひと書いた家具屋の、黄色い廣告紙の裏面に、鉛筆の走り書も無造作に、細かい文字が連らねてあるのだつた。
 同じ文字を、二度まで繰返して讀んでゐた博士は、その紙片を元通りに封筒に入れると、更に聲を低くして、龍子に訊ねた。
 「この暴力團長の家といふのを、あんたは御存じぢやらうか。」
 「いゝえ。」